笛吹市文化財調査報告書　第32集

山梨県笛吹市

馬 場 遺 跡

（仮称）笛吹市境川観光交流センター整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合
笛　吹　市　教　育　委　員　会
公益財団法人山梨文化財研究所

序

本書は平成 27 年度に実施された馬場遺跡（笛吹市境川町寺尾）の発掘調査報告書です。

本遺跡では弥生時代末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡８軒と方形竪穴遺構１基などが確認されました。同時期の遺跡は隣接する前付遺跡や北原遺跡、諏訪尻遺跡などでも確認されており、曽根丘陵上の平坦地に多くの集落が存在したことがわかってまいりました。

笛吹市ではこれまで『甲斐国千年の都』として、岡・銚子塚古墳や竜塚古墳などの前期古墳から姥塚古墳などの後期古墳、県下最古の寺院である寺本廃寺跡、甲斐国分寺跡・国分尼寺跡などの官営寺院を紹介してまいりました。本遺跡はまさに『甲斐国千年の都』の始まりの時期に当たり、この地域の歴史を解き明かす上でも貴重な資料になるのではないかと期待されます。

発掘調査にあたり、ご理解・ご協力を賜りました甲府・峡東ごみ処理施設事務組合、ご指導・ご協力を賜りました山梨県教育委員会はじめ関係諸機関、発掘調査においてご不便をおかけいたしました地権者各位、猛暑の中、発掘調査に参加いただきました作業員各位並びに調査を担当いただいた公益財団法人山梨文化財研究所の皆様に深く感謝申し上げ、この発掘調査報告書の刊行の序文に代えさせていただきます。

平成 28年 3月

笛吹市教育委員会
教育長　**坂　本　誠二郎**

例　　言

1. 本書は、山梨県笛吹市境川町寺尾地内に所在する馬場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、（仮称）笛吹市境川観光交流センター建設に伴うものであり、甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合の委託を受けた公益財団法人山梨文化財研究所が発掘調査・整理作業・報告書作成を行った。
3. 発掘調査は、2015（平成27）年７月１日から着手し、同年９月30日まで行った。なお、整理作業については発掘調査に併行して着手し、2016（平成28）年３月25日まで実施した。
4. 本書の執筆は、第１～３、６章を望月秀和が行った。第４章は自然科学分析、第５章はテフラ分析の成果報告を掲載した。本書の編集は望月が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真および遺物写真は、望月が撮影した。
6. 発掘調査および整理作業のうち一部の調査・業務について、以下の機関に委託ならびに協力を得た。

基準点・航空測量	株式会社テクノプランニング
自然科学分析	株式会社パレオ・ラボ
テフラ分析	公益財団法人山梨文化財研究所

7. 本報告書に係わる出土品および記録図面・写真などは、一括して笛吹市教育委員会で保管する。
8. 参考文献については、第４章は各項の末尾に、それ以外は第６章末尾に掲載した。
9. 本遺跡の発掘調査および整理作業にあたっては、以下の諸機関･各位から多大なるご指導･ご協力を賜った。ここに記して深く感謝の意を表する次第である。

甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、
長沢宏昌、今福利恵、保坂康夫、櫛原功一、中山誠二、小林健二、稲垣自由、宮澤公雄、河西 学、黒沼保子、
佐々木由香、末木 健、野崎 進、森原明廣、室伏 徹、岡野秀典、猪股喜彦、瀬田正明　（順不同・敬称略）

凡　　例

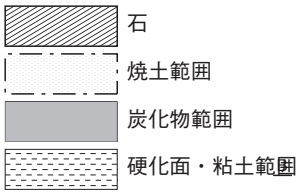
1. 調査グリッドについては、世界測地系平面直角座標第Ⅷ系のＸ＝-46000.000、Ｙ＝8720.000（北緯35度35分07秒､東経138度35分46秒）を基点とし､10ｍグリッド（Ｘ軸Ａ～Ｇ､Ｙ軸１～７）を設定した。各遺構平面図中に示す方位は､すべて座標北を示している。なお､真北方向角は－０度３分28秒となる。
2. 出土遺物については通し番号を付しており、本書中の各図版に掲載した番号はすべて一致している。
3. 遺構の略記･縮尺、および遺物実測図の縮尺は以下の通りである。各図版中には、使用する縮尺のスケールを示した。遺物図版中で縮尺を変更した遺物は、該当する縮尺のスケールに〔 〕をつけて対応する遺物番号を表記した。

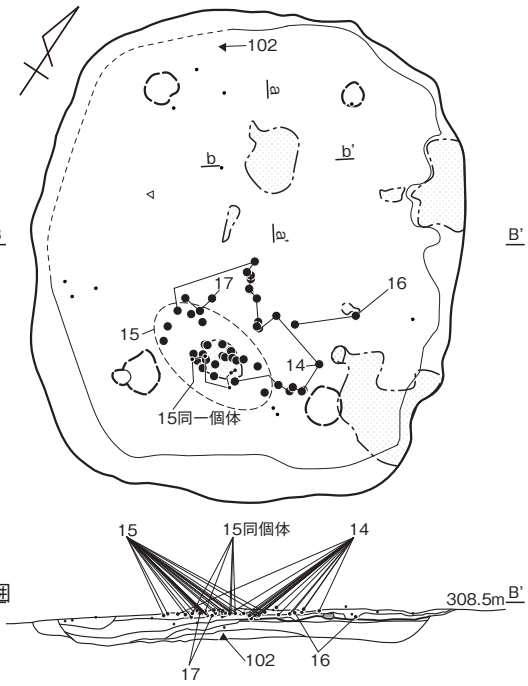
遺構略記	竪穴住居跡（SI）	土坑（SK）	溝（SD）	ピット（Pit）
遺物縮尺	竪穴住居跡：1/60	竪穴住居跡内施設・ピット等：1/30	調査区全体図：1/300	
遺物縮尺	縄文土器：1/2、土師器・須恵器・陶器：1/3、石器：1/1、1/3			

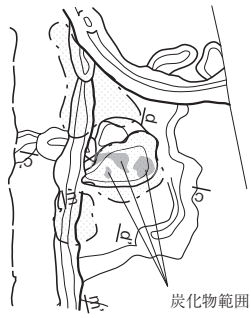
4. 遺構図版中の遺物分布図のマーク、スクリーントーンの凡例、および遺物図版中の使用したスクリーントーン凡例および調整痕等の表現、法量計測箇所については、右図の通りである。
5. 遺構図中に示した遺物実測図は、任意の縮尺であり統一していない。また、接合関係は実線で繋いで示した。また同一個体と推定するものは「同一個体」と表記している。
6. 遺構図版中および遺物観察表中の色調名は、農林水産省技術会議事務所監修　1990『新版　標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄）、尚学図書・言語研究所　1986『色の手帳』 小学館によっている。
7. 本書で用いた地図は、国土地理院発行「甲府」1/200,000（第３図）、境川村発行「都市計画基本図５･8」1/2500（第４図）である。

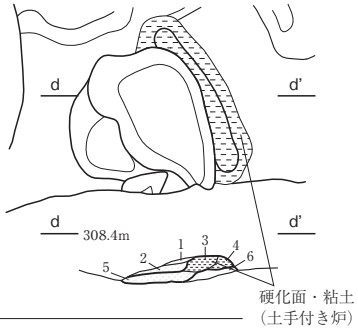
〈遺構図〉

▲ 縄文土器
● 弥生土器、土師器
■ 須恵器
○ 土師質土器
◇ 陶器
△ 石器
☆ 土製品
・ 未実測遺物

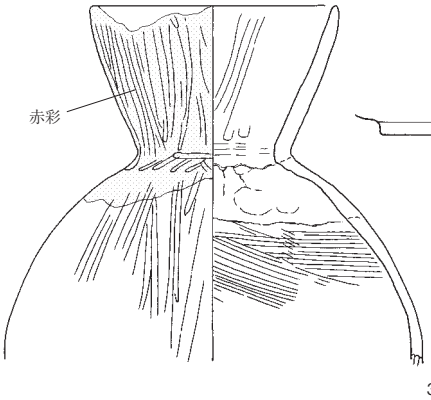


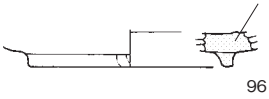


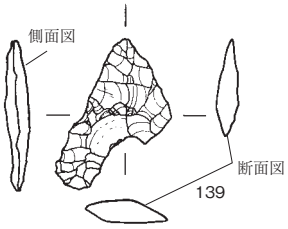


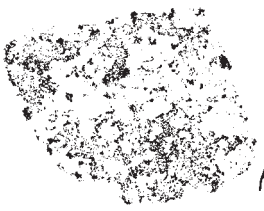


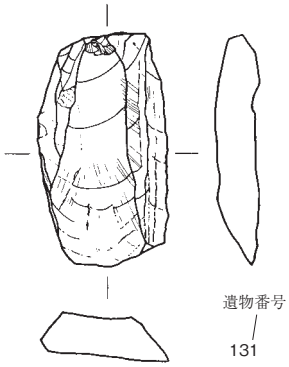
〈遺物図〉











対象の遺物 ―〔131〕

縮尺 (1:3) 0 10cm

目　次

例　言・凡　例

第１章　序　説 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 2
　第３節　調査方法 …… 3
第２章　遺跡の立地と環境 …… 6
　第１節　遺跡の位置 …… 6
　第２節　地理的環境 …… 6
　第３節　歴史的環境 …… 8
　第４節　周辺の遺跡 …… 8
第３章　発見した遺構と遺物 …… 13
　第１節　竪穴住居跡・方形竪穴 …… 13
　第２節　ピット …… 17
　第３節　耕作痕等 …… 17
　第４節　遺構外出土遺物・石器 …… 18
第４章　自然科学分析 …… 43
　第１節　放射性炭素年代測定 …… 43
　第２節　馬場遺跡出土炭化材の樹種同定 … 47
　第３節　馬場遺跡の竪穴住居跡から出土した炭化種実 …… 53
第５章　テフラ分析 …… 55
第６章　総括 …… 59
　第１節　検出した遺構の年代と分布 …… 59
　第２節　遺物の出土傾向について …… 59
　第３節　遺構の特徴について …… 60
　第４節　出土遺物の組成について …… 60
　第５節　まとめ …… 61
引用・参考文献 …… 62
おわりに …… 62
抄録・奥付

表　目　次

表１　周辺の遺跡一覧 …… 9
表２　出土遺物観察表（土師器・陶器・土製品類）…… 32
表３　出土遺物観察表（縄文土器）…… 34
表４　出土遺物観察表（石器）…… 34
表５　出土遺物重量表（土器類）…… 61

図　目　次

第１図　調査区周辺の地形および試掘トレンチ配置図　4
第２図　基本層序 …… 5
第３図　遺跡の位置 …… 7
第４図　遺跡の範囲と周辺の遺跡 …… 10
第５図　調査区全体図 …… 11・12
第６図　SI1 遺構図 …… 19
第７図　SI2 遺構図 …… 20
第８図　SI3・4 遺構図（1）…… 21
第９図　SI3・4 遺構図（2）…… 22
第10図　SI3・4 遺構図（3）…… 23
第11図　SI3・4 遺構図（4）…… 24
第12図　SI5・7・8 遺構図（1）…… 25・26
第13図　SI5・7・8 遺構図（2）…… 27
第14図　SI5・7 炉遺構図 …… 28
第15図　SI5・7 ピット遺構図 …… 29
第16図　SI6 遺構図 …… 30
第17図　SI9、Pit 遺構図 …… 31
第18図　SI1 出土遺物 …… 35
第19図　SI2 ～ 4 出土遺物 …… 36
第20図　SI5 出土遺物（1）…… 37
第21図　SI5 出土遺物（2）…… 38
第22図　SI6 ～ 8 出土遺物 …… 39
第23図　Pit、遺構外　出土遺物 …… 40
第24図　縄文土器（1）…… 41
第25図　縄文土器（2）・石器 …… 42
第26図　遺構別出土遺物組成図 …… 61

写真図版目次

〈遺構写真〉
図版１　１．調査区遠景
　　２．調査区遠景
図版２　１．調査区全景（モザイク写真）
図版３　１．調査区全景　２．調査前状況　３．調査区近景
　　４．調査区北東端　５．調査区近景
図版４　１．SI1 確認状況　２．SI1 検出状況
　　３．SI1 遺物・炭化物出土状況
　　４．SI1 遺物出土状況　５．SI1 出土遺物〔13〕
　　６．SI1 掘り方　７．SI2 確認状況
　　８．SI2 遺物出土状況
図版５　１．SI2 検出状況　２．SI2 炉　３．SI2 炉断面
　　４．SI2 炉断面　５．SI2 掘り方
　　６．SI3 確認状況　７．SI3 断面
　　８．SI3・4 床面検出状況
図版６　１．SI3・4 完掘状況　２．SI3・4 掘り方
　　３．SI3 炉断面　４．SI3 炉完掘状況
　　５.遺物出土状況〔131〕　６.出土遺物(旧石器)〔131〕
　　７．SI3 確認状況　８．SI3・4 遺物出土状況
図版７　１．SI4 遺物出土状況　２．SI4 出土遺物〔23〕
　　３．SI4 柱穴・炉跡確認状況
　　４．SI4 炉粘土周堤確認状況　５．SI4 完掘状況
　　６．SI4 掘り方　７．SI4 炉断面
　　８．SI4 炉完掘状況
図版８　１．SI5・7・8 完掘状況　２．SI5・7・8 掘り方
図版９　１．SI5 断面
　　２．SI5 遺物出土および焼土堆積状況
　　３．SI5 内堆積焼土断ち割り状況
　　４．SI5 内堆積焼土断ち割り状況
　　５．SI5 完掘状況　６．SI5 炉断面
　　７．SI5Pit4 半截状況　８．SI5Pit4 遺物出土状況
図版10　１．SI6 完掘状況　２．SI6 調査状況
　　３．SI6Pit1 半截状況　４．SI6Pit1 遺物出土状況
　　５．SI6 掘り方　６．SI7 遺物出土状況
　　７．SI7 遺物出土状況　８．SI7 完掘状況
図版11　１．SI7 炉　２．SI7 炉　３．SI8 確認状況
　　４．SI8 完掘状況　５．SI9 検出状況
　　６．SI9 完掘状況　７．Pit1 半截状況
　　８．Pit1 完掘状況
図版12　１．Pit2 遺物出土状況　２．Pit2 検出状況
　　３．Pit3 完掘状況　４．Pit4 検出状況
　　５.調査区南西端(旧SD1)　６.調査区南東端(SD2)
　　７・８．調査風景

〈遺物写真〉
図版13　出土遺物　(1) SI1~4
図版14　出土遺物　(2) SI4~5
図版15　出土遺物　(3) SI5~8
図版16　出土遺物　(4) Pit2、遺構外
図版17　出土遺物　(5) 縄文土器、石器

第１章　序　説

第１節　調査に至る経緯

馬場遺跡は、東側に広がる前付遺跡・大祥寺遺跡とともに、笛吹市境川町寺尾集落の沢を挟んだ南側の台地上に位置する。この台地上において、平成18年３月、甲府市、笛吹市、山梨市、甲州市によるごみ処理施設の建設が計画され、平成18年５月より埋蔵文化財取り扱いに関し、協議されてきた。

平成19年６月25日から９月21日にかけて笛吹市教育委員会により、馬場遺跡を含めた第１次試掘調査が行われ、その後、平成20年11月17日から12月８日までの間、第２次試掘調査が実施された。続いて、平成23年４月25日より８月18日までの間、ごみ処理施設への進入路工事に伴う試掘調査が実施された。馬場遺跡地内にかかる道路拡張部においては遺構検出に至らなかったため、当該道路拡張計画地については本調査対象外とした。

ごみ処理施設の建設範囲に決定した前付遺跡・大祥寺遺跡については、山梨県教育委員会、笛吹市教育委員会、甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合との間で発掘調査に関する協議を進め、平成24年６月26日付けで甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合と笛吹市教育委員会との間で「甲府・峡東地域ごみ処理施設建設における埋蔵文化財に関する協定書」が締結された。平成25年３月５日、両者間において、「甲府・峡東地域ごみ処理施設建設における埋蔵文化財に関する協定書」の一部（発掘調査期間）に関する変更協定書を取り交わしたうえで発掘調査に着手し、平成25年に本調査を実施、平成27年に同調査報告書を刊行している。

今回の馬場遺跡発掘調査は、ごみ処理施設建設に付随して計画された（仮称）笛吹市境川観光交流センター整備事業に伴い実施したものである。調査は、建物建設範囲約1500㎡を対象に、笛吹市教育委員会の監理の下に、甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合が費用負担し、公益財団法人山梨文化財研究所が調査を実施することで、平成27年４月28日に三者協定を締結した。

発掘調査は平成27年７月１日より同年９月30日、整理報告作業を平成28年３月25日まで実施した。その他、本調査にかかる諸手続きおよび調査体制等については、下記のとおりである。

文化財保護法94条に関する埋蔵文化財発掘の通知	平成27年４月１日
文化財保護法92条による埋蔵文化財発掘の届出	平成27年５月20日
埋蔵文化財発掘調査について（通知）	平成27年５月29日
文化財保護法第100条第２項、遺失物法による埋蔵物発見届	平成27年10月９日

調査体制

調査主体　公益財団法人山梨文化財研究所
理事長　冲永 佳史
所長　萩原 三雄
調査員　望月 秀和（公益財団法人山梨文化財研究所）
事務局　林 紀子、柳本 千恵子（公益財団法人山梨文化財研究所）

発掘調査参加者

岩崎 誠至、河西 町男、小林 森雄、高原 南洋、近山 辰男、筒井 聡、手塚 松雄、平賀 早苗、深沢 修、三浦 幸栄、望月 一正、渡辺 智之、渡辺 三男 〔帝京大学〕大嶺 拓也、北村 侑士、中島 一成、三橋 友暁

整理作業参加者

池田 美樹、岩崎 満佐子、梶原 薫、川口 三和、岸本 美苗、櫛原 ゆかり、斉藤 ひろみ、佐野 眞雪、末木 美保、須田 泰美、武井美知子、平賀 早苗、原野 ゆかり、藤原 五月

監理機関　笛吹市教育委員会

第２節　調査経過

馬場遺跡の発掘調査は、甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合より業務委託された公益財団法人山梨文化財研究所が平成27年７月１日より着手し、同年９月30日まで実施した。

対象地はかつては耕作地で、（仮称）笛吹市境川観光交流センター整備事業の用地として笛吹市が取得した後、一部に盛土が置かれている状況であった。

調査は重機による盛土の除去および表土剥ぎが終了した箇所から順次進め、人力によって遺構の精査・掘り下げ・遺物の取り上げ・遺構の記録作業を行い、ラジコンヘリによる空中撮影と写真測量により調査区全体の記録図の作成を行った。これらの調査経過は、下記の調査日誌（抜粋）を参照されたい。

整理作業については、出土遺物の洗浄・注記等の基礎整理を発掘調査に併行して開始し、出土遺物の実測図化等の報告書作成業務については、平成26年度に公益財団法人山梨文化財研究所において実施した。

調査日誌

2015/7/1	（水）	調査着手。重機による表土掘削開始。機材準備。
2015/7/2	（木）	重機による盛土除去・表土掘削（7/2～7/15日）、調査区周辺の環境整備。
2015/7/6	（月）	表土剥ぎ終了箇所から、人力による遺構精査・掘り下げ、調査記録開始。
2015/7/15	（水）	重機による表土剥ぎ終了。
2015/7/21	（火）	精査掘り下げ、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/7/27	（月）	精査掘り下げ、調査区拡張、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/8/6	（木）	重機による調査区東側の耕作面掘り下げ。
2015/8/7	（金）	重機によるSI5・7・8部分の調査区拡張作業（8/7・8）。盛土掘削・廃土移動。
2015/8/10	（月）	遺構掘り下げ、調査区拡張（人力による調査区整形と遺構精査）。
2015/8/13	（木）	夏期休暇（13・14日）。
2015/8/18	（火）	遺構掘り下げ、写真実測作業。
2015/8/26	（水）	SI掘り下げ、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/8/27	（木）	SI掘り下げ、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/8/29	（土）	SI掘り下げ、人力による記録作業、写真実測作業。振替作業日。
2015/8/31	（月）	SI掘り下げ、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/9/1	（火）	8月29日分振替休日
2015/9/2	（水）	空撮準備。
2015/9/3	（木）	空撮、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/9/7	（月）	住居跡柱穴・炉精査。
2015/9/10	（木）	遺構掘り方検出。
2015/9/11	（金）	遺構掘り方検出。炉たち割り、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/9/14	（月）	遺構掘り方検出。炉たち割り、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/9/15	（火）	遺構掘り方検出、人力による記録作業。
2015/9/16	（水）	遺構掘り方検出、人力による記録作業、写真実測作業。
2015/9/17	（木）	機材撤収開始。
2015/9/18	（金）	写真実測作業。
2015/9/19	（土）	写真実測作業。現場作業完了。振替作業日。
2015/9/24	（木）	撤収作業。基礎整理。概要報告書作成。
2015/9/28	（月）	19日分振替休日
2015/9/29	（火）	基礎整理。図面、測量データ整理。
2015/9/30	（水）	基礎整理。発掘調査、作業完了。

第３節　調査方法

試掘調査と調査区の設定について

試掘調査は、甲府・峡東地域ごみ処理施設建設の開発対象範囲となっていた馬場遺跡・前付遺跡・大祥寺遺跡の３遺跡において、笛吹市教育委員会が平成 19 年に 18 箇所、平成 20 年に 23 箇所、計 41 本の試掘トレンチを設定して実施している（第１図）。但し、今回の調査区にかかるトレンチはなく、本調査区に近く弥生時代から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が確認されていた５Tr の試掘情報を参考に調査を進めた。

今回の馬場遺跡の発掘調査は、主に建物構築部分を対象に調査区を設定した。また、調査開始後、調査区外へ遺構が続く状況が明らかとなり、その一部については市教育委員会と現地協議し、拡張して調査を実施した。最終的な調査面積は約 1,547㎡を測った。

なお、今回の調査地点では、畑地として利用されていた際に、耕作物の病気が原因で大量に土の入れ替えが行われた場所であった。この痕跡は表土剥ぎの段階で確認し、調査対象地のほぼ中央部から北西方向へ約 26 m、幅は約 3.5 m～ 7.5 m程、約深さ約 180㎝にわたって撹乱していた。この部分についても大半を重機で除去し、その壁面で遺構の有無や基本層序の観察を行った。

調査の方法

基準点設置は、テクノプランニングが実施した。グリッドについては、世界測地系平面直角座標第Ⅷ系のＸ＝ -46000.000、Ｙ＝ 8720.000（北緯 35 度 35 分 07 秒、東経 138 度 35 分 46 秒）を北西隅の基点とし、10 mグリッド（Ｘ軸Ａ～Ｇ、Ｙ軸１～７）を設定した。各遺構平面図中に示す方位は、すべて座標北を示している。なお、真北方向角は－０度３分 28 秒となる。

調査の手順については第２節のとおりである。今回の調査区は、畑地であった旧表土面から遺構確認面まで深さは 30 ～ 40㎝ほどしかなく、検出した遺構はほぼ床面に近い部分のみであり、遺構プランの検出がもっとも困難であった。

発見した遺構・遺物の記録については、遺構断面図の作成、基本層序および遺構埋土の観察記録、光波測量による平面図作成、遺物の３次元記録、簡易図化システムによる写真測量を実施した。光波測量によって取り上げた遺物以外の小片遺物等は、調査区内に設定した５ｍグリッドごとに取り上げた。

その他、テクノプランニングによるポール撮影、ラジコンヘリによる航空撮影での写真測量をあわせて実施した。なお、今回の調査で用いた測量機器および図化・記録システムは以下の通りである。

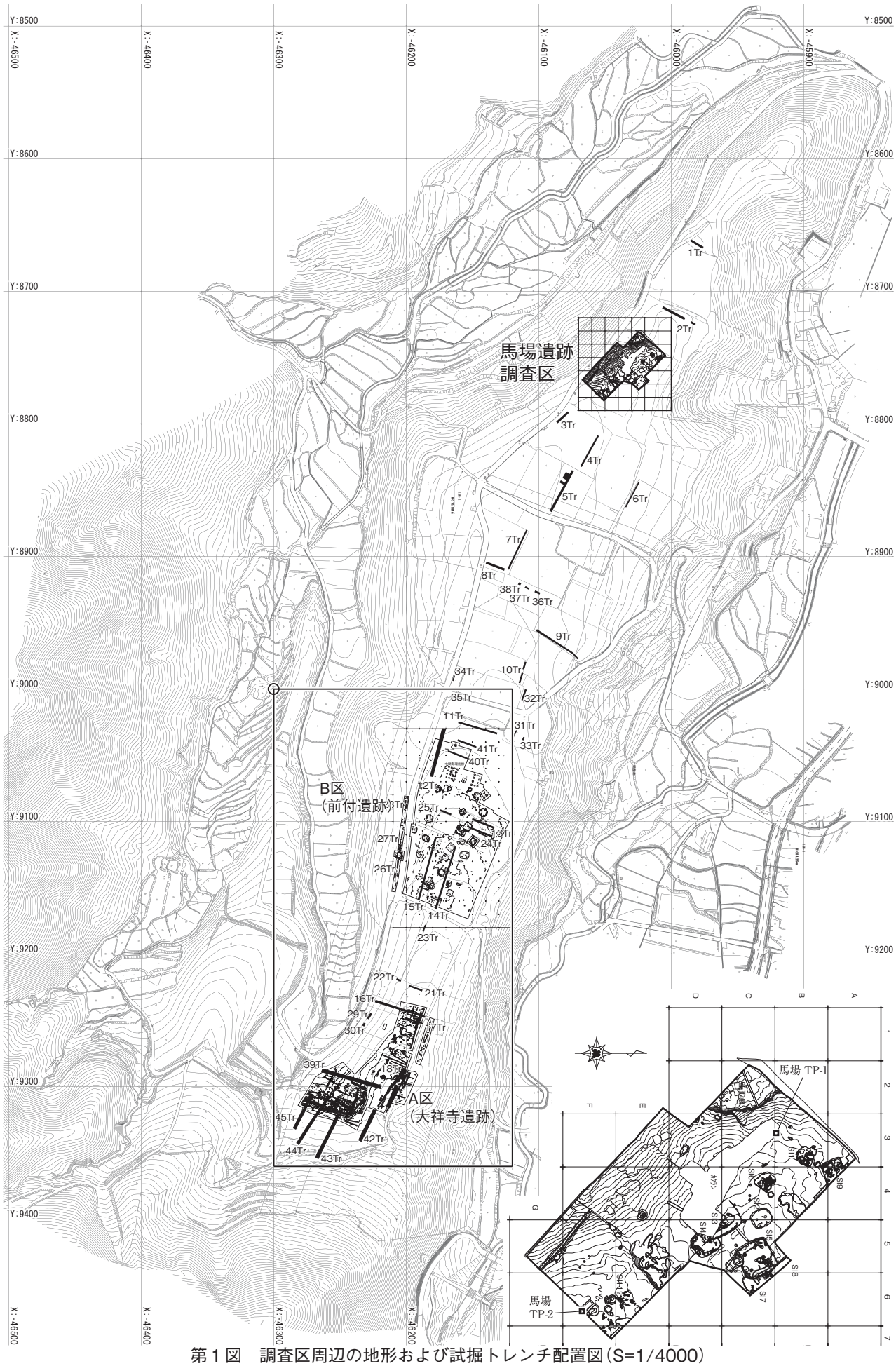
光波測量機器／ TOPCONGPS―Ⅲ、コンピュータ／ PanasonicTOUGHBOOK

取り上げ・図化システム／ CUBIC 社製　遺構くん

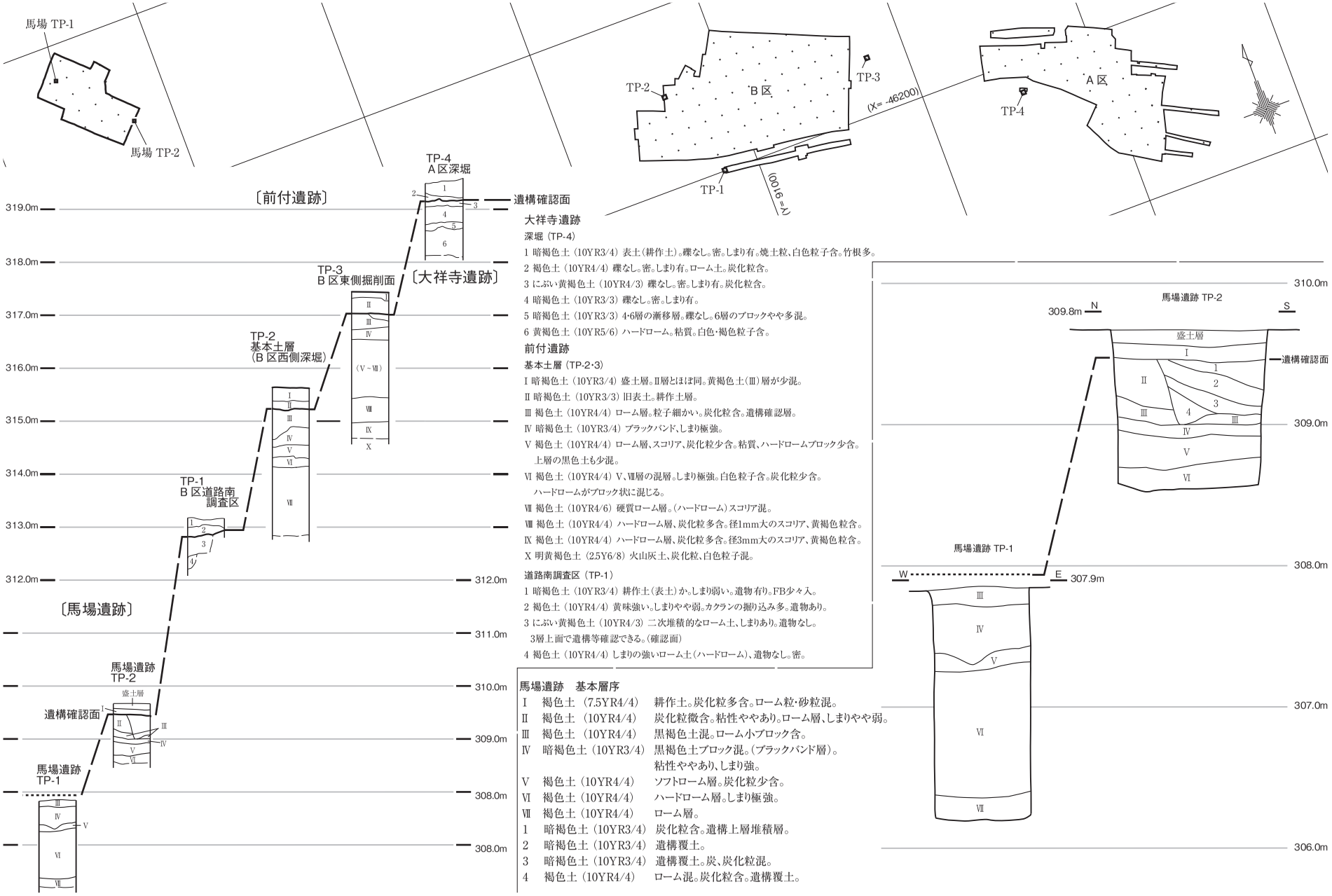
基本層序

基本層序は調査着手時に調査区西側の撹乱壁部分と、調査区東端にサブトレンチを設定して観察を行った。今回はこの２地点で観察した基本層序図と、同じ台地上に分布する遺跡で隣接する前付遺跡・大祥寺遺跡調査報告の層序データを合わせて掲載した層序比較柱状図を作成し（第２図）、各遺構確認面を示した。馬場遺跡においては、東側の TP-1 で確認した遺構確認面（馬場遺跡基本層序Ⅱ層）は、西側の TP-2 では耕作に伴う撹乱で削平されている状況であった。今回の調査区から出土した須恵器片１点を報告した。前付遺跡では８世紀後半段階の遺構・遺物を検出しており、古墳時代以降の遺構・遺物が耕作による撹乱の影響で表層ごと流出している可能性もある。

なお、本調査区においては、前付遺跡基本層序第Ｘ層（橙褐色軽石層（Pm-1））も、調査区南西隅の地表からの深さ約 120㎝ほどで確認している。この土層は、谷を挟んで西側の丘陵地に立地する上の平遺跡発掘調査（第６次）でも確認されている。その他、土層についての詳細は同図を参照されたい。



第１図　調査区周辺の地形および試掘トレンチ配置図（S=1/4000）



大祥寺遺跡

深堀（TP-4）

1 暗褐色土（10YR3/4）表土（耕作土）。礫なし。密。しまり有。焼土粒、白色粒子含。竹根多。
2 褐色土（10YR4/4）礫なし。密。しまり有。ローム土。炭化粒含。
3 にぶい黄褐色土（10YR4/3）礫なし。密。しまり有。炭化粒含。
4 暗褐色土（10YR3/3）礫なし。密。しまり有。
5 暗褐色土（10YR3/3）4･6層の漸移層。礫なし。6層のブロックやや多混。
6 黄褐色土（10YR5/6）ハードローム。粘質。白色･褐色粒子含。

前付遺跡

基本土層（TP-2･3）

Ⅰ 暗褐色土（10YR3/4）盛土層。Ⅱ層とほぼ同。黄褐色土(Ⅲ)層が少混。
Ⅱ 暗褐色土（10YR3/3）旧表土。耕作土層。
Ⅲ 褐色土（10YR4/4）ローム層。粒子細かい。炭化粒含。遺構確認層。
Ⅳ 暗褐色土（10YR3/4）ブラックバンド、しまり極強。
Ⅴ 褐色土（10YR4/4）ローム層、スコリア、炭化粒少含。粘質、ハードロームブロック少含。
上層の黒色土も少混。
Ⅵ 褐色土（10YR4/4）Ⅴ、Ⅶ層の混層。しまり極強。白色粒子含。炭化粒少含。
ハードロームがブロック状に混じる。
Ⅶ 褐色土（10YR4/6）硬質ローム層。(ハードローム)スコリア混。
Ⅷ 褐色土（10YR4/4）ハードローム層、炭化粒多含。径1mm大のスコリア、黄褐色粒含。
Ⅸ 褐色土（10YR4/4）ハードローム層、炭化粒多含。径3mm大のスコリア、黄褐色粒含。
Ⅹ 明黄褐色土（2.5Y6/8）火山灰土、炭化粒、白色粒子混。

道路南調査区（TP-1）

1 暗褐色土（10YR3/4）耕作土(表土)か。しまり弱い。遺物有り。FB少々入。
2 褐色土（10YR4/4）黄味強い。しまりやや弱。カクランの掘り込み多。遺物あり。
3 にぶい黄褐色土（10YR4/3）二次堆積的なローム土、しまりあり。遺物なし。
3層上面で遺構等確認できる。(確認面)
4 褐色土（10YR4/4）しまりの強いローム土(ハードローム)、遺物なし。密。

馬場遺跡　基本層序

Ⅰ	褐色土（7.5YR4/4）	耕作土。炭化粒多含。ローム粒･砂粒混。
Ⅱ	褐色土（10YR4/4）	炭化粒微含。粘性ややあり。ローム層、しまりやや弱。
Ⅲ	褐色土（10YR4/4）	黒褐色土混。ローム小ブロック含。
Ⅳ	暗褐色土（10YR3/4）	黒褐色土ブロック混。(ブラックバンド層)。粘性ややあり、しまり強。
Ⅴ	褐色土（10YR4/4）	ソフトローム層。炭化粒少含。
Ⅵ	褐色土（10YR4/4）	ハードローム層。しまり極強。
Ⅶ	褐色土（10YR4/4）	ローム層。
1	暗褐色土（10YR3/4）	炭化粒含。遺構上層堆積層。
2	暗褐色土（10YR3/4）	遺構覆土。
3	暗褐色土（10YR3/4）	遺構覆土。炭、炭化粒混。
4	褐色土（10YR4/4）	ローム混。炭化粒含。遺構覆土。

第２図　基本層序

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置

馬場遺跡は、山梨県笛吹市境川町寺尾に所在する。笛吹川の左岸、甲府盆地の南端にあたる曽根丘陵上に立地する遺跡である（第１・３・４図）。国道358号線間門交差点から山梨県道308号鶯宿上曽根線に入り、間門川にかかる権上橋の手前を右折して約970mほど進むと、今回の調査地点に至る。尾根（舌状台地）上に立地し、長年畑地として利用されてきた場所であり、果樹や根菜類、植木等の栽培がされていた。調査地点の標高は約309mを測る。

遺跡が所在する笛吹市は、平成16年10月12日に笛吹川流域の６町村（東八代郡石和町･御坂町･一宮町･八代町・境川村、東山梨郡春日居町）の合併により発足した。その後、平成18年８月１日に東八代郡芦川村が編入し、総面積は201.92k㎡（山梨県の面積の約4.5％）、標高は256ｍ（石和町井戸周辺）～1,793m（御坂黒岳）となった。笛吹市域は、北方の秩父山地と大菩薩領、南東の御坂山塊へと連なる急峻な丘陵山岳地帯と、河川によって形成された扇状地帯、および沖積平地帯から構成されており、西方の盆地低部に向かって広がる地形を呈している。市域の多くは、釈迦ヶ岳、黒岳をはじめとして、1,500m級の山々からなる御坂山地の山裾および山地から流れ出たいくつかの河川によって形成された扇状地上に立地する。市名の由来となった笛吹川の本流は、秩父山地より発する延長46.5km、流域面積は1,040k㎡を測る。笛吹川は同市域を西流した後は盆地南辺を流れ、南巨摩郡富士川町鰍沢で釜無川と合流して富士川となり、南下して駿河湾へ注いでいる。また笛吹川には町名の由来である境川をはじめ、鼓川・兄川・重川・日川・金川など複数の支流があり、同市域を特徴づける扇状地形の形成要因となっている。

第２節　地理的環境

馬場遺跡の所在する笛吹市境川町の地形は、御坂山地と盆地端部の急崖をあわせ、「ベンチ形」と例えられている。曽根丘陵上の遺跡のひとつに数えられるものの、「寺尾」の地名どおり、東西約1.4kmの尾根上に立地している。この地形は笛吹川に向かって南東から北西へ流れ込む河川によって、半島状の小丘（舌状台地）が形成されたもので、現在もその尾根筋の両側には蟹沢川・間門川が流れている。

本遺跡はこの半島状の小丘上に立地する前付遺跡に隣接しており、平成27年に刊行した前付遺跡・大祥寺遺跡の調査報告書では、旧石器の出土や縄文時代中期後半および古墳時代前期の集落遺跡や、８世紀後半段階には寺尾の地名の由来に関連する寺院関連遺構の検出と遺物の出土について報告している。地理的な特徴としては、細長い小丘上に広がる遺跡のため、立地環境から河川等の影響を受けない土地という点は共通している。一方、馬場遺跡と前付遺跡では標高は約3.5ｍ、大祥寺遺跡では約10ｍの比高差があり、こうした地理的な環境の差異、たとえば水場や河川までの距離や経路などの生活空間的な違いが、各遺跡で検出した遺構・遺物の様相が異なる要因になったと推定している。

先述のとおり、遺跡の周辺は主に畑地として利用されてきた場所で、果樹や根菜類などの栽培が行われていた。居住域としては尾根下の周辺に数軒が点在しているが、主に調査地の北側にある別の幅広の台地上に住宅地が形成されており、上寺尾・中寺尾地区となっている。

寺尾の由来については、「尾根の上にある寺」の意味で捉えられており、長年にわたり大祥寺の伝承が関連づけられてきた。現在も周辺には大祥寺に関連する場所がいくつかあり、間門地内にある大祥寺の参道入口を示すといわれる凡字石や、上曽根には大祥寺が移転したとする竜華院がある。その他、尾根上の常泉寺、全福寺、間門の竜昌院などの16～17世紀建立の寺院や、日枝神社、諏訪南宮大明神、さらに尾根下にも妙石庵、満願寺など多数の寺社が分布している。なお、凡字石と大祥寺の中間に古宮と呼ばれる箇所があり、この場所に治承年間（1177～1181）に諏訪南宮大神社が建立されたと伝わる。これが武田氏滅亡後に下曽根の福

（国土地理院発行20万分の１を加工・加筆）

第３図　遺跡の位置

歳神社と中寺尾の諏訪南宮大明神に分社されたといわれている。

遺跡の西側には中道往還が通る。山梨県では御坂山塊を境にして甲府盆地側を「国中」、富士五湖・都留・大月側を「郡内」と呼称している。中道はこの両地域を繋ぐ道のひとつであり、現在の山梨県道113号線甲府精進湖線のルートにあたる。かつては右左口宿から右左口峠を越え、古関、精進湖から本栖湖東岸へ抜けて、駿河国へ至る最短の経路であり、古来より甲斐九筋とよばれた古道のひとつに数えられていた。また県南部を流れる富士川の流域は「河内」と呼ばれ、この地域を通って駿河と繋いだのが河内路（駿州往還または甲州往還）である。「中道」の名称は、西には河内路、東には若彦路があり、その中間を通る道であることが由来とされている。

第３節　歴史的環境

遺跡の西側を通る中道往還は、甲斐と駿河を結んだ最短のルートである。このルート上に位置し、甲府盆地の玄関口にあたる中道地域には、120基以上の方形周溝墓を検出した上の平遺跡や天神山古墳や甲斐銚子塚古墳といった東日本屈指の前方後円墳などが形成され、弥生時代後半から古墳時代にかけては墳墓関連遺跡が集中的に分布している。

奈良時代には、古代、甲斐国は八代郡・山梨郡・巨麻郡・都留郡の４郡にわかれており、このうち境川町寺尾地域は、和名類聚抄による八代郡白井郷に属したと推測されている。甲斐国は東海道に属し、内陸国のため支路である甲斐路（御坂路）が横走駅から分岐し、御坂峠を越えて甲斐国府まで結ばれていた。ルートにはいくつかの説があるが、現在の笛吹市域に古代の中枢機関である国衙･国府の推定地や甲斐国分二寺が置かれた。同地域に古墳や官衙に関連する施設が置かれた背景には、山塊を越えで甲府盆地に入る最初の土地、いわば甲斐国の玄関口であり､その場所に古代国家の象徴的建造物を構築することでその権力を示したと考えられる。

境川町寺尾の地名については、『甲斐国志』に「大祥寺アリテ村名ト為ル」とあり、先述のとおり、遺跡名として残る大祥寺が由来と考えられてきた。同じく『甲斐国志』には、大祥寺が吉国山竜華院の前身寺院であり、暦応中（1338～1341）に現在の場所（甲府市上曽根町）に移ったという記載がある。地元の伝承では大祥寺は806年に弘法大師が開基し、寺尾地区は門前集落として栄えたとしている。

「寺尾」については弘治四年（1558）の武田晴信棟別役免許状に「てらおの彦八」と記載されたのが初見で、寺尾の彦八の漆進上などの奉公に対して家一軒分の棟別を免除するというものである。この彦八については、永禄三年（1560）の武田信玄召漆状に触口とあり、漆職人頭であったとしている。『境川村誌』によれば、彦八は八代郡の触頭で、同状に記載されている漆産地のひとつであった七覚に対して漆調達の命を通達していたとする。また寺尾地域についての文書では、天正三年（1575）の武田勝頼藁縄調達状で、寺尾の郷に対して竹木・藁縄などの川除用資材の調達を命じたものがある。これらの資料から、同地域には漆等を扱う職能民や素材を調達できる環境があったことが推察できる。

第４節　周辺の遺跡

笛吹市域には多くの遺跡の存在が知られ、甲府盆地において最も遺跡の分布が濃密な地域である。第４図には遺跡の位置と周辺の遺跡を示し、表１にその概要をまとめている。同図に示したように、調査地周辺に分布する遺跡の多くは丘陵上に占地している。一帯は旧石器が出土する遺跡も分布しており、縄文時代から中世に至るまでの遺跡が周知されている。以下、これまでの報告事例から、時代別に発見された遺構をあげるが、隣接する前付遺跡・大祥寺遺跡については、第６章において触れることにする。

縄文時代

笛吹市側で諏訪尻遺跡（第４図４。以下､同図の遺跡番号のみ表記する)､物見塚遺跡（12)､天神遺跡（14)、甲府市（旧中道町）側では立石遺跡（26）の調査報告がある。諏訪尻遺跡では第２次調査まで実施され、縄

文時代前期後半の住居跡３軒、土坑９基、集石土坑１基を検出している。物見塚遺跡では昭和 59 年に実施した調査で、縄文時代前期の住居跡１軒を検出している。天神遺跡では２次調査まで行われ、縄文時代中期の住居跡２軒（曽利式期・加曽利ＥⅣ式期）、土坑３基を検出している。立石遺跡では旧中道町教育委員会・山梨県教育委員会により調査が実施され、縄文時代前期初頭の住居跡７軒を検出したほか、旧石器時代の文化層を３枚確認している。

その他、笛吹市域には 1,116 点の土偶が出土した縄文時代の一大集落である釈迦堂遺跡群や、県指定有形文化財の渦巻文土器が出土した桂野遺跡のほか、境川町域においても境川の東岸、狐川に形成された扇状地に位置する一の沢遺跡、西原遺跡などで集落の分布がみられる。

弥生時代末～古墳時代前期

笛吹市側で諏訪尻遺跡、物見塚遺跡、天神遺跡、白戸遺跡（16）、北原遺跡（17）、甲府市側では立石遺跡の調査報告がある。諏訪尻遺跡で弥生時代後末～古墳時代初頭の住居跡 17 軒、方形周溝墓１基、低墳丘古墳２基を検出している。物見塚遺跡で弥生時代後期の住居跡１軒、弥生時代後期の土坑２基を検出している。白戸遺跡では方形周溝墓の一部と推定する溝状遺構が確認されている。北原遺跡では２次調査まで行われており、古墳時代前期の住居跡５軒を検出している。立石遺跡では、立石・宮の上遺跡として実施した県教育委員会の調査によって、弥生時代の住居跡 23 軒と方形周溝墓７基、古墳時代の住居跡６軒と方形周溝墓２基を検出している。本遺跡も該当するが、寺尾周辺、および中道地域では古墳時代前期段階に尾根上の平坦地に集落が形成される傾向が窺える。なお、前付遺跡にもかつてはマエツカ（前付塚か）と呼ばれた塚があったと伝わっている。

奈良・平安時代

天神遺跡、物見塚遺跡、諏訪尻遺跡などで遺構・遺物を検出しているが、周辺では希少な事例となっている。

周辺地域では奈良時代の遺構は確認されていなかったが、天神遺跡においては、平安時代２軒、土坑１基、溝１条を検出している。また、溶融した鉄が付着した粘土塊の出土や、物見塚では土坑から鞴羽口が出土するなど、鍛冶行為の痕跡も看取される。諏訪尻遺跡では、遺構外遺物として土師器坏、灰釉陶器坏、須恵器片が出土し、周辺では希少な事例となっている。

中世・近世

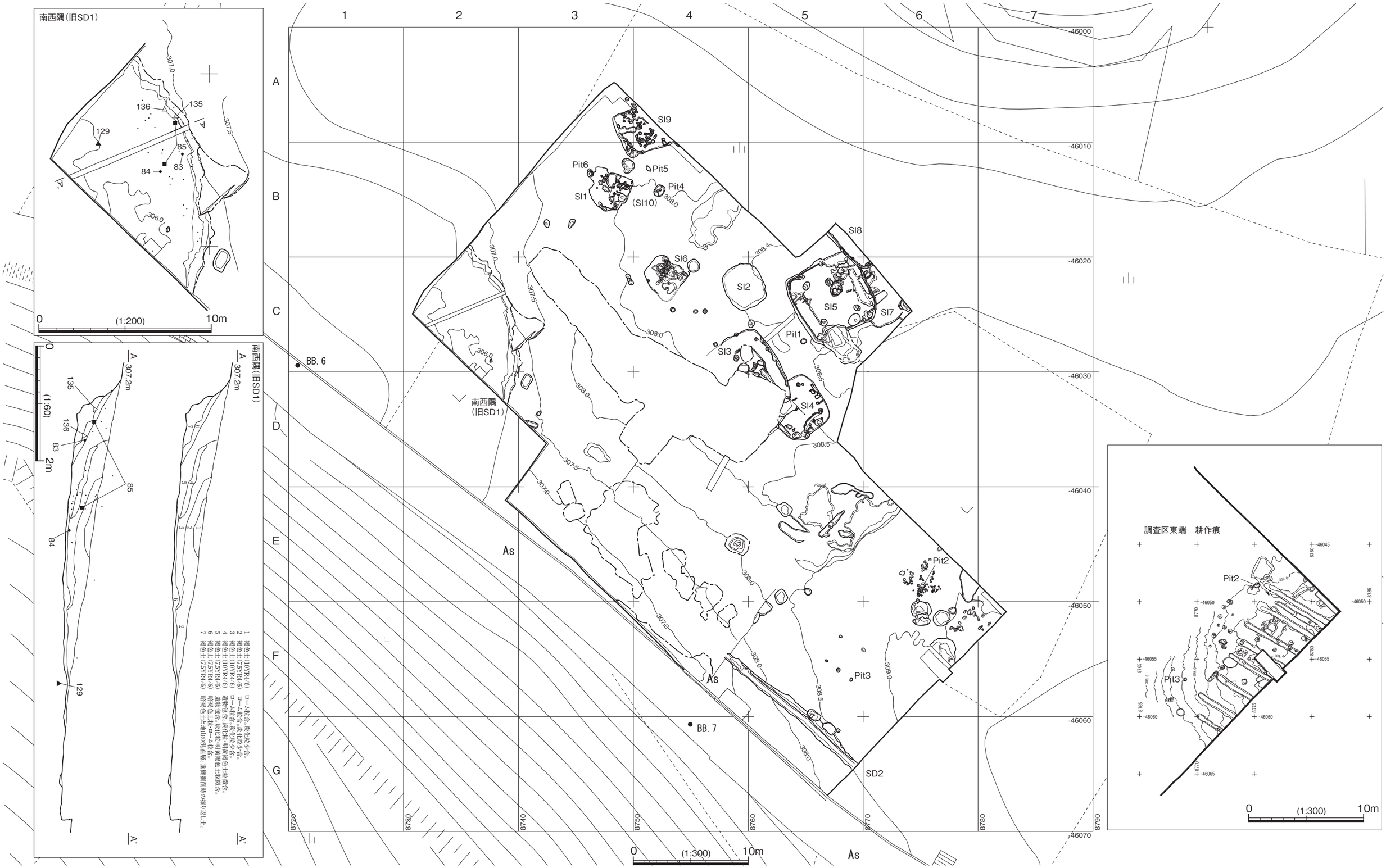
調査事例は少ないが、大祥寺遺跡のほか、天神遺跡で墓壙１基、諏訪尻遺跡で焙烙等の遺物を検出している。その他、中寺尾経塚（15）は、中世段階の経塚である可能性もある。

経石に関しては、立石北遺跡で一字一石経塚が出土し、同町内の晴雲寺に奉納されている。近年では笛吹市内に所在する甲斐国分寺跡の史跡整備に伴い、現国分寺が移転する際にも一字一石経が発見されている。文政 10 年（1827）の銘がある「薬師経石塔」という石塔を移動した後、その下と思われる場所で発見したという。また、大祥寺遺跡では、土坑より「金剛般若波羅蜜経」と「大悲心陀羅尼」と推定される経文が書かれた 1,325 点の経石が出土し、経石埋納遺構として報告している。

表１　周辺の遺跡一覧

位置	No.	遺跡名	時期	市内No.
笛吹市	1	馬場遺跡	縄文・弥生・古墳	131
	2	前付遺跡	縄文・弥生・古墳	132
	3	大祥寺跡	平安・中世	133
	4	諏訪尻遺跡	縄文・弥生・古墳	70
	5	天神山遺跡	縄文・弥生・古墳	71
	6	下原遺跡	縄文～平安	72
	7	飯潰一号墳	古墳	73
	8	飯潰二号墳	古墳	74
	9	飯潰遺跡	中世・近世	75
	10	天神前遺跡	縄文・古墳～平安	76
	11	北ノ山遺跡	縄文・弥生・古墳	121
	12	物見塚遺跡	縄文・弥生・平安	122
	13	物見塚古墳	古墳	123
	14	天神遺跡	縄文・弥生・平安	124
	15	中寺尾経塚	中世?	125
	16	白戸遺跡	縄文・平安	126
	17	北原遺跡	縄文・弥生・古墳	127
	18	坂下遺跡	縄文・弥生・古墳	128
	19	上原遺跡	縄文・弥生・近世	129
	20	上の平遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳	135
甲府市	21	熊久保遺跡	縄文・弥生・古墳	38
	22	諏訪前南遺跡	縄文・古墳	32
	23	諏訪前北遺跡	縄文	33
	24	諏訪前西遺跡	弥生・古墳	34
	25	北原遺跡	縄文・弥生・古墳	35
	26	立石遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳	36
	27	馬乗窪遺跡	弥生・古墳	37
	28	別所遺跡	縄文	31
	29	無名墳	古墳	56
	30	無名墳	古墳	57
	31	無名墳	古墳	95
	32	無名墳	古墳	96
	33	無名墳	古墳	97
	34	心経寺横手遺跡	平安	102

第４図　遺跡の範囲と周辺の遺跡


南西隅(旧SD1)
0 (1:200) 10m
南西隅(旧SD1)
0 (1:60) 2m
1 褐色土(10YR4/6) ローム粒含、炭化粒少含。
2 褐色土(7.5YR4/6) ローム粒含、炭化粒少含。
3 褐色土(10YR4/6) ローム粒含、炭化粒少含。
4 褐色土(10YR4/6) 遺物包含、炭化粒・明黄褐色土粒微含。
5 褐色土(7.5YR4/6) 遺物包含、炭化粒・明黄褐色土粒微含。
6 褐色土(7.5YR4/6) 明褐色土粒・ローム粒含。
7 褐色土(7.5YR4/6) 明褐色土・地山の混在層、重機掘削時の掘り返し土。
SI1
SI2
SI3
SI4
SI5
SI6
SI7
SI8
SI9
(SI10)
Pit1
Pit2
Pit3
Pit4
Pit5
Pit6
SD2
BB. 6
BB. 7
南西隅(旧SD1)
As
0 (1:300) 10m
調査区東端　耕作痕
0 (1:300) 10m

第5図　調査区全体図

第３章　発見した遺構と遺物

今回の調査区では、竪穴住居跡８件（SI1~8）、方形竪穴１（SI9）、ピット６基を検出した。今回の調査区は耕作の影響で遺構の遺存状況が悪く、検出した遺構は、貼床と掘り方および遺物の分布範囲から推定したものである。そのため、遺構図は遺存していた範囲であり、復元または推定した部分は破線等で示した。

また調査時にSI10とした遺構については、焼土の堆積や遺物の分布状況から住居跡を想定したものの、他の遺構のような明確な床面や掘り方が確認できず、整理段階に遺構と断定できないとした。なお、SI10とした出土遺物については、遺構外出土資料として報告している。

その他、一括遺物としてとりあげた資料のなかには、押型文などの縄文時代早期段階の土器があり、同地域での分布状況を確認することができた。しかし当該期の遺構は検出できず、後世の遺構覆土や耕作土からの出土であり、さらには旧SD1などは客土によって混入した可能性も考えられる。

以下、個々の遺構について報告する。

第１節　竪穴住居跡・方形竪穴（SI）

ＳＩ１（第６図、図版４）

位 置　Ｂ－３グリッドに位置する。北側にSI9が近接する。**主 軸**　SI1a：N－48°－E、SI1b：N－20°－E

遺構概要　耕作土を除去した後の遺構確認面で、ほぼ床のみが遺存している状況であった。確認段階では平面形は隅丸方形を呈していたが、掘り方の広がりから遺構が重複していると判断し、古い段階をSI1a、新しい段階の遺構をSI1bとした。ともにほぼ同規模で、一辺2.3～2.5ｍの方形を呈していたと推定する。

貼床は耕作による撹乱が著しく、部分的にしか遺存していなかった。遺構内ではピット２基を検出した。いずれも柱痕は確認できなかった。覆土中から炭化材が出土しているが、上層からの耕作による混在とも考えられ、判別は困難である。なお、SI1Pit1については上面で貼床と同質の粘土が確認でき、床下土坑の可能性も考えられる。

出土遺物（第18図、図版13）　高坏〔1･2〕、坩〔3〕、壺〔4～7〕、台付甕〔8～11〕、甕〔12〕、器台〔13〕が出土した。出土遺物はほぼ床面に集中した。高坏坏部〔1〕は断面の形状が台形を呈し、内外面ともハケメ後にミガキを施している。小型の高坏脚部〔2〕は、外面は赤彩し、ヘラナデ・ミガキを施しており、器面をなめらかに整えている。坩〔3〕は胴部の外面が著しく摩耗しているものの、口縁部の内外面は赤彩してミガキを施してる。内面が黒変し、被熱している可能性も窺える。球胴形の壺底部〔4〕は胴部の器厚は薄く、外面はヘラミガキを斜位または横位に施している。幅広有段口縁壺〔5〕は、口縁部に縦列沈線文４本が４箇所、５本が１箇所の計５単位を施文している。土器編年では大廓式に比定され、他の遺物とは若干年代差があることや、遺構外出土の遺物（SI10としていた箇所のもの）とも接合する。壺〔6・7〕はいずれも摩耗が著しいが、〔6〕は外面に赤彩が残る。小型のＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕とする）〔8〕は、肩部に横方向のハケメがある。台付甕〔9～11〕は、口縁部〔9・10〕、脚部〔11〕のいずれも胎土に２～５㎜大の小礫を含む。器台〔13〕は平底甕の底部を穿孔したような形状で、口径6.7㎝、底径5.2㎝、孔径3.1㎝を測る。隣接する前付遺跡においても同時代の竪穴住居跡（SI27）から出土している。

時 期　古墳時代前期

ＳＩ２（第７図、図版４・５）

位 置　調査区東側、Ｃ－４グリッドに位置する。西側にSI6、南側にSI3、東側にSI5が近接している。

主 軸　西辺：N－29°－E、北辺：N－29°－E

遺構概要　SI1同様、確認面でほぼ床面のみが遺存している状況であった。北西～南東3.9ｍ、北東～南西3.4ｍのやや楕円形を呈す。とくに同遺構周辺は旧地表面からの深さが約20㎝と浅かったため、SI1よりも撹乱が著しく、南側半分はほぼ床面が検出できない状況であった。ただし、炉の痕跡は被熱による硬化面と焼土･

炭化物で確認することができた。

また炭化物・焼土が遺構内に散在しており、焼失住居の可能性が考えられた。特に焼土が壁際に集中していた。なお、同様にSI5でも壁際に焼土が堆積する状況が確認できた。

出土遺物（第19図、図版13） 台付甕〔14～16〕、小壺〔17〕が出土した。台付甕はいずれもハケメが細かく、均一に整形している。口唇部に刻みを入れているが、外面肩部のハケメ整形は〔14〕が主に横位、〔15〕が縦位に施している。脚部〔16〕も厚みがあり、内外面とも細かいハケメ整形を施している。壺または坩〔17〕は、外面はハケメ後ミガキ、底面もミガキを施して器面をなめらかにしている。また底面には種子圧痕（イネ籾痕）が確認できる。なお、出土した炭化物の年代測定では弥生時代後期を示す測定値が示されたが、第４章掲載の分析報告のとおり古墳時代まで年代が下る可能性も示されている。土器の様相についても、他の甕片などよりやや古い様相を呈していることから、弥生時代末～古墳時代初頭と推定しておく。

時　期　弥生時代末～古墳時代初頭

ＳＩ３（第８～11図、図版５・６）

位 置　Ｃ・Ｄ－５グリッドに位置する。北側にSI2が近接している。遺構の南東側は重複するSI4に壊されており、南西側は撹乱により掘削されていた。　**主 軸**　西辺：Ｎ－30°－Ｗ

遺構概要　北東辺以外は撹乱と耕作層により削平されていた。規模は遺存部分の残存値で、北西～南東7.2ｍ、北東～南西3.5ｍを測る。隅丸方形を呈したと推定し、他の遺構と同様に４本柱を推定したが、炉と壁の位置から柱穴を推定した場所には重機による撹乱が入っていた。その他のピットについても明確ではなかった。

炉については、炉床を平坦に整えており、さらにその下層でも焼土の堆積が確認できたことから、修築または作り替えられた痕跡と考える。なお、床構築層の断面観察では高さ約５cmほどの高まりがみられ、北側の壁際から約１ｍ幅でベッド状施設を構築していたと推定した。

出土遺物（第19図、図版13） 高坏〔18・20〕、壺〔19・22〕甕〔21〕が出土している。この他、遺構内およびその周辺に散在したが、耕作による撹乱の影響を強く受けていたと考えられる。また重複するSI4と違い、床面の直上から出土した遺物が少なかった。

高坏の坏部〔18〕は、口縁まで緩やかに内湾するカップ形で、胎土はきめ細かいが小礫が混じる。脚部〔20〕は３か所に穿孔があり、胎土は砂粒が多くやや粗い。壺口縁部〔19〕は器面の摩耗が著しいが、内外面ハケメが確認できる。壺底部〔22〕は、小壺で白色の砂粒を多く含み、胎土もやや粗い。被熱によるものか、内面の大半が剥離している。甕または壺の底部〔21〕は内面にハケメ、底面に木葉痕がある。

時 期　古墳時代前期

ＳＩ４（第８～11図、図版５～７）

位　置　Ｄ－５グリッドに位置する。西側は撹乱と重複するSI3を壊していた。　**主 軸**　Ｎ－35°－Ｗ

遺構概要　規模は北西～南東4.9ｍ、北東～南西4.5ｍを測り、４本柱穴の隅丸方形を呈したと推定する。ピットは５基検出し、そのうち３基（SI4Pit1・2・4）を柱穴と推定した。貼床は約５cmほどの厚みがあり、炉は遺構の中央からやや北側で検出した。南東の壁際は撹乱を受けていたが、２箇所の浅い窪みと、床面に周堤状の高まりが確認できることから、入口があったと推定している。その他、南隅でSI4-SK1を検出した。

炉はSI4同様に炉床を平坦に整え、複数回の修築または作り替えの痕跡があった。また、枕石状に粘土を細長く貼り高めた構造を呈しており、「土手付き炉」であることが確認できる。炉内部およびその周辺では焼土・炭化物が堆積しており、炉内及びその周辺からは炭化した材が採取できた。

出土遺物（第19図、図版13・14） 高坏〔23～26〕台付甕〔27〕、壺〔28・29〕が出土している。

高坏の坏部は内湾するカップ形を呈す。ほぼ完形で脚内部と外面の一部が黒変している〔23〕、および坏部の小片である〔25〕は、内外面にミガキを施している。胎土はそれぞれ異なり、〔23〕はやや粗めで２㎜大の小礫をわずかに含む。〔25〕は粒子が細かくミガキによって器面をなめらかに整えており、外面は黒変

している。坏部が深く、脚部との接合部が細い〔24〕は、小礫をやや多く含む粗い胎土をしている。脚部〔26〕は穿孔が１箇所確認できる。胎土は小礫は含まず、砂粒が多くざらざらしている。台付甕脚部〔27〕は厚みがあり、胎土に小礫が混じる。壺底部〔28・29〕も同じく小礫を含む。

時 期　古墳時代前期

ＳＩ５（第12～15図、図版８・９）

位 置　Ｃ－５グリッドに位置する。SI7・8と重複しており、東側ではSI7を壊し、北側ではSI8に壊されていた。　**主 軸**　Ｎ－29°－Ｗ

遺構概要　規模は北西～南東6.5ｍ、北東～南西6.7ｍ、確認面からの深さは0.3ｍを測る。４本柱穴の隅丸方形を呈し、炉は遺構中央からやや北東に位置する。北西隅および東壁近くは耕作の撹乱で壊されていた。

炉および床面は、複数回の修築の痕跡があった。炉は焼土と炭化物の堆積状況から、焼土が堆積する炉内部も貼床とほぼ同じレベルで硬化面が続き、炉床を平坦に整えていた。この硬化面を除くと、炉の北東側に粘土で貼り高めた土手付き炉の構造を確認した。炉の最下層の炉床にあたる９・10層（第14図SI5炉）は、被熱により硬化した粘土が砕け、炭化物・焼土粒が混在する状況であった。

南東側の壁部ではその一部が撹乱で壊されていたが、断面観察からベッド状遺構を構築していたことが確認でき、さらにその下層から床下土坑（SI5-SK1）を検出した。SI5-SK1およびその上面からは高坏〔60〕、ミニチュア〔61〕、台付甕〔62〕が出土している。

SI2同様に、壁際で確認できた焼土の堆積から、焼失住居と推定した。柱穴は粘質土壌のため、柱痕としてやや斜めに抜き取った形跡が窺えた。さらにSI5-Pit4では柱穴内から台付甕〔52〕が出土していることから、建物焼失後に構築材を抜き取り、その後に土器を廃棄または埋納したことを示している。なお、台付甕〔52〕は内面下部が黒変し、煮炊き等に使用していたものと考えられ、さらに胴部過半の破片がなく周辺からも出土しなかった。この状況から、日常使用していた器を故意に打ち欠き、廃絶時に柱を抜いた跡へ入れ込んだ状況を推定することができる。

出土遺物（第20・21図、図版14・15）　埦〔30～32〕、壺〔33～36・41～45・49・51・58〕、甕〔46～48・50・52～57・62〕、器台〔37・38〕、高坏〔39・40・60〕、鉢〔59〕、ミニチュア〔61〕、焼成粘土塊〔63～66〕が出土した。SI7との重複により、弥生末段階の遺物が若干混在している。

埦は丸底で外面をハケメとヘラケズリし、口縁部をナデ調整した〔30〕と、外面に磨き調整の入る〔31・32〕がある。壺では有段口縁壺〔33～35〕、薄手で胴部下半に穿孔のあるもの〔41〕、加飾口縁〔43〕やボタン状貼付文〔44･45〕、折り返し口縁〔49〕、頸部に粘土紐の加飾帯がつくもの〔51〕などがある。なお、〔35･41〕は外面、〔44〕は内面内側に赤彩を施している。甕では単純口縁の台付甕の他、口縁部に刻みを持つもの〔47･48〕、肩部に横位のハケメが入るＳ字状口縁台付甕片〔50〕が出土した。焼成粘土塊〔63～66〕については、いずれも破片で、〔63～65〕は棒状、〔66〕については土器の加飾に使用した粘土の残りのようである。土器製作との関連性も窺えるが、いずれも用途は不明である。

時 期　古墳時代前期

ＳＩ６（第16図、図版10）

位 置　Ｃ－４グリッドに位置する。東側にSI2が近接している。　**主 軸**　Ｎ－48°－Ｗ

遺構概要　耕作により床構築面まで削平されており、遺構として確認したのはほぼ掘り方の状態であった。規模は残存部で北西～南東約3.2ｍ、北東～南西約3.1ｍを測る。さらに果樹栽培または植栽の影響で遺構中央に根痕が入り、出土した遺物についても、ほぼ撹乱から小片の土器を取り上げる状況であった。炉も確認できず、SI6-Pit1としたピット以外、掘り方まで下げても明確な遺構の痕跡はなかった。

SI6-Pit1から、高坏の坏部のみ〔67〕と坩〔68〕がセットで出土した。共に横位で合わせ口状態で出土した。遺構内の堆積土および土器内部の堆積土を取り上げ、整理段階において土壌洗浄したが、炭化物が混在した

ものの、種子などは検出できなかった。なお、SI5 では柱穴跡のひとつに遺物が埋納または廃棄されていたが、同遺構については、他に柱穴が検出できなかったことや遺物の出土状況から、遺構の性格としては土坑に位置づけられるものと考えておきたい。

出土遺物（第 22 図、図版 15） SI6-Pit1 から出土した土師器高坏〔67〕、坩〔68〕が出土した。高坏は外面はヘラケズリ、内面は中心から見込部、見込部端から口縁にかけての２段階に分けてミガキ調整して丁寧につくられている。坩も同じく丁寧な調整が施されており、外面胴部はヘラナデおよびミガキ、口縁部は内外面にミガキ調整を施している。これらの様相は他の住居跡出土遺物よりやや新しく位置づけられる。その他、同遺構の確認面もしくは掘り方から土師器甕・壺片等が出土したが、小片のため図化しなかった。

時 期 古墳時代前期

ＳＩ７（第 12 ～ 15 図、図版８・10・11）

位 置 Ｃ－６グリッドに位置する。西側を SI5、北側を SI8 に壊されている。

遺構概要 SI5 の東側に硬化面と炉を確認した。規模は SI5・８との重複と東側は調査区外へ広がるため、明確ではない。断面観察では、床面が北西～南東方向に４ｍほど続く状況が確認できる。遺構の形状についても明確ではないが、出土遺物の時期と炉の位置から、SI2 と同様に楕円形を呈していた可能性がある。

炉は「土手付き炉」で、炉の南東側を粘土で貼り高めていた。また他の遺構同様に平坦面の形成と修築の痕跡を確認しており、床面も２段階に貼り直していた。炉堆積土からは炭化種実（イネ）が採取でき、年代測定の結果、弥生時代後期の暦年代に相当した（第４章参照）。

他、調査区壁際で土坑状の掘り込みがあり、遺物〔72〕が出土しているが、耕作による撹乱で掘削された可能性が高い。

出土遺物（第 22 図、図版 15） 土師器壺〔69・70・72〕、土師器鉢〔71〕、土師器甕〔73〕が出土した。壺は加飾口縁壺で、４条の棒状貼付文がついた〔69〕や、これと同個体と推定する〔70〕など、弥生時代末の様相を示す遺物がまとまって出土した。その他、内外面をハケメとヘラケズリで調整した鉢〔71〕・壺底部〔72〕・台付甕の小片〔73〕については、年代的位置づけも難しいが、いずれも撹乱状の掘り込み付近からの出土であり、後から混入した可能性が考えられる。

時　期 弥生時代末～古墳時代初頭

ＳＩ８（第 12・13 図、図版８・11）

位 置 Ｂ・Ｃ－５・６グリッドに位置する。南側で SI5・７を壊している。　**主 軸** Ｎ－ 19°－Ｅ

遺構概要 大半は調査区外にあたるが、隅丸方形を呈す。確認した範囲で北西～南東約 4.9 ｍ、北東～南西約 1.3 ｍ、確認面から床構築面までの深さはおよそ 0.4 ｍを測る。壁際には周溝が巡っている。SI5 壁際に堆積する焼土溜りを削平しており、重複するなかでは最も新しい時期に位置づけられる。調査範囲では炉は確認できず、床面も１面のみで粘土を入れた貼床はなく、粘質でしまりの強い地山面が整地されていた。

出土遺物（第 22 図、図版 15） 土師器高坏〔74〕、甕〔75・76〕、壺〔77〕が出土している。SI6 の出土遺物は全体的に小片で、出土量は少ない。高坏〔74〕は外面にミガキが施され、坏部の内面は被熱により表面がはく離していた。これとともに、Ｓ字甕口縁〔76〕が床面直上で出土している。壺は小片であるが、SI5 で出土した〔51〕と同系のものと推定する。

時　期 古墳時代前期

ＳＩ９（第 17 図、図版 11）

位 置 Ａ・Ｂ－３・４グリッドに位置する。南側に SI1 が近接する。**主 軸** Ｎ－ 23°－ Ｗ

遺構概要 方形を呈すと推定するが、遺構の北東側の大半は調査区外へ広がる。規模は確認した範囲では一辺 4.0 ｍ、確認面からの深さは約 15㎝を測る。耕作による撹乱の影響か、床面等は確認できなかった。

床面が削平されて掘り方のみであった可能性はあるが、掘り方面まで掘削しても明確な柱穴はなく、また、検出した範囲では出土遺物もほとんどなかった。同規模のSI1 やSI2のように炉を推定する焼土や被熱の痕跡も確認できないことから、住居跡と断定せず、方形竪穴とした。時期・性格については不明である。

第２節　ピット（Pit）

Pit １（第17図、図版11）

位　置　Ｃ－５グリッドに位置する。北側にSI5が近接する。

遺構概要　規模は長径52cm、短径43cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは24cmを測る。柱跡や出土遺物はなく、性格は不明である。近代の耕作痕である可能性も考えられる。

Pit ２（第17図、図版12）

位 置　Ｅ－６グリッドに位置する。周辺に他の遺構はなく、耕作により削平されていた可能性もある。

遺構概要　規模は長径44cm、短径40cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは16cmを測る。遺物の出土状況からはSI5と同様で、柱穴内への埋納行為とも考えられる。しかしその上面および周辺は、表土から確認面までわずか20～30cm程の深さであったこともあり、耕作による撹乱の影響が著しく、この遺構以外の住居跡を示すような痕跡は確認することができなかった。

出土遺物（第23図、図版16）　土師器高坏〔78〕、甕〔79・80〕などが出土した。高坏は坏部のみで脚部が欠損していた。外面は黒変しており、被熱によるひび割れなどが確認できた。〔79〕は台付甕胴部の1/4程度の破片であり、これをピット内にボウル状に据え、その上に高坏を重ねた状態で出土した。

Pit ３（第17図、図版12）

位 置　Ｆ－５グリッドに位置する。南側には耕作痕のSD2がある。

遺構概要　規模は長径30cm、短径20cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは75cmを測る。出土遺物はなく、やや抜根した様子が窺えたが、明確な柱痕は確認できなかった。近代の耕作痕である可能性も考えられる。

Pit ４（第17図、図版12）

位 置　Ｂ－４グリッドに位置する。西側にSI4、北側にSI9が近接する。

遺構概要　上部は深さ約10cmほどの窪地で、その中央に柱痕と推定した円形で径18cm、確認面からの深さ50cmのピットを確認した。断面観察では、窪地部分の炭化粒や焼土粒、ロームブロックを含む土の堆積を切るかたちで柱痕が入っており、柱を据え付けて、抜根した痕跡と推定する。

なお、南側には耕作による撹乱が入っており、その部分で土師器壺底部〔87〕が出土した。ただし同遺構との共伴関係は不明である。また同遺構については、調査時にSI10を推定した一部であったが、この他の柱穴の配置や周辺に貼床または掘り方面などが確認できなかったため、単体の遺構と判断した。

Pit ５（第17図）

位 置　Ｂ－４グリッドに位置する。北側にSI9、南側にPit4が位置する。

遺構概要　規模は長径57cm、短径30cmの不整形で、内部とその周辺には焼土が堆積していた。出土遺物はなく、性格は不明で、耕作に伴う撹乱の可能性も考えられる。

Pit ６（第６図）

位 置　Ｂ－３グリッドに位置する。東側でSI1と隣接する。

遺構概要　規模は長径69cm、短径47cmの不整形で、確認面からの深さは38cmを測る。断面は柱材を抜き取ったようにもみえたが根痕の可能性もあり、性格は不明である。出土遺物は縄文土器１点〔103〕が混入していた。

第３節　耕作痕等

調査区南西隅（旧ＳＤ１）（第５図、図版12）

位 置　Ｃ・Ｄ－２グリッドに位置する。調査時に調査区にあわせて方位を示していたため南西隅としたが、方

角では調査区の西にあたる。

遺構概要　重機による掘削跡で、調査区の西隅に扇状に掘削が及んでいた。同地区では方形周溝墓の検出を想定していたため、平面精査の段階ではレンズ状に堆積した部分を溝状のプランとして捉え、遺構名をＳＤと付して調査を進めた。その後、地山面に重機のバケットで掘削した痕跡があり、近代に土の入れ替えを行った跡であることが判明した。ただし、その堆積土からは複数の押型文土器が混在しており、人力により遺物の抽出と堆積状況の記録を行った。

出土遺物（第 23 ～ 25 図、図版 16・17）　土師器甕〔83〕、高坏〔84〕、須恵器甕〔85〕、押型文土器〔104・106・113・115・117・119 ～ 121・129〕を図化した。いずれも重機の掘削後の客土中からの出土である。

ＳＤ２および調査区東側耕作痕（第５図、図版 12）

位 置　SD2 はＦ・Ｇ－４・５、耕作痕は調査区東端で検出した。

遺構概要　畝状の耕作痕および根切り溝として掘削したもので、大祥寺遺跡調査で検出した溝と土坑が重複していた状況（大祥寺遺跡 SD2・4、SK3 ～ 33）に類似した。ただし、土坑状の掘り込みは不整形で、集石はなかった。SD2 も畑地の地境で留まるため、畑の区割りがされた近代以降の耕作痕と推定する。

出土遺物（第 23 図、図版 16）　SD2 から土師器壺〔81・82〕が出土したが、混入したものと推定する。

第４節　遺構外出土遺物・石器

弥生時代末～古墳時代前期（第 23 図、図版 16）

弥生時代末から古墳時代前期にかけての遺物は詳細な時期の比定は難しいが、本調査区における土器様相を示すため、遺構外から出土した土師器壺〔86 ～ 91・95〕、 甕〔92〕、高坏〔93・94〕、陶器皿〔96〕を図化した。なお、〔87・88・91・94〕については、調査時にはＳＩ 10 としていた箇所でまとまって出土したものである。

広口口縁壺〔86〕は包含層（耕作土中）からの出土で、内外面ハケメ調整しており、胎土に２～５㎜大の礫を多量に含む。口縁部の内面に縄文を施文した〔89・90〕は、ＳＩ５・７の拡張部から出土したもので、SI7 に帰属するものと思われる。

縄文時代（第 24・25 図、図版 17）

縄文土器は、遺構覆土からの出土遺物を含め、34 点を図化した。同時期の遺構は検出していないため、ここでは編年ごとにまとめておく。

縄文時代早期では、押型文土器〔97 ～ 120〕が出土した。押型文土器は無繊維で、山形文〔97 ～ 111〕と楕円文〔112 ～ 120〕があり、それぞれ横位と縦位に文様を施文している。早期後半の繊維土器では口縁下に隆帯がつけられ、表面は縄文を施文した〔125〕があり、花積下層式併行の下吉井式の系譜と推定する。他、小片であるが撚糸文〔121〕も出土している。

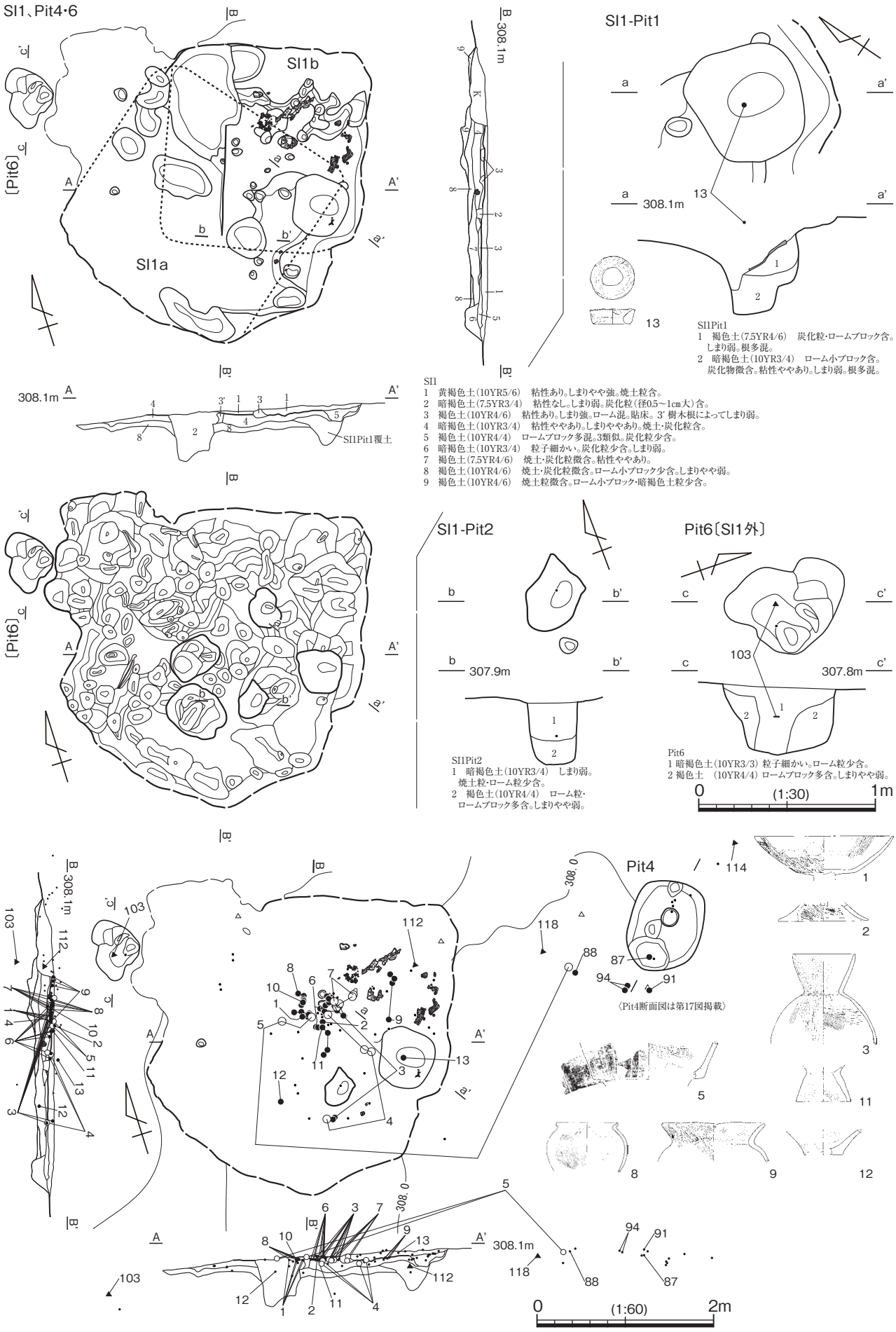
縄文時代前期では、器厚から前期と推定した〔122〕と、いわゆるおせんべい土器〔123〕などが出土している。〔122〕は外面に縄文を施し、補修孔が穿たれている。〔123〕は半截竹管による沈線と、横位隆帯を爪でつまみ上げた突起を施文しており、近隣では立石遺跡や北杜市の甲ッ原遺跡等で出土している。またこれらの事例と同様に、粗製で厚みのある繊維土器〔124〕も本調査区から伴出している。

縄文時代中期は3点と少なく、五領ヶ台式で結節縄文が施されたもの〔126・127〕と、半截竹管で施文した頸部片〔128〕が出土した。他、１点のみであったが、前付遺跡では確認されていない晩期の清水天王山式〔130〕の出土も確認した。

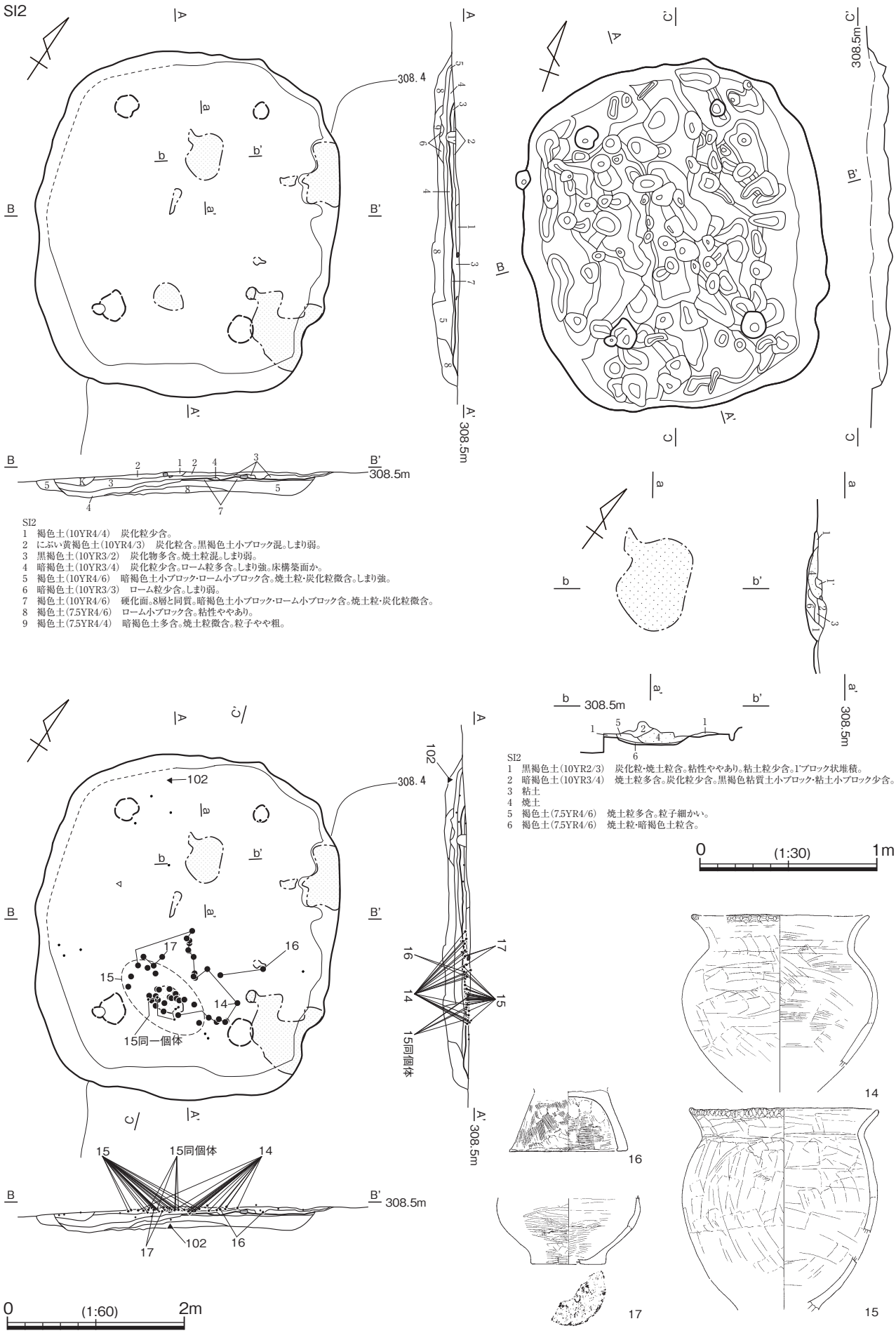
石器（第 25 図、図版 17）

石器は旧石器の石刃状薄片〔131〕、打製石斧〔132〕、凹石〔133〕、石鏃〔134 ～ 140〕が出土し、これを図化した。他、水晶片も出土したが、耕作による撹乱土内からの出土であったので図化しなかった。

なお、縄文時代における遺物の出土状況については、すべて耕作土中層あるいは後世の遺構覆土中に混在していたものである。とくに縄文時代早期の遺物は、重機のバケット痕がみられた旧ＳＤ１（調査区南西隅の埋め土内）に混在していたものが多く、同段階の文化面が耕作によって削平されてしまっていたことも推察される。


SI1、Pit4･6
SI1b
SI1a
〔Pit6〕
308.1m
SI1-Pit1
SI1Pit1覆土
SI1
1　黄褐色土(10YR5/6)　粘性あり。しまりやや強。焼土粒含。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性なし。しまり弱。炭化粒(径0.5～1cm大)含。
3　褐色土(10YR4/6)　粘性あり。しまり強。ローム混。貼床。3' 樹木根によってしまり弱。
4　暗褐色土(10YR3/4)　粘性ややあり。しまりややあり。焼土･炭化粒含。
5　褐色土(10YR4/4)　ロームブロック多混。3類似。炭化粒少含。
6　暗褐色土(10YR3/4)　粒子細かい。炭化粒少含。しまり弱。
7　褐色土(7.5YR4/6)　焼土･炭化粒微含。粘性ややあり。
8　褐色土(10YR4/6)　焼土･炭化粒微含。ローム小ブロック少含。しまりやや弱。
9　褐色土(10YR4/6)　焼土粒微含。ローム小ブロック･暗褐色土粒少含。
SI1Pit1
1　褐色土(7.5YR4/6)　炭化粒･ロームブロック含。しまり弱。根多混。
2　暗褐色土(10YR3/4)　ローム小ブロック含。炭化物微含。粘性ややあり。しまり弱。根多混。
SI1-Pit2
307.9m
SI1Pit2
1　暗褐色土(10YR3/4)　しまり弱。焼土粒･ローム粒少含。
2　褐色土(10YR4/4)　ローム粒･ロームブロック多含。しまりやや弱。
Pit6〔SI1外〕
307.8m
Pit6
1 暗褐色土(10YR3/3) 粒子細かい。ローム粒少含。
2 褐色土　(10YR4/4) ロームブロック多含。しまりやや弱。
0　(1:30)　1m
Pit4
〈Pit4断面図は第17図掲載〉
0　(1:60)　2m

第６図　SI１　遺構図

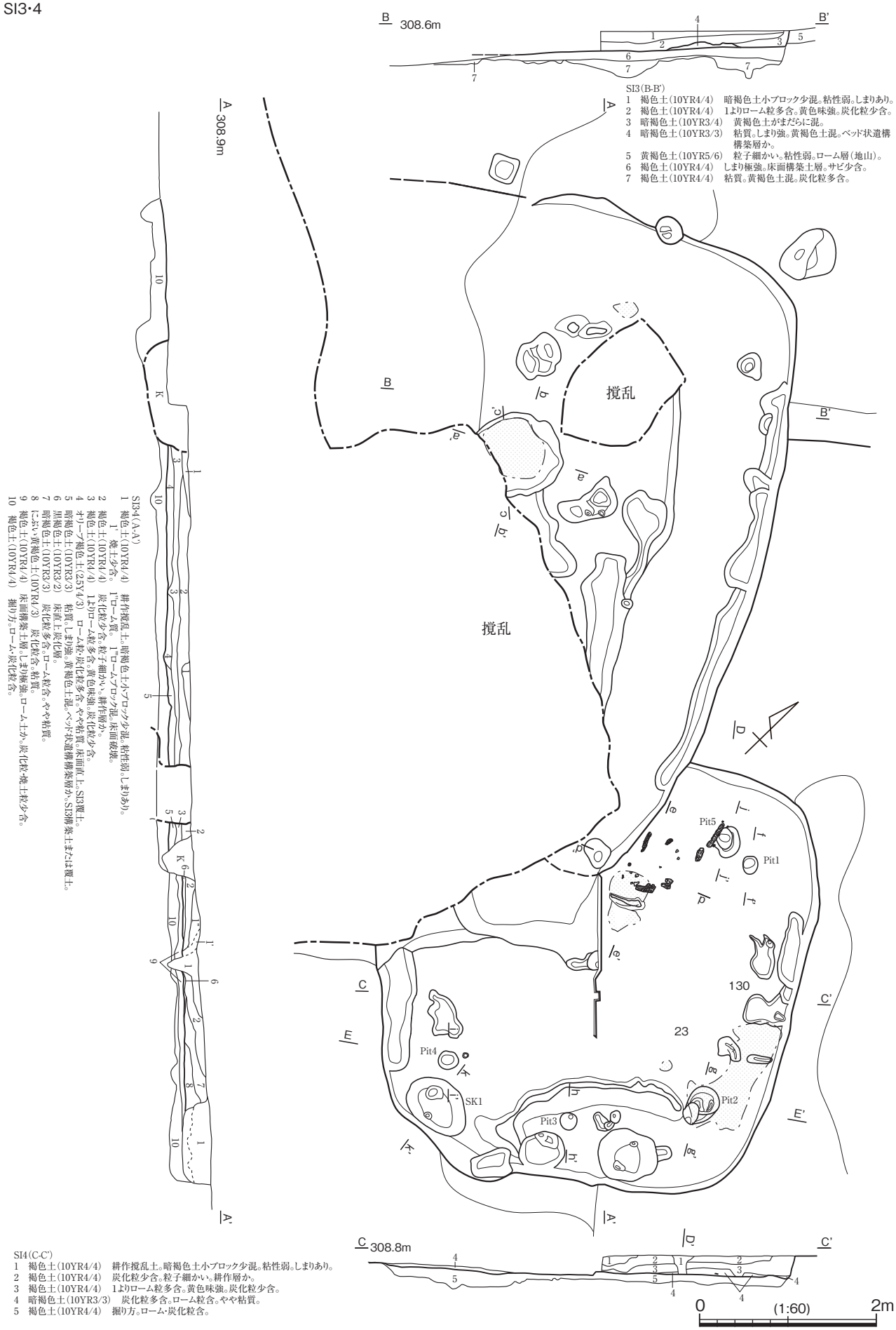


SI2
1　褐色土(10YR4/4)　炭化粒少含。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化粒含。黒褐色土小ブロック混。しまり弱。
3　黒褐色土(10YR3/2)　炭化物多含。焼土粒混。しまり弱。
4　暗褐色土(10YR3/4)　炭化粒少含。ローム粒多含。しまり強。床構築面か。
5　褐色土(10YR4/6)　暗褐色土小ブロック・ローム小ブロック含。焼土粒・炭化粒微含。しまり強。
6　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒少含。しまり弱。
7　褐色土(10YR4/6)　硬化面。8層と同質。暗褐色土小ブロック・ローム小ブロック含。焼土粒・炭化粒微含。
8　褐色土(7.5YR4/6)　ローム小ブロック含。粘性ややあり。
9　褐色土(7.5YR4/4)　暗褐色土多含。焼土粒微含。粒子やや粗。

SI2
1　黒褐色土(10YR2/3)　炭化粒・焼土粒含。粘性ややあり。粘土粒少含。1ブロック状堆積。
2　暗褐色土(10YR3/4)　焼土粒多含。炭化粒少含。黒褐色粘質土小ブロック・粘土小ブロック少含。
3　粘土
4　焼土
5　褐色土(7.5YR4/6)　焼土粒多含。粒子細かい。
6　褐色土(7.5YR4/6)　焼土粒・暗褐色土粒含。

第７図　SI２　遺構図

SI3・4

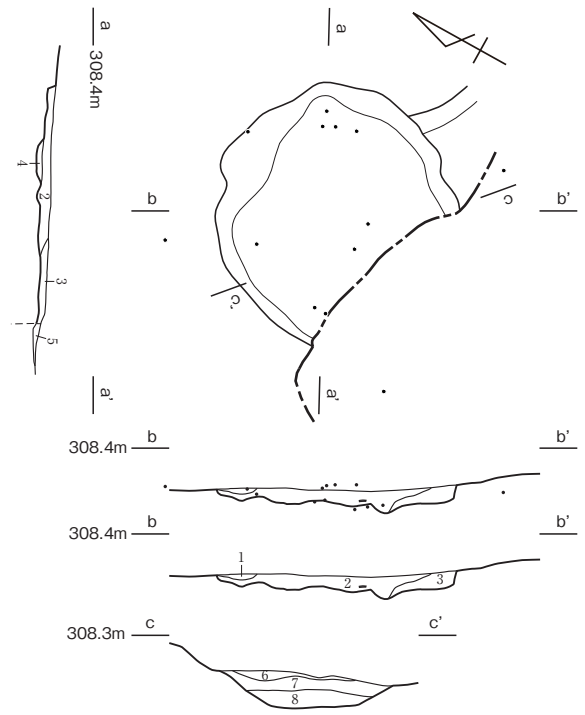


第８図　SI3・4　遺構図(1)

SI3・4遺物出土状況

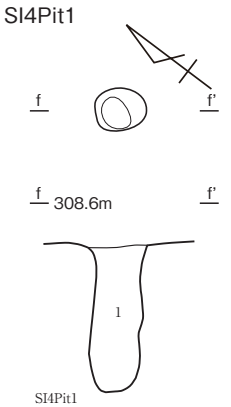
第９図　SI3・4　遺構図(2)

SI3炉



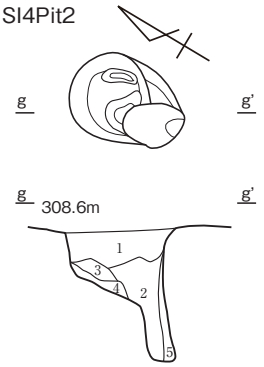
SI3　炉
1　極暗褐色土(7.5YR2/3)　褐色土粒･焼土粒少含。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　ローム小ブロック含。焼土粒･炭化粒多含。
3　極暗褐色土(7.5YR2/3)　焼土粒多含。しまりやや弱。
4　極暗褐色土(7.5YR2/3)　焼土粒多含。炭化粒少含。
5　撹乱
6　焼土層
7　暗褐色土(7.5YR3/4)　ローム小ブロック多含。焼土粒含。しまり弱。
8　褐色土(7.5YR4/6)　ローム小ブロック多含。焼土粒小含。

SI4Pit1



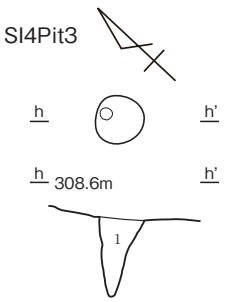
SI4Pit1
1　暗褐色土(10YR3/4)
ローム小ブロック少含。炭化粒微含。

SI4Pit2



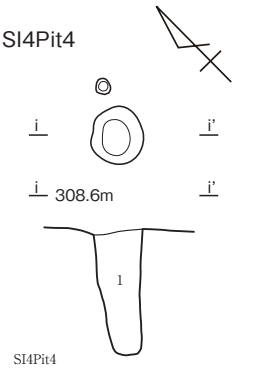
SI4Pit2
1　褐色土(7.5YR4/6)　暗褐色土小ブロック多含。
炭化粒･焼土粒少含。
2　暗褐色土(10YR3/4)　焼土粒･炭化粒少含。
ローム小ブロック含。しまりやや弱。
3　焼土層　暗褐色土小ブロック含。炭化粒微含。
4　褐色土(7.5YR4/6)　焼土粒･炭化粒含。粒子
やや粗。
5　褐色土(7.5YR4/6)　しまり強。

SI4Pit3



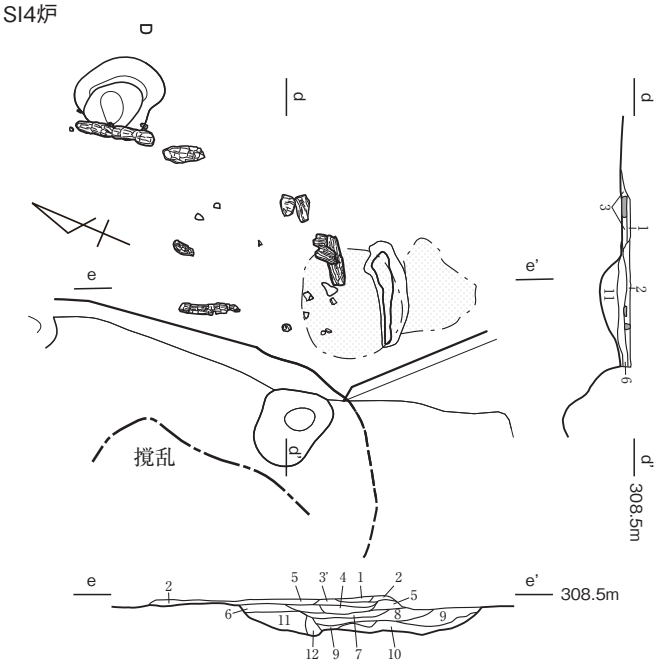
SI4Pit3
1　暗褐色土(10YR3/4)
ローム小ブロック少含。炭化粒微含。

SI4Pit4



SI4Pit4
1　暗褐色土(10YR3/4)
ローム小ブロック少含。炭化粒微含。

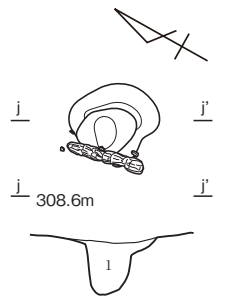
SI4炉



SI4炉
1　明赤褐色土(5YR5/6)　焼土粒多含。炭化粒含。しまり極強。
2　暗褐色土(10YR3/3)　やや粘質。径5mm大の小礫混。焼土粒･炭化粒含。
3　黒色土(10YR1.7/1)　炭化層。炭化材直下。焼土粒少含。3'黒褐色土(10YR2/3)炭化層。
4　明赤褐色土(5YR5/8)　白色粒子多含。しまり極強。被熱、硬化。
5　赤褐色土(5YR4/6)　白色粒子多含。4と同質。被熱、赤色化。
6　黄褐色土(10YR5/6)　4･5と同質。白色粒子極多。
7　赤褐色土(5Y4/8)　焼土。粒子細かい。しまり極強。
8　褐色(7.5YR4/4)･にぶい褐色(7.5YR4/4)の灰堆積層。
9　褐色土(10YR4/4)　粘質。黒褐色土ブロック混。しまり強。
10　赤褐色土(5YR4/8)　焼土。しまり極強。
11　褐色土(10YR4/4)　9類似。黒色ブロック少混。
12　褐色土(10YR4/4)　根痕。

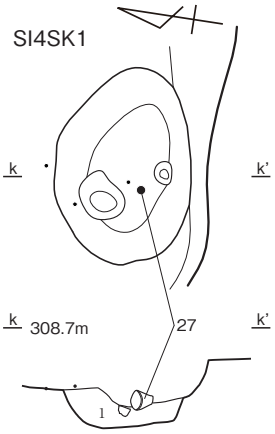
0　(1:30)　1m

SI4Pit5



SI4Pit5
1　暗褐色土(10YR3/4)　黄褐色土がまだらに混。
しまりやや弱。炭化粒少含。

SI4SK1



SI4SK1
1　暗褐色土(10YR3/4)　炭化粒含。
しまりやや弱。黄褐色土少混。

第10図　SI3･4　遺構図(3)

第11図　SI3・4　遺構図（4）

SI5・7(A～D)

SI5

1 褐色土(10YR4/4) 炭化粒少含。黄褐色土混。1'根痕か。
2 褐色土(10YR4/4) 炭化粒含。黄褐色土・黒褐色土混。サビ少含。
3 暗褐色土(10YR3/4) 炭化粒多含。ローム粒・黄褐色土少含。
4 褐色土(10YR4/4) 炭化粒多含。粘質。しまり強。遺物包含。サビ少含。
5 暗褐色土(2.5Y3/3) 炭化粒多含。黄褐色土・黒色土混。しまり強。
6 暗褐色土(2.5Y3/3) 炭化粒多含。黒色土混。ロームブロック少混。しまり強。
7 褐色土(10YR4/4) 粘質。貼床土が混在か。

SI7

8 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 盛土層。
9 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 竹根混入。炭化物多。旧表土層。
10 暗褐色土(10YR3/4) 炭化粒・サビ少含。しまり強。粒子細かい。焼土粒少含。しまり極強。
11 褐色土(10YR4/4) 炭化粒多含。ロームブロック少含。しまり強。
12 黒褐色土(10YR2/3) 炭化層。粘質。床面。

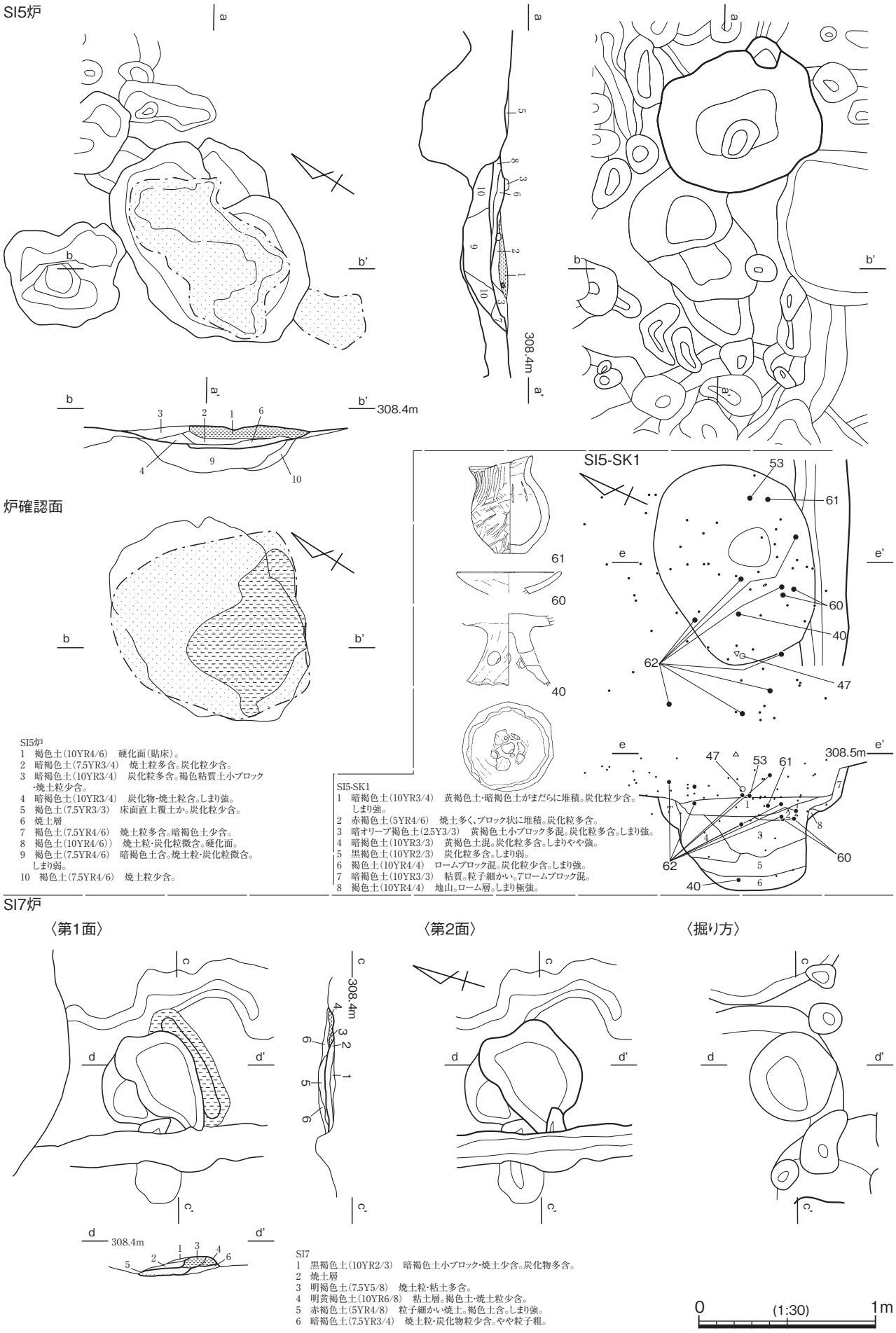
SI5

13 褐色土(10YR4/4) 炭化粒含。しまり極強。
14 暗褐色土(7.5Y3/4) 黒色土混。SI7覆土(12層)か。しまり弱。
15 暗褐色土(7.5Y3/4) 炭化粒多含。粘質。しまり強。炉周辺貼床面。
16 赤褐色土(5YR4/6) 焼土塊、炭化粒少含。
17 褐色土(10YR4/4) 掘り方。
18 暗褐色土(7.5Y3/4) しまり極強。床面層。サビ少含。18'しまりやや弱。
19 褐色土(10YR4/4) 粘質。黄褐色土混。炭化粒多含。
20 褐色土(10YR4/4) 粘質。ローム層。しまり極強。

SI5・7・8 遺物出土状況

第12図 SI 5・7・8 遺構図(1)

第13図　SI５・７・８　遺構図(2)

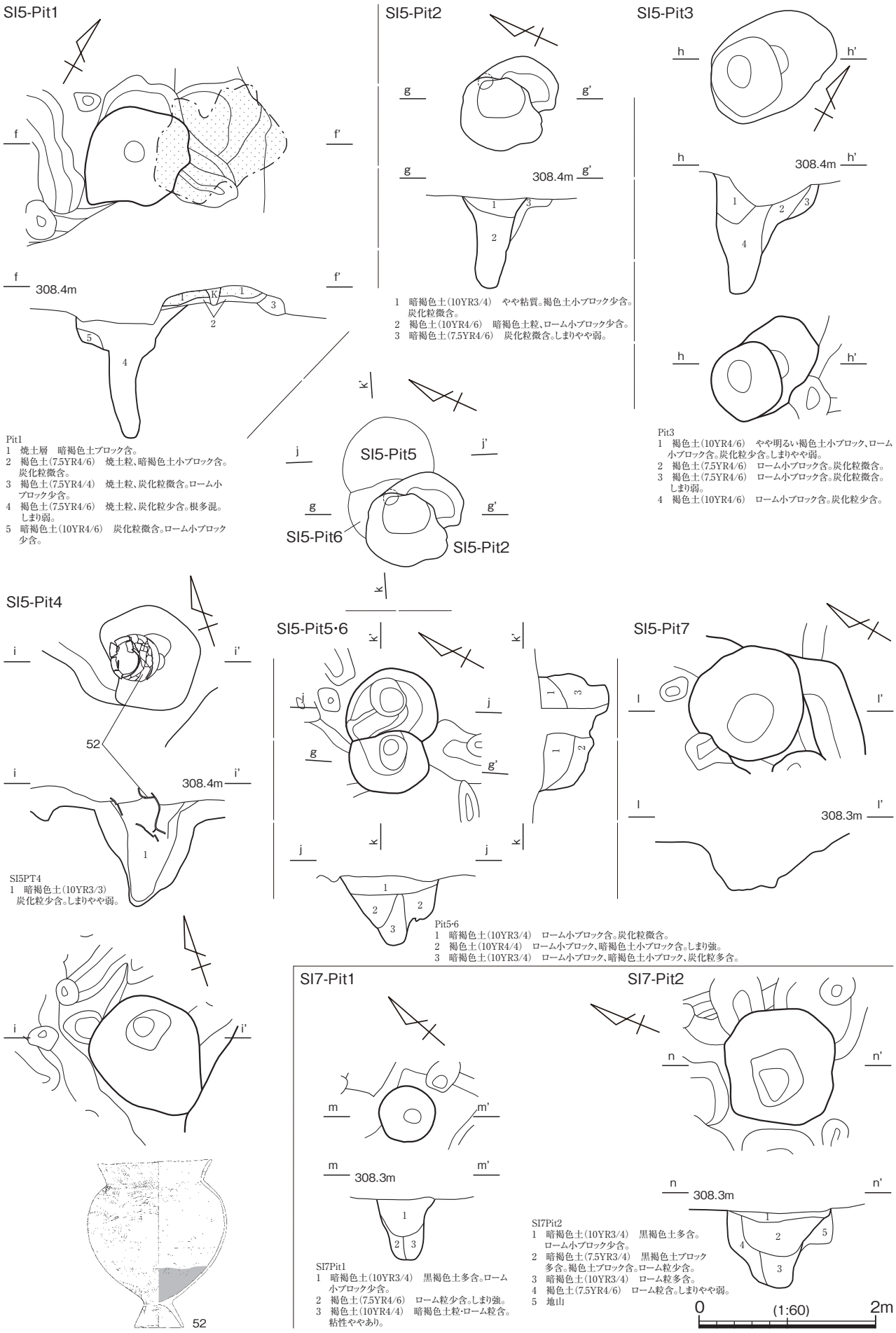


SI5炉
1　褐色土(10YR4/6)　硬化面(貼床)。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　焼土粒多含。炭化粒少含。
3　暗褐色土(10YR3/4)　炭化粒多含。褐色粘質土小ブロック・焼土粒少含。
4　暗褐色土(10YR3/4)　炭化物・焼土粒含。しまり強。
5　褐色土(7.5YR3/3)　床面直上覆土か。炭化粒少含。
6　焼土層
7　褐色土(7.5YR4/6)　焼土粒多含。暗褐色土少含。
8　褐色土(10YR4/6))　焼土粒・炭化粒微含。硬化面。
9　褐色土(7.5YR4/6)　暗褐色土含。焼土粒・炭化粒微含。しまり弱。
10　褐色土(7.5YR4/6)　焼土粒少含。

SI5-SK1
1　暗褐色土(10YR3/4)　黄褐色土・暗褐色土がまだらに堆積。炭化粒少含。しまり強。
2　赤褐色土(5YR4/6)　焼土多く、ブロック状に堆積。炭化粒多含。
3　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　黄褐色土小ブロック多混。炭化粒多含。しまり強。
4　暗褐色土(10YR3/3)　黄褐色土混。炭化粒多含。しまりやや強。
5　黒褐色土(10YR2/3)　炭化粒多含。しまり弱。
6　褐色土(10YR4/4)　ロームブロック混。炭化粒少含。しまり強。
7　暗褐色土(10YR3/3)　粘質。粒子細かい。7ロームブロック混。
8　褐色土(10YR4/4)　地山。ローム層。しまり極強。

SI7
1　黒褐色土(10YR2/3)　暗褐色土小ブロック・焼土少含。炭化物多含。
2　焼土層
3　明褐色土(7.5Y5/8)　焼土粒・粘土多含。
4　明黄褐色土(10YR6/8)　粘土層。褐色土・焼土粒少含。
5　赤褐色土(5YR4/8)　粒子細かい焼土。褐色土含。しまり強。
6　暗褐色土(7.5YR3/4)　焼土粒・炭化物粒少含。やや粒子粗。

第14図　SI５・７炉　遺構図



Pit1
1 焼土層　暗褐色土ブロック含。
2 褐色土(7.5YR4/6)　焼土粒、暗褐色土小ブロック含。炭化粒微含。
3 褐色土(7.5YR4/4)　焼土粒、炭化粒微含。ローム小ブロック少含。
4 褐色土(7.5YR4/6)　焼土粒、炭化粒少含。根多混。しまり弱。
5 暗褐色土(10YR4/6)　炭化粒微含。ローム小ブロック少含。

1 暗褐色土(10YR3/4)　やや粘質。褐色土小ブロック少含。炭化粒微含。
2 褐色土(10YR4/6)　暗褐色土粒、ローム小ブロック少含。
3 暗褐色土(7.5YR4/6)　炭化粒微含。しまりやや弱。

Pit3
1 褐色土(10YR4/6)　やや明るい褐色土小ブロック、ローム小ブロック含。炭化粒少含。しまりやや弱。
2 褐色土(7.5YR4/6)　ローム小ブロック含。炭化粒微含。
3 褐色土(7.5YR4/6)　ローム小ブロック含。炭化粒微含。しまり弱。
4 褐色土(10YR4/6)　ローム小ブロック含。炭化粒少含。

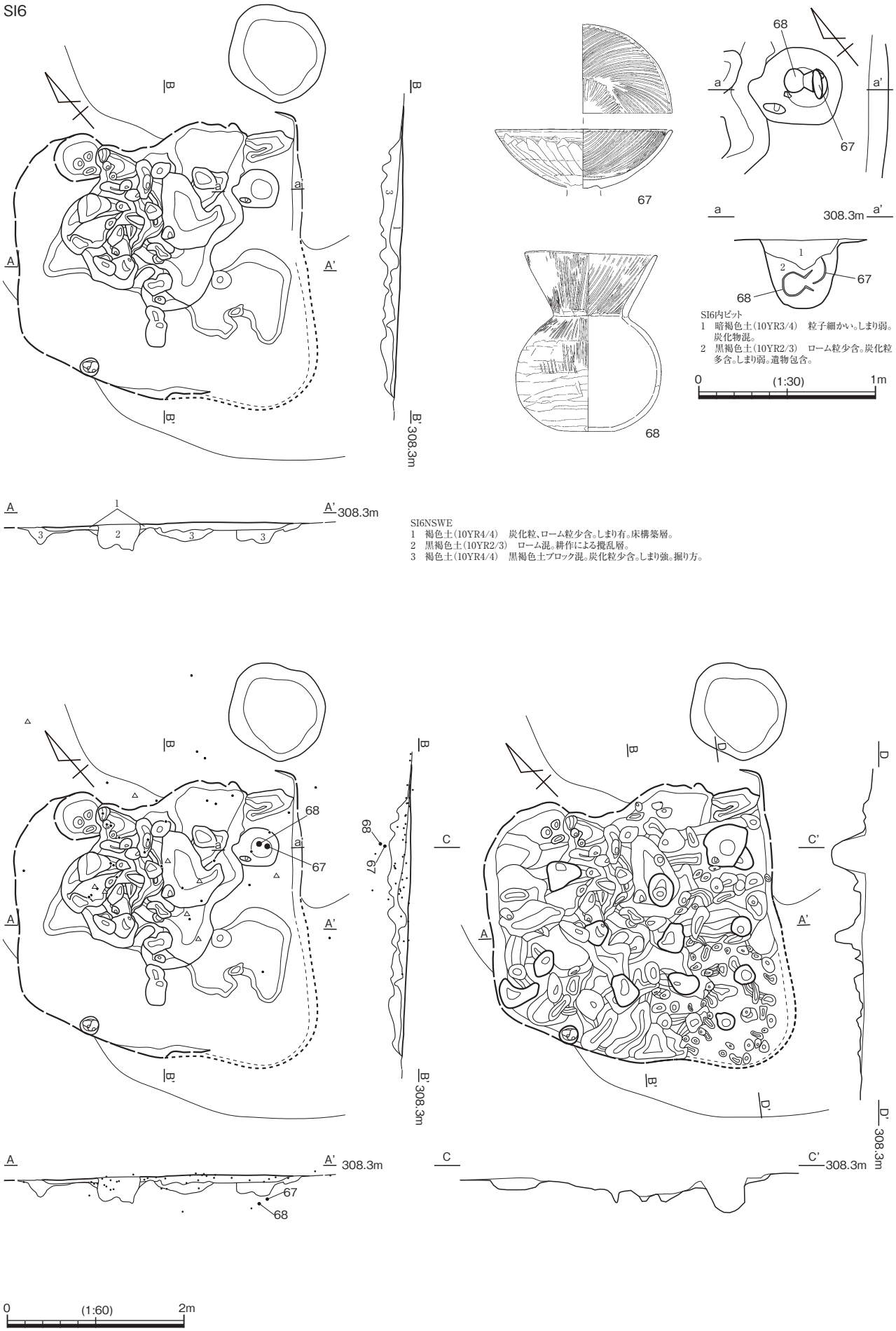
SI5PT4
1 暗褐色土(10YR3/3)　炭化粒少含。しまりやや弱。

Pit5･6
1 暗褐色土(10YR3/4)　ローム小ブロック含。炭化粒微含。
2 褐色土(10YR4/4)　ローム小ブロック、暗褐色土小ブロック含。しまり強。
3 暗褐色土(10YR3/4)　ローム小ブロック、暗褐色土小ブロック、炭化粒多含。

SI7Pit1
1 暗褐色土(10YR3/4)　黒褐色土多含。ローム小ブロック少含。
2 褐色土(7.5YR4/6)　ローム粒少含。しまり強。
3 褐色土(10YR4/4)　暗褐色土粒･ローム粒含。粘性ややあり。

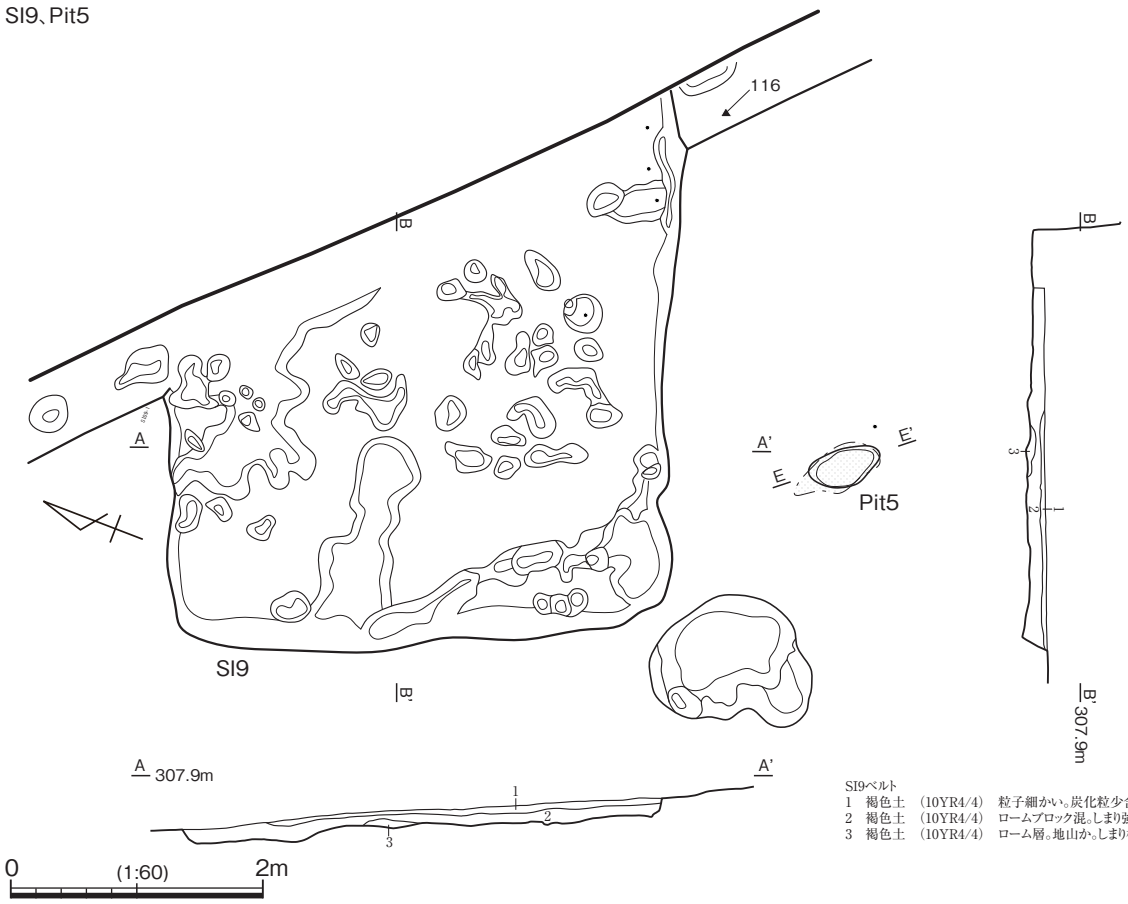
SI7Pit2
1 暗褐色土(10YR3/4)　黒褐色土多含。ローム小ブロック少含。
2 暗褐色土(7.5YR3/4)　黒褐色土ブロック多含。褐色土ブロック含。ローム粒少含。
3 暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒多含。
4 褐色土(7.5YR4/6)　ローム粒含。しまりやや弱。
5 地山

第15図　SI5･7ピット　遺構図


SI6
SI6NSWE
1　褐色土(10YR4/4)　炭化粒、ローム粒少含。しまり有。床構築層。
2　黒褐色土(10YR2/3)　ローム混。耕作による攪乱層。
3　褐色土(10YR4/4)　黒褐色土ブロック混。炭化粒少含。しまり強。掘り方。
SI6内ピット
1　暗褐色土(10YR3/4)　粒子細かい。しまり弱。炭化物混。
2　黒褐色土(10YR2/3)　ローム粒少含。炭化粒多含。しまり弱。遺物包含。
308.3m
(1:30)
(1:60)

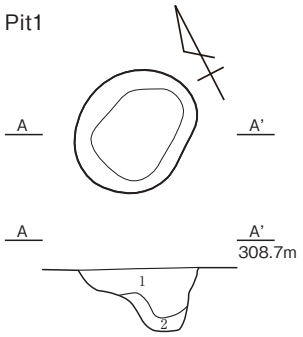
第16図　SI6　遺構図

SI9、Pit5



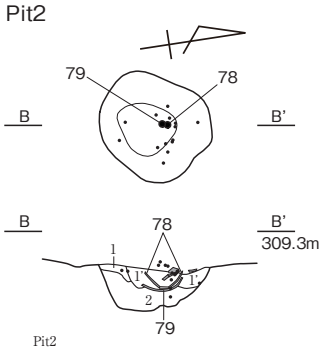
SI9ベルト
1　褐色土　(10YR4/4)　粒子細かい。炭化粒少含。
2　褐色土　(10YR4/4)　ロームブロック混。しまり強。炭化粒少含。
3　褐色土　(10YR4/4)　ローム層。地山か。しまり極強。

Pit1

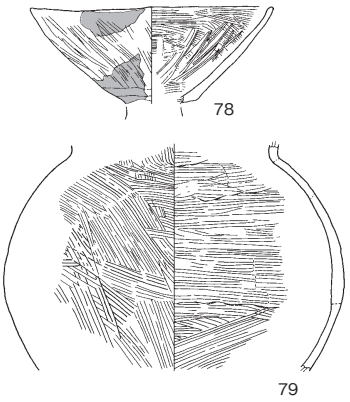


Pit1
1　暗褐色土(10YR3/3)　粒子細かい。ローム粒少含。竹根多。
2　褐色土(10YR4/4)　ローム層(地山層)。

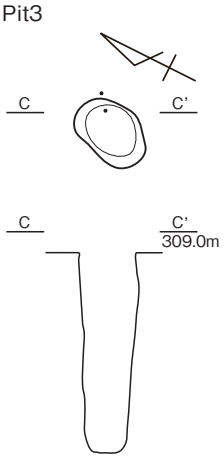
Pit2



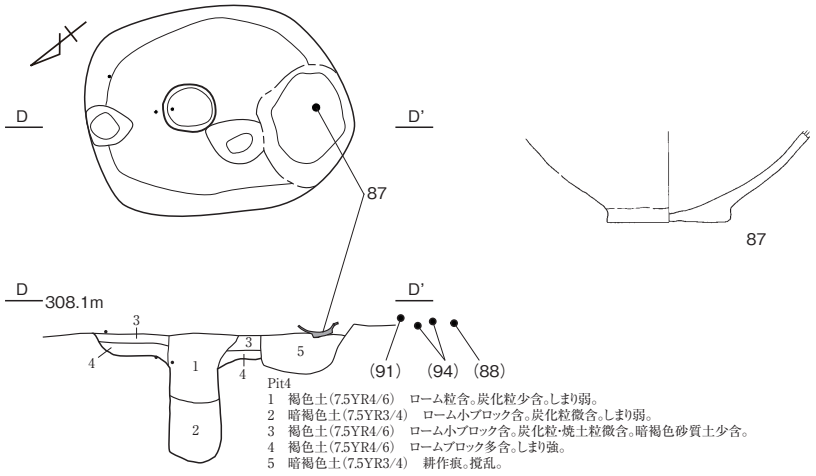
Pit2
1　褐色土(10YR4/4)　炭化粒少含。1'遺物包含。
2　暗褐色土(10YR3/3)　炭化粒多含。遺物埋設層。



Pit3

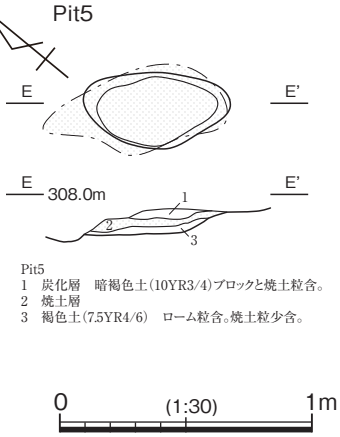


Pit4



Pit4
1　褐色土(7.5YR4/6)　ローム粒含。炭化粒少含。しまり弱。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　ローム小ブロック含。炭化粒微含。しまり弱。
3　褐色土(7.5YR4/6)　ローム小ブロック含。炭化粒・焼土粒微含。暗褐色砂質土少含。
4　褐色土(7.5YR4/6)　ロームブロック多含。しまり強。
5　暗褐色土(7.5YR3/4)　耕作痕。撹乱。

Pit5



Pit5
1　炭化層　暗褐色土(10YR3/4)ブロックと焼土粒含。
2　焼土層
3　褐色土(7.5YR4/6)　ローム粒含。焼土粒少含。

第17図　SI９、Pit　遺構図

表２　出土遺物観察表（土師器・陶器・土製品類）

法量（　）は復元実測値、［　］は現存値である。

図版	No.	遺構名	種別	器種	部位	口径（横）	底径（縦）	器高（厚）	内面/外面/底部	色調（内 ／ 外）	胎土・含有物	粒度※	実測No.	取上No.	時期	備考
第18図	1	SI1	土師器	高坏	坏部	(21.6)		[6.1]	ミガキ/ハケメ・ミガキ	橙5YR6/8	密,白・黒・赤色粒子・小礫	B	6	P635,828～831	古墳前期	内面被熱により劣化、外面口縁部黒
第18図	2	SI1	土師器	高坏	脚		(12.0)	[2.6]	ハケメ/ミガキ・赤彩	にぶい橙5YR6/4	密,白・黒色粒子・雲母	A	10	P46	古墳前期	穿孔2箇所
第18図	3	SI1	土師器	壺	口縁～胴	9.6		[14.4]	ミガキ・赤彩（口縁～頸部）、ハケメ・指頭痕（胴部）/ミガキ・赤彩	橙5YR6/6	密,白（多）・黒（多）・赤色粒子・雲母・小礫	B	7	P41,835,840,844,859,86～867,876	古墳前期	被熱、外面摩耗、内面胴部黒変
第18図	4	SI1	土師器	壺	胴～底		6.5	[11.1]	ナデ・ヘラナデ・指頭痕/ミガキ/-	橙5YR6/6	密,白（多）・黒・赤色粒子・雲母・小礫	C	9	P645,838,872,874	古墳前期	
第18図	5	SI1	土師器	壺	口縁				ハケメ/ハケメ・沈線4本、5単位	にぶい橙7．5YR7/4 ／ 橙5YR7/6	密,白・黒・赤色粒子・小礫	E	12	P43,44,993	古墳前期	
第18図	6	SI1	土師器	壺	胴				ナデ/ハケメのちミガキ・赤彩	にぶい黄橙10YR7/4	密,白（多）・黒・赤色粒子・雲母	C	13	P636,836,837,839,849,850,870,871,879	古墳前期	
第18図	7	SI1	土師器	壺	胴～底		6.0	[5.6]	ナデ・ハケメ/ハケメ/ナデ	橙5YR6/6	密,白（多）・黒・赤色粒子	C	8	P640,650,841～843,852,一括	古墳前期	外面摩滅のため整形 はっきりしない
第18図	8	SI1	土師器	S字甕	口縁～胴	9.6		[7.6]	ナデ/ハケメ	橙7.5YR6/6	密,赤・白（多）・黒色粒子	F	2	P637,825～827,833	古墳前期	
第18図	9	SI1	土師器	甕	口縁～胴	(16.0)		[6.1]	ハケメ・ナデ/ハケメ	明赤褐2.5YR5/6	密,白・黒色粒子,礫	C	1	P641,642,643,877	古墳前期	
第18図	10	SI1	土師器	甕	口縁～胴	(13.6)		[2.9]	ハケメ・ナデ/ハケメ・ナデ	橙5YR6/6	密,赤・白（多）・黒色粒子・雲母	C	3	P878	古墳前期	
第18図	11	SI1	土師器	台付甕	脚		(8.4)	[5.85]	ハケメ/ハケメ・ナデ	橙7.5YR7/6	密,白（多）・黒色粒子・雲母・小礫	C	4	P47	古墳前期	
第18図	12	SI1	土師器	甕	胴～底		5.8	[3.9]	ナデ/ナデ	明黄褐10YR7/6 ／ 橙5YR6/8	密,白（多）・黒（多）・赤色粒子・雲母・小礫	D	5	P1112	古墳前期	
第18図	13	SI1	土師器	器台	口縁～底	6.7	5.2	2.8	ハケメ/ハケメ・ナデ/ナデ	にぶい黄橙10YR7/4 ／ にぶい橙7.5YR7/4	密,白・黒色粒子	C	11	P53	古墳前期	一部黒変。孔径3.1cm
第19図	14	SI2	土師器	台付甕	口縁～胴	16.4			ハケメ・ナデ/ナデ・ハケメ	明褐7.5YR6/6	密,白・黒色粒子	B	4	P13,16～18,29,792～795,880～887,890,892	古墳前期	
第19図	15	SI2	土師器	台付甕	口縁～胴	17.4			ナデ/ナデ・ハケメ	明赤褐5YR5/6	密,白・黒色粒子	B	3	P19～30,774,776～778,780,781,783～788,888,889,891	古墳前期	同一個体P779,782,789,790,791
第19図	16	SI2	土師器	台付甕	脚		11.0		ナデ・ハケメ/ナデ・ハケメ	明褐7.5YR5/6	密,白・黒色粒子	B	1	P796,797	古墳前期	
第19図	17	SI2	土師器	壺	胴～底		(7.0)		ナデ・ハケメ/ハケメ・ミガキ/ナデ・ミガキ	明褐7.5YR5/6	密,白・黒色粒子	C	2	P27,773,775	古墳前期	底部(植物)圧痕か
第19図	18	SI3	土師器	高坏	口縁～胴	(21.6)		[5.9]	ミガキ/ハケメ・ミガキ	橙2.5YR6/8 ／ 5YR6/6	密,白（多）・黒・赤色粒子・小礫	B	1	P1161～1163	古墳前期	内外面摩滅により整形はっきりしない
第19図	19	SI3	土師器	壺	口縁～胴	(21.6)		[5.0]	ナデ/ハケメ・ヘラケズリ	橙7.5YR6/6 ／ にぶい橙7.6/4	密,白（多）・黒色粒子・小礫	C	3		古墳前期	外面摩滅顕著、整形はっきりしない
第19図	20	SI3	土師器	高坏	脚				ハケメ/ハケメ・ミガキ	橙7.5YR7/6 ／ にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒・赤色粒子・小礫	C	2	P603	古墳前期	外面一部黒変、孔3つ
第19図	21	SI3	土師器	甕・壺	胴～底		(6.4)	[2.7]	ハケメ/ナデ/木葉痕	明黄10YR7/6	密,白・黒・赤色粒子・雲母	F	4	P441	古墳前期	
第19図	22	SI3	土師器	甕・壺	胴～底		(5.2)	[2.5]	ヘラナデ/丁寧なナデ	橙5YR6/6 ／ 浅黄橙10YR8/4	密,白（多）・黒・赤色粒子	F	5	P428	古墳前期	
第19図	23	SI4	土師器	高坏	口縁～底	8.5	(5.8)	[6.15]	ミガキ/ミガキ	明黄褐10YR7/6	密,白・黒色粒子	C	1	P555	古墳前期	胎土に2mm大の小礫をわずかに含む
第19図	24	SI4	土師器	高坏	口縁～脚	(10.3)		[8.2]	ナデ/ミガキ	橙7.5YR6/6	密,白（多）・黒・赤色粒子・雲母・小礫	D	2	P559,621,622	古墳前期	外面摩滅の為整形はっきりしない
第19図	25	SI4	土師器	高坏	口縁～胴	(9.8)		[3.7]	ミガキ/ミガキ	明赤褐5YR5/6	密,白・黒・赤色粒子・小礫	B	4	P545	古墳前期	外面一部黒変、内面口縁部黒変
第19図	26	SI4	土師器	高坏	脚		(16.0)	[2.1]	ハケメ・ナデ/不明	橙5YR6/6	密,白（多）・黒・赤色粒子	F	3	P541	古墳前期	外面摩滅顕著整形不明、穿孔あるが数は不明
第19図	27	SI4	土師器	台付甕	脚		(16.0)	[5.6]	ハケメ・ヘラナデ/ハケメ・ヘラケズリ	にぶい赤褐5YR5/4 ／ にぶい褐	密,白（多）・黒・赤色粒子・雲母・小礫	C	8	P1115	古墳前期	
第19図	28	SI4	土師器	壺	胴～底		[9.2]	[2.6]	ナデ/ハケメ・ナデ/ナデ	橙7.5YR6/6 ／ にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒・赤色粒子・小礫	C	5	P546,547	古墳前期	
第19図	29	SI4	土師器	壺	胴～底		6.5	[2.55]	ナデ/ミガキ・ヘラケズリ・ナデ/ヘラケズリ	橙7.5YR6/6 ／ にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒・赤色粒子・小礫・雲母	D	6	P418,549,594	古墳前期	
第20図	30	SI5	土師器	埦・鉢	口縁～底	11.0	(3.0)	7.7	ナデ/ハケメ・ナデ・ケズリ/ケズリ・ナデ	明赤褐5YR5/6	密,白・黒色粒子	D	1	P299,514,821,985	古墳前期	内面黒変　被熱による剥離
第20図	31	SI5	土師器	埦・鉢	口縁～底	9.0	2.9	5.3	ナデ/ミガキ・ヘラケズリ/ヘラケズリ	にぶい黄橙10YR7/4	密,白色粒子	B	2	P744,745,746,927	古墳前期	被熱による剥離、摩耗著しい
第20図	32	SI5	土師器	埦・鉢	口縁～胴	(9.6)			ナデ/ナデ・ミガキ	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒色粒子	D	3	P987	古墳前期	内面黒変　被熱による剥離
第20図	33	SI5	土師器	壺	口縁～胴	(13.4)			ナデ/ナデ・ミガキ	明赤褐5YR5/6	密,白（多）・黒・赤色粒子・雲母・小礫	C	10	P753	古墳前期	内面黒変　有段口縁壺
第20図	34	SI5	土師器	壺	口縁～胴	(17.0)			ナデ・ハケメ/ナデ・ハケメ	橙7.5YR6/6	密,白・黒色粒子	G	13	P1159	古墳前期	1
第20図	35	SI5	土師器	壺	胴				ナデ/ナデ・赤彩	にぶい黄橙10YR7/4 ／ 明赤褐	密,白・黒色粒子	F	11		古墳前期	有段口縁壺か
第20図	36	SI5	土師器	壺	口縁～胴	(13.0)			ナデ/ヘラミガキ	明赤褐5YR5/6	密,白・黒色粒子	C	9	P806	古墳前期	
第20図	37	SI5	土師器	器台	口縁～胴	(8.0)			ナデ/ナデ	橙5YR6/6	密,白色粒子	D	8		古墳前期	
第20図	38	SI5	土師器	器台	口縁～胴	(7.6)			ナデ/ナデ・ミガキ	明赤褐5YR5/6	密,白色粒子	B	7	P949	古墳前期	
第20図	39	SI5	土師器	高坏	脚				ナデ/ナデ・ミガキ	明黄褐10YR6/6	密,白・黒色粒子	C	6	P817	古墳前期	穿孔4
第20図	40	SI5	土師器	高坏	脚				ナデ/ケズリ・ナデ	橙7.5YR6/6	密,白・黒色粒子	G	5	P1025	古墳前期	穿孔3。穿孔した際の工具痕が、その対面にも残る
第20図	41	SI5	土師器	壺	胴				ハケメ/ハケメ・ナデ・赤彩	にぶい黄褐10YR6/4 ／ 赤褐2.5YR4/6	密,白・赤・黒色粒子	C	12	P296	古墳前期	穿孔1 スコリア含
第20図	42	SI5	土師器	甕	口縁	(11.6)			回転ナデ/回転ナデ	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒色粒子	C	23		古墳前期	
第20図	43	SI5	土師器	壺	口縁				ナデ/ハケメ・棒状浮文	明赤褐5YR5/8	密,白・黒色粒子	D	24	P263	弥生末～古墳初頭	
第20図	44	SI5	土師器	壺	口縁	(15.8)			ボタン状貼付文・縄目/ハケメ・赤彩	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒色粒子	D	20	P923	弥生末～古墳初頭	口縁部外側が剥離
第20図	45	SI5	土師器	壺	胴				ハケメ/ハケメ・ボタン状貼付文	橙7.5YR6/6	密,白・黒・赤色粒子	F	32	P730	弥生末～古墳初頭	
第20図	46	SI5	土師器	甕	胴				ハケメ/ハケメ・櫛描波状文	褐7.5YR4/6 ／ 黒褐10YR3/2	密,白色粒子	D	33	P724	弥生末～古墳初頭	
第20図	47	SI5	土師器	甕	口縁	(19.4)			ハケメ/刻み・ハケメ	にぶい黄褐10YR5/4	密,白・黒色粒子	D	18	P533	古墳前期	
第20図	48	SI5	土師器	甕	口縁	(12.8)			ミガキ/刻み・ハケメ	明赤褐5YR5/6	密,白・黒色粒子・雲母	D	17	P947	古墳前期	外面煤付着
第20図	49	SI5	土師器	壺	口縁	(13.4)			ナデ/ハケメ	明赤褐5YR5/6	密,白・黒・赤色粒子・雲母	C	16	P660	古墳前期	折り返し口縁部
第20図	50	SI5	土師器	甕	胴				ナデ/ ハケメ・横位ハケメ	橙7.5YR7/6	密,白・黒色粒子	F	31	P483	古墳前期	S字甕か
第20図	51	SI5	土師器	壺	胴				ナデ/ナデ・頸部有刻凸帯	オリーブ灰2.5GY5/1 ／ にぶい橙7.5YR7/4	密,白・黒色粒子	E’	25		古墳前期	有刻凸帯（粘土紐貼付後ヘラ状工具で刺突）
第21図	52	SI5	土師器	甕	口縁～脚	21.3	9.4	31.6	ハケメ・ナデ・指頭痕/ハケメ/ハケメ・ナデ	にぶい黄褐10YR7/3	密,白・黒・赤色粒子、雲母・小礫	D	34	P524～527,1023	古墳前期	被熱による変色　柱穴内出土
第21図	53	SI5	土師器	甕	口縁～胴	(16.8)			ハケメ/ハケメ・ナデ	明褐7.5YR5/8	密,白・黒色粒子	B	26	P692,701	古墳前期	外面煤付着
第21図	54	SI5	土師器	甕	口縁	(17.0)			ハケメ/ハケメ・ナデ	にぶい黄褐10YR5/4 ／ 外面赤褐2.5YR4/6	密,白・黒・赤色粒子	E	14	P984	古墳前期	
第21図	55	SI5	土師器	甕	口縁	(21.6)			ハケメ・ヘラナデ/ハケメ	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒色粒子	E	15	P920	古墳前期	
第21図	56	SI5	土師器	壺	口縁	(13.5)			ハケメ/ハケメ	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒色粒子	E	22	P1031	古墳前期	
第21図	57	SI5	土師器	台付甕	脚		8.4	[4.5]	ハケメ/ナデ/ハケメ	にぶい褐7.5YR6/4	密,白・黒色粒子	E	28	P764	古墳前期	
第21図	58	SI5	土師器	壺	底		5.8	[1.9]	ナデ/ナデ/ナデ	橙5YR6/6	密,白・黒・赤色粒子	D	30	P501	古墳前期	
第21図	59	SI5	土師器	壺・鉢か	口縁	(24.7)			ミガキ/ミガキ・ハケメ	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒色粒子・雲母	C	19	P1029	近世か	

法量（　）は復元実測値、［　］は現存値である。

図版	No.	遺構名	種別	器種	部位	口径（横）	底径（縦）	器高（厚）	内面/外面/底部	色調（内 ／ 外）	胎土・含有物	粒度※	実測No.	取上No.	時期	備考
第21図	60	SI5-SK1	土師器	高坏	口縁～胴	(9.6)			ナデ/ヘラケズリ・ナデ	明赤褐5YR5/8	密,白・黒・赤色粒子	E	4	P1069,1070	古墳前期	
第21図	61	SI5-SK1	土師器	小型壺	口縁～底	5.7	2.9	9.2	ヘラナデ・ミガキ/ヘラナデ・ミガキ/-	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒色粒子	C	27	P1085	古墳前期	
第21図	62	SI5-SK1	土師器	台付甕	胴				ハケメ/ハケメ・ナデ	明赤褐5YR5/6	密,白・黒色粒子	D	29	P242,273,279,288,465,469,473,479,485,707,799,804,1063,1065,1096,1079	古墳前期	
第21図	63	SI5	土師器	焼成粘土塊	－	1.4	[4.1]	1.1	棒状に成形、ユビナデ、圧痕	褐灰10YR4/1	密,白・黒色粒子	C	3	P921	古墳前期	重さ4.36g　被熱、変色
第21図	64	SI5	土師器	焼成粘土塊	－	1.1	[2.6]	1.1	棒状に成形	にぶい黄褐10YR5/3	密,白・黒色粒子	C	2	P704	古墳前期	重さ3.43g　被熱
第21図	65	SI5	土師器	焼成粘土塊	－	0.6	[1.5]	0.6	棒状に成形	灰黄褐10YR4/2	密,白・黒色粒子	C	1	P666	古墳前期	重さ0.76g　被熱、変色
第21図	66	SI5	土師器	焼成粘土塊	－	2.2	[2.6]	0.5	紐状に成形か	にぶい黄褐10YR5/3	やや粗,白・黒色粒子	D	4	P1094	古墳前期	重さ2.10g　紐状にした粘土の残りか
第22図	67	SI6	土師器	高坏	口縁～胴	16.4			ナデ・ミガキ/ナデ・ヘラケズリ	明褐7.5YR5/6	密,白・黒・赤色粒子	B	1	P303	古墳前期	
第22図	68	SI6	土師器	壺	口縁～底	12.4	5.3	6.9	ミガキ・ナデ/ミガキ・ナデ/ヘラケズリ	明褐7.5YR5/8	密,白・黒・赤色粒子	B	2	P304	古墳前期	煤付着
第22図	69	SI7	土師器	壺	口縁～胴	(27.8)		[9.7]	ナデ/ナデ・棒状貼付文	浅黄橙7.5YR8/6	密,白・黒・赤色粒子・雲母・小礫	H	4	P953,962,964,965,973,975,977,978（同一個体959～961,963,966,968,969,974）	弥生末～古墳初頭	摩耗著しい　有段口縁・加飾　70と同一個体か
第22図	70	SI7	土師器	壺	胴				ナデ/ナデ	橙7.5YR7/6	密,白・黒・赤色粒子	H	5	P954,957,967,970～972	弥生末～古墳初頭	摩耗著しい　有段口縁　69と同一個体か
第22図	71	SI7	土師器	甕	口縁～胴	(16.6)		[8.0]	ハケメ・ナデ/ハケメ・ナデ	明赤褐5YR5/6	密,白・黒・赤色粒子・小礫	C	1	P979	弥生末～古墳初頭	外面種子圧痕か、外面下半黒変
第22図	72	SI7	土師器	甕	底		(6.8)	[3.15]	ナデ/ハケメ	橙5YR6/6	密,白・黒・赤色粒子	F	3	P1047	弥生末～古墳初頭	
第22図	73	SI7	土師器	台付甕	脚		(9.2)	[3.2]	ハケメ/ハケメ	にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒・赤色粒子・小礫・雲母	C	2	P981	弥生末～古墳初頭	煤付着
第22図	74	SI8	土師器	高坏					ナデか/ミガキ	橙2.5YR6/6	密,白・黒色粒子・雲母・小礫	C	3	P1027	古墳前期	坏部内面、被熱による剥離
第22図	75	SI8	土師器	甕	口縁	(15.0)		[3.15]	ナデ・ハケメ/ナデ・ハケメ	橙7.5YR7/6	密,白(多)・黒色粒子・小礫	D	2	P1021	古墳前期	内面丁寧なナデ
第22図	76	SI8	土師器	S字甕	口縁	(15.2)		[2.5]	ナデ・ハケメ/ハケメ	にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒・赤色粒子・雲母	F	1	P1028	古墳前期	煤付着
第22図	77	SI8	土師器	壺	胴				ナデ/ナデ・刺突文	浅黄橙7.5YR8/3 ／ 黄灰2.5YR6/1	密,白・黒・赤色粒子・小礫	H	4		弥生末か	
第23図	78	Pit2	土師器	高坏	口縁～胴	15.8			ハケメのちミガキ/ハケメ	明黄褐10YR7/6	密,白・黒色粒子	C	3	P343	古墳前期	内外面黒変あり、甑転用か
第23図	79	Pit2	土師器	甕	胴				ハケメ/ハケメ	橙7.5YR6/6	密,白・黒色粒子	D	2	P344	古墳前期	
第23図	80	Pit2	土師器	壺	口縁～胴	(10.6)		[3.0]	ハケメ/ハケメ	にぶい黄褐10YR5/4	密,白色粒子	C	1		古墳前期	
第23図	81	SD2	土師器	壺	底		3.8	[1.7]	ハケメ/ハケメ・指頭痕/ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	密,白・黒色粒子	D	1	P607	古墳前期	
第23図	82	SD2	土師器	壺	底		(5.0)	[1.7]	ナデ/ナデ/ナデ	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒・赤色粒子	E	2	P608	古墳前期	
第23図	83	旧SD1	土師器	甕	口縁～胴	(13.8)		[5.3]	ハケメ・ナデ/ハケメのち横ナデ	橙7.5YR6/8	密,白(多)・黒(多)色粒子・小礫	B	5	P386	古墳前期	
第23図	84	旧SD1	土師器	高坏	胴				ミガキ/ミガキ	にぶい黄橙10YR7/4	密,白・赤色粒子	A	1	P403	古墳前期	内側黒変
第23図	85	旧SD1	須恵器	甕	胴				ナデ/タタキ	にぶい黄2.5YR6/3	密,白・黒色粒子	-	4	P378,404	古墳時代	
第23図	86	遺構外	土師器	壺	口縁～胴	(15.2)		[8.7]	ハケメ/ハケメ	にぶい黄褐10YR5/4	密,白・黒色粒子	D	1		古墳前期	内外面黒変あり
第23図	87	遺構外	土師器	壺か	胴～底		8.1	[5.9]	ハケメのちミガキ/ナデ/ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	密,白・黒・赤色粒子	E	1	P1111	古墳前期	摩滅顕著
第23図	88	遺構外	土師器	壺・甕か	底		8.5	[1.9]	ナデ・ハケメ/ハケメ/ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	密,白・黒色粒子・雲母	H	3	P363	古墳前期	
第23図	89	遺構外	土師器	壺	口縁	(22.6)		[1.5]	縄目/ハケメ・赤彩	橙7.5YR6/6	密,白・黒・赤色粒子	B	4		弥生末	
第23図	90	遺構外	土師器	壺	口縁	(11.9)		[1.2]	縄目/ハケメ	橙7.5YR6/6	密,白・黒色粒子	D	5		弥生末	口縁一部黒変　折り返し口縁壺
第23図	91	遺構外	土師器	壺	胴				ナデ/ナデ	橙5YR6/8	密,白・黒・赤色粒子	H	11	P994	弥生末～古墳初頭	有段口縁壺
第23図	92	遺構外	土師器	壺	口縁			[3.9]	ナデ/ハケメ	明黄褐10YR6/6	密,白・黒色粒子	D	3	P334	古墳前期	
第23図	93	遺構外	土師器	高坏	胴				ミガキ/ナデ・ミガキ	橙7.5YR7/6	密,白・黒・赤色粒子	B	12	P760	古墳前期	煤付着
第23図	94	遺構外	土師器	高坏	脚		(19.5)	[3.1]	ハケメ・ナデ/ハケメのちミガキ	浅黄橙10YR8/3	密,白・黒・赤色粒子・雲母・小礫	C	1	P1098,1099	古墳前期	
第23図	95	遺構外	土師器	壺	底		4.4	[2.9]	ナデ/ナデ/ナデ	橙7.5YR6/6	密,白・黒色粒子	D	10	P326	古墳前期	
第23図	96	遺構外	陶器	皿	底		(8.0)	[1.5]	回転ナデ/回転ナデ/回転ナデ	灰黄2.5Y6/2	密,白・黒色粒子	-	13	P320	近世か	見込部目跡、灰釉

※ 粒度	器面の状態	礫2～5mm	砂粒量	焼成
A	緻密	含まず	微量	良
B	緻密	微量	微量	不良
C	密	少量	微量	良
D	密	多量	微量	良
E	やや粗	多量	少量	良
F	やや粗	含まず	少量	良
G	やや粗	多量	多量	良
H	粗	少量	多量	不良

表３　出土遺物観察表（縄文土器）

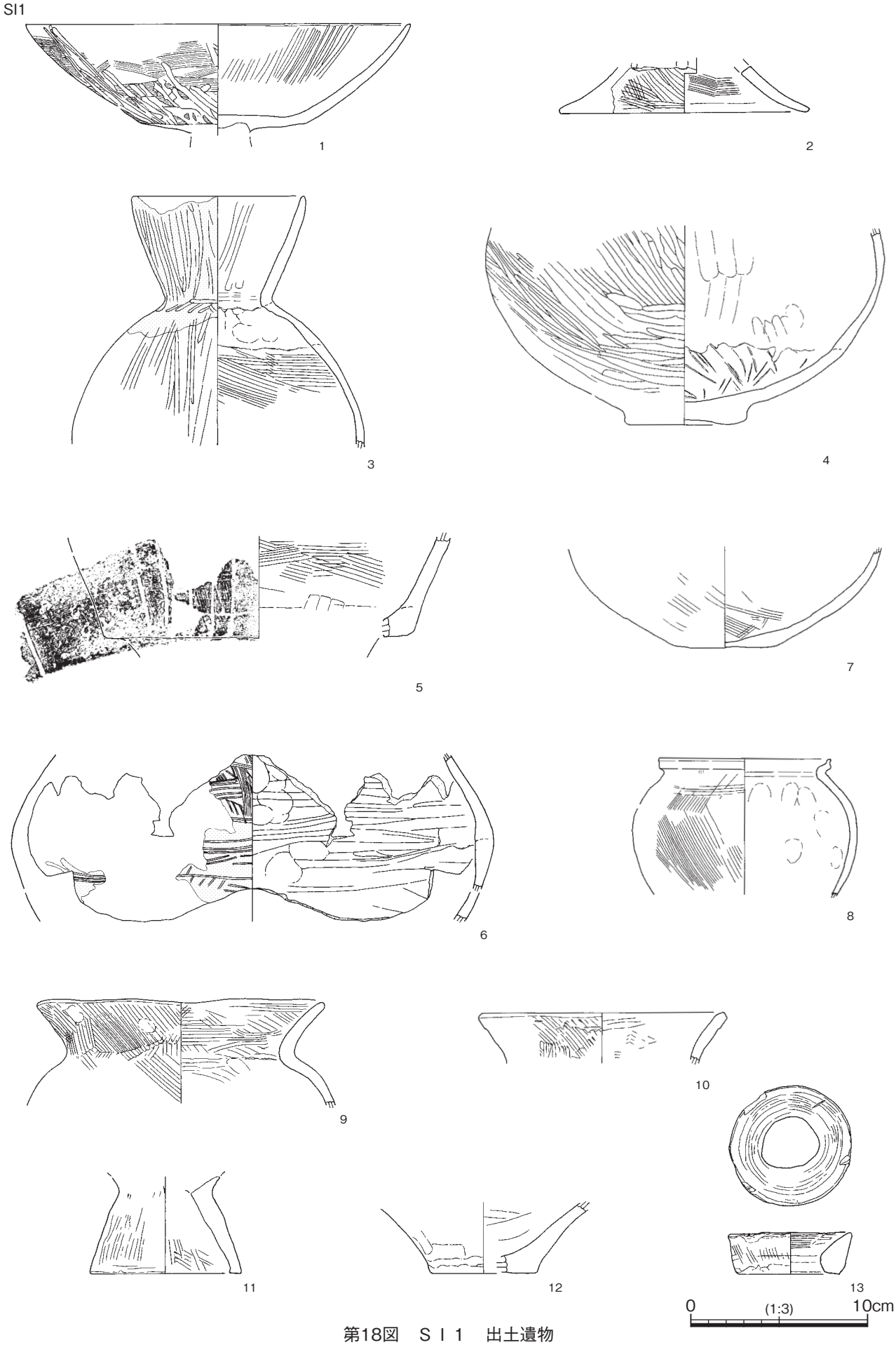
法量（　）は復元実測値、［　］は現存値である。

図版	No.	遺構名	時期	器種	部位	施文等	色調（内 ／ 外）	胎土、含有物	実測No.	取上No.	備考 〈口径/底径/器高cm〉
第24図	97	SI2	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	明褐7.5YR6/6	密,白・黒色粒子・雲母・小礫	5		
第24図	98	SI4	早期	深鉢	口縁	押型文(山形文・横位)	にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒・赤色粒子・雲母・小礫	10		
第24図	99	SI5	早期	深鉢	口縁	押型文(山形文・横位)	橙7.5YR6/6	密,白・黒粒子・雲母	12		
第24図	100	SI1	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	にぶい橙7.5YR6/4	密,白・黒色粒子・雲母	3		
第24図	101	SI2	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	にぶい赤褐5YR5/4	密,白・黒色粒子・雲母・小礫(多)	6		
第24図	102	SI2	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	橙7.5YR7/6	密,白・黒色粒子・雲母・小礫	7	P771	
第24図	103	Pit6	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	橙5YR6/6	密,白・黒・赤色粒子・雲母(多)	15	P1128	
第24図	104	旧SD1	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	にぶい赤褐5YR5/4	密,白・黒・赤色粒子・雲母	16		
第24図	105	SI4	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	橙7.5YR6/6	密,白・黒粒子・雲母・小礫	11		
第24図	106	旧SD1	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	にぶい黄橙10YR ／ にぶい赤褐5YR5/4	密,白・黒粒子・雲母	17		
第24図	107	SI8	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	橙5YR6/6	密,白・黒色粒子・雲母	8		
第24図	108	SI2	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	にぶい橙7.5YR6/5	密,白・黒色粒子・雲母・小礫	4		
第24図	109	SI1	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	にぶい橙7.5YR6/4	密,白・黒色粒子・雲母・小礫	2		内面圧痕か
第24図	110	SI3	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・横位)	橙7.5YR6/6	密,白・黒色粒子・雲母	9		
第24図	111	SI5	早期	深鉢	胴	押型文(山形文・縦位)	橙7.5YR6/6	密,白・黒・赤色粒子・雲母・小礫	13		
第24図	112	SI1	早期	深鉢	口縁～胴	押型文(楕円文・縦位)	にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒色粒子・雲母	1	P1008	〈(11)/-/[3.2]〉
第24図	113	旧SD1	早期	深鉢	口縁	押型文(楕円文・横位)	にぶい褐7.5YR5/4	密,白・黒粒子・雲母	18		
第24図	114	遺構外	早期	深鉢	胴	押型文(楕円文・横位)	にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒粒子・雲母	24	P998	
第24図	115	旧SD1	早期	深鉢	胴	押型文(楕円文・縦位)	にぶい橙7.5YR6/4・7/4	密,白・黒粒子・雲母(多)	19		
第24図	116	遺構外	早期	深鉢	胴	押型文(楕円文・縦位)	にぶい橙7.5YR7/4～にぶい赤褐5YR5/4	密,白・黒粒子・雲母	25	P1012	内面黒変
第24図	117	旧SD1	早期	深鉢	胴	押型文(楕円文・横位)	にぶい橙7.5YR6/4	密,白・黒粒子・雲母(多)	21		
第24図	118	遺構外	早期	深鉢	胴	押型文(楕円文・縦位)	明褐7.5YR5/6	密,白・黒・赤色粒子・雲母	14	P1100	内面黒変
第24図	119	旧SD1	早期	深鉢	胴	押型文(楕円文・横位)	にぶい赤褐5YR5/4	密,白・黒・赤色粒子・雲母	23		
第24図	120	旧SD1	早期	深鉢	胴	押型文(楕円文・横位)	にぶい黄橙10YR7/3	密,白・黒粒子・雲母	20		
第24図	121	旧SD1	早期	深鉢	胴	撚糸文	にぶい橙7.5YR7/4～にぶい赤褐5YR5/4	密,白・黒・赤色粒子・雲母・小礫	22		
第24図	122	遺構外	早期	深鉢	口縁	縄文	にぶい黄褐10YR5/4	密,白・黒色粒子・雲母	9		補修孔 〈-/-/[6.8]〉
第25図	123	SI5	前期初頭	深鉢	胴	半載竹管による平行沈線,指先と爪でつまみ、高まりと窓状の窪みを施す	にぶい黄橙10YR6/4	密,白・黒・赤色粒子・雲母	26	P148	木島Ⅷ式に比定
第25図	124	SI5	前期初頭	深鉢	胴	無文または縄文か	オリーブ黒5YR3/2 ／ にぶい黄橙	粗,白・黒・赤色粒子・小礫			繊維土器　摩耗著しい
第25図	125	SI8	早期末～前期初頭	深鉢	口縁	縄文地文、隆帯上も縄文施文	灰白10YR8/2	密,白・黒・赤色粒子・小礫	5	P1020	下吉井式に比定　繊維土器 〈(23.6)/-/[4.3]〉
第25図	126	遺構外	中期初頭	深鉢	胴	半載竹管による平行沈線、結節縄文	褐7.5YR4/4	密,白・黒色粒子・雲母	7	P617	五領ヶ台式　127と同一個体か
第25図	127	遺構外	中期初頭	深鉢	胴	半載竹管による平行沈線、結節縄文	褐7.5YR4/4	密,白・黒色粒子・雲母	6	P615	五領ヶ台式 〈-/-/[6.8]〉 126と同一個体か
第25図	128	遺構外	中期初頭	深鉢	胴	半載竹管腹面による平行沈線	褐7.5YR4/5	密,白・黒色粒子・雲母	8	P616	五領ヶ台式
第25図	129	旧SD1	前期か	深鉢	胴	縄文	にぶい褐7.5YR7/6	密,白・黒色粒子・雲母	2	P413	キャリパー形
第25図	130	SI4	晩期	深鉢	口縁～胴	弧線文、巴弧線文	にぶい黄橙10YR7/4	密,白・黒・赤色粒子・雲母	7	P619	清水天王山式に比定

表４　出土遺物観察表（石器）

法量は現存値である。

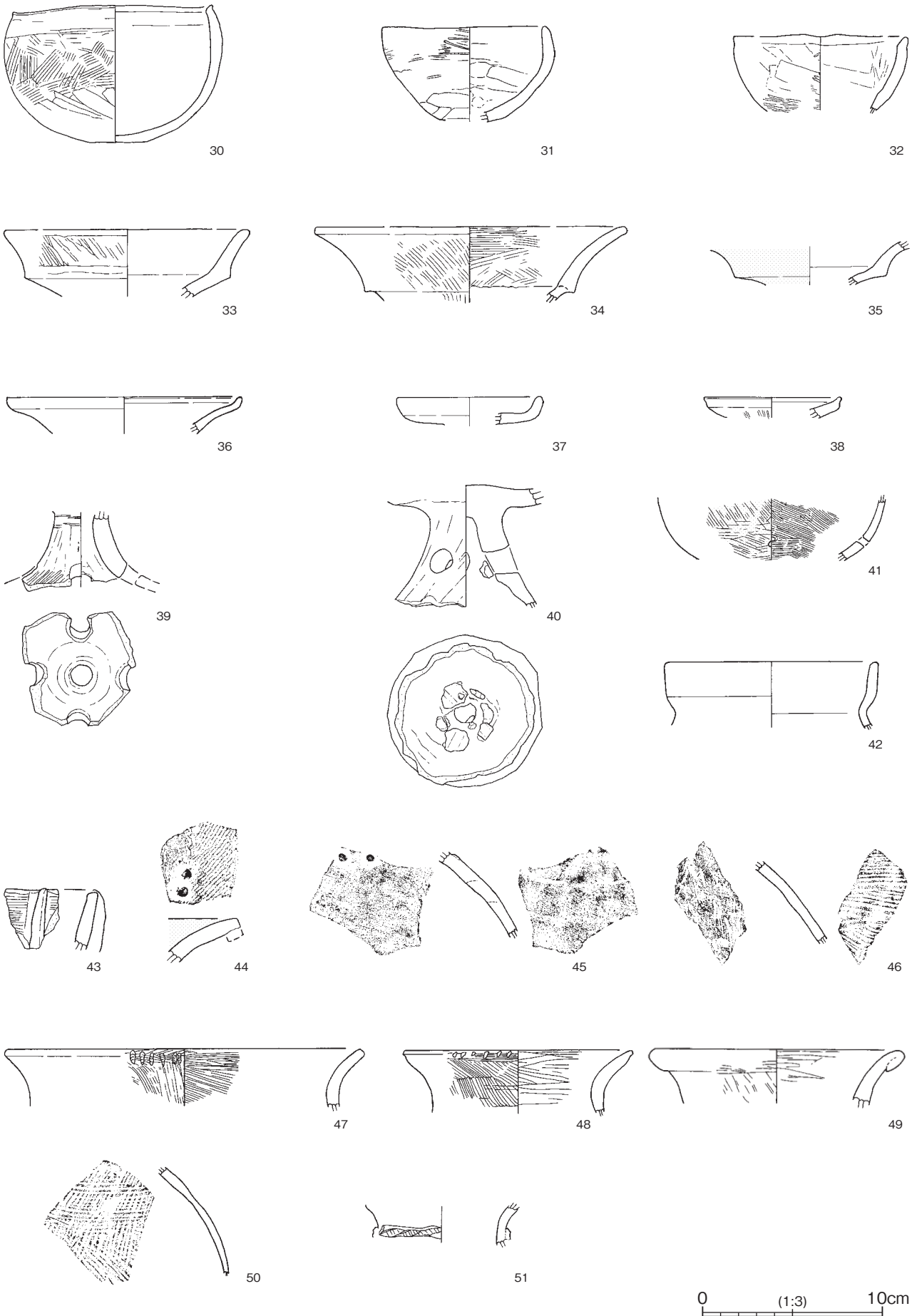
図版	No.	出土位置	種　別	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色　調	実測No.	取上No.	備　考
第25図	131	SI3	石刃状剥片	黒曜石	6.20	3.40	1.10	31.13	黒透	1	P1114	
第25図	132	SI5	打斧	頁岩(チャンチャン石)	5.90	4.40	1.10	33.43	黄灰(2.5Y6/1)	9	P1157	
第25図	133	SI5	凹石	安山岩	8.60	5.40	2.40	162.26	灰オリーブ(7.5Y5/2)	10	P1156	
第25図	134	SI4	石鏃	黒曜石	1.80	1.60	0.30	0.69	黒透	2	P191	
第25図	135	SD1	石鏃	黒曜石	1.30	1.30	0.30	0.34	黒透	4	P367	
第25図	136	SD1	石鏃	黒曜石	2.00	1.50	0.60	1.40	黒透	5	P376	
第25図	137	SD1	石鏃	黒曜石	1.60	1.40	0.20	0.36	黒透	6	一括	
第25図	138	外	石鏃	黒曜石	1.80	1.50	0.40	0.96	黒透	7	P447	
第25図	139	SI5	石鏃	黒曜石	2.00	1.60	0.30	0.47	黒透	3	一括	
第25図	140	外　C-4	石鏃	黒曜石	1.80	0.90	0.30	0.20	黒透	8	一括	



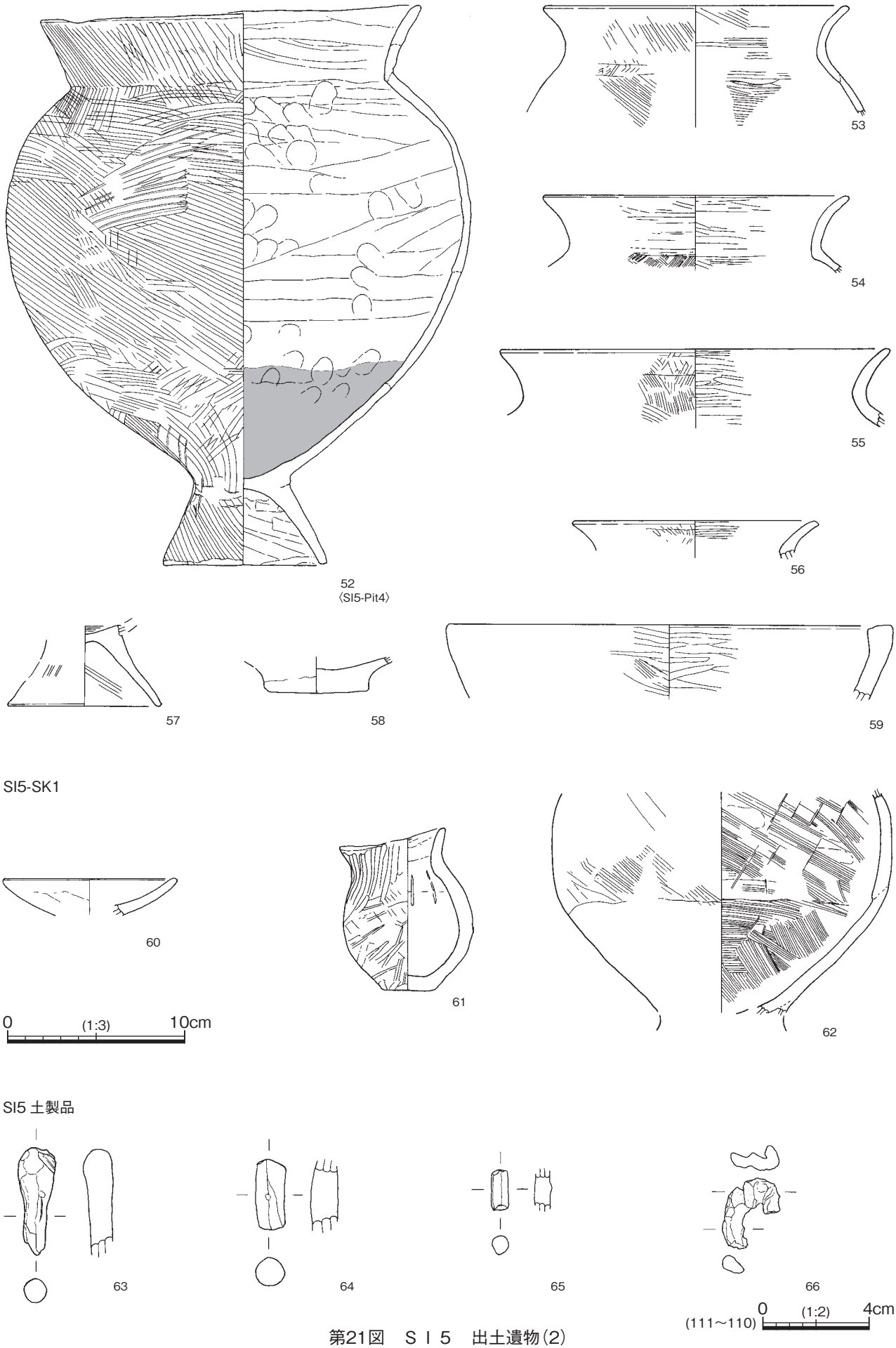
第18図　ＳＩ１　出土遺物

第19図　ＳＩ２～４　出土遺物

SI5

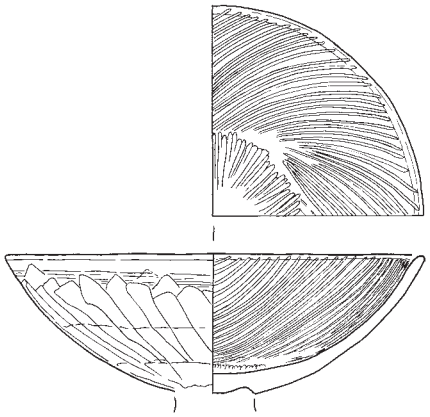


第20図　ＳＩ５　出土遺物(1)

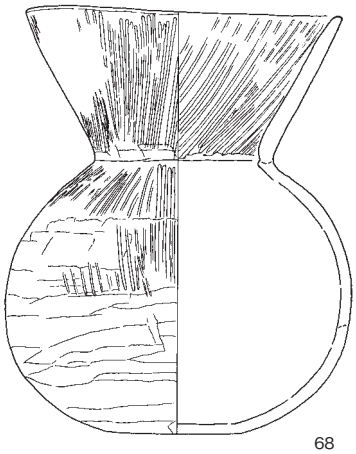


第21図　ＳＩ５　出土遺物(2)

SI6

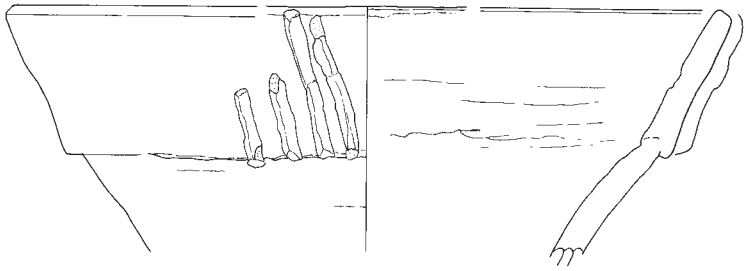


67
〈SI6-Pit1〉

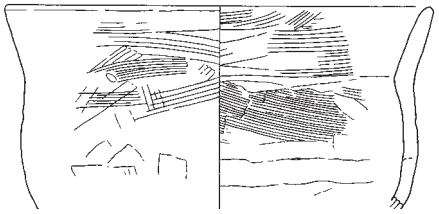


68
〈SI6-Pit1〉

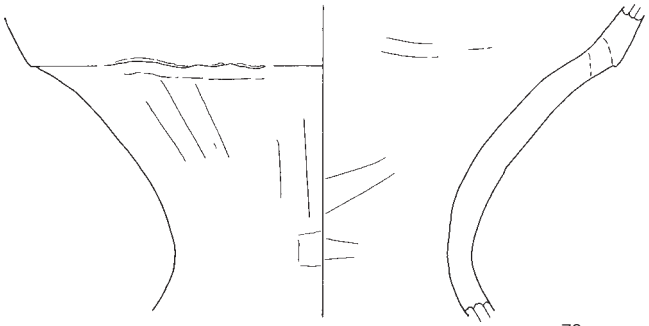
SI7



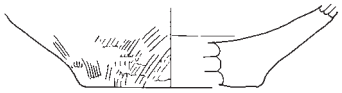
69



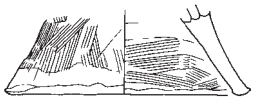
71



70

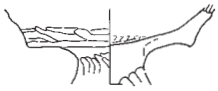


72

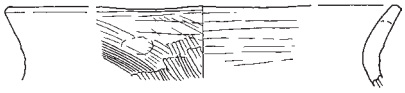


73

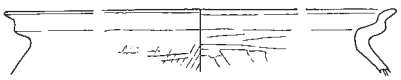
SI8



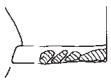
74



75



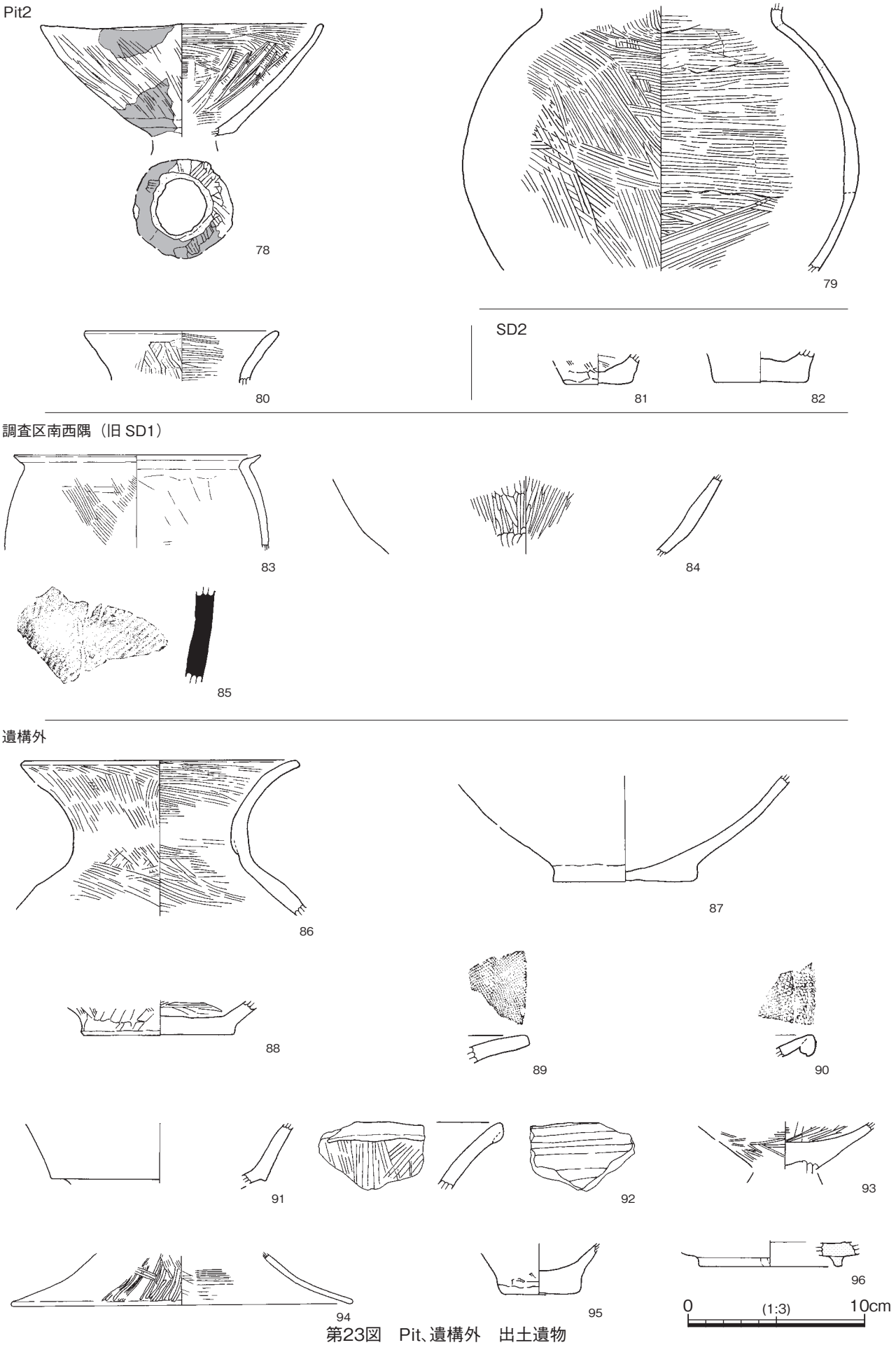
76



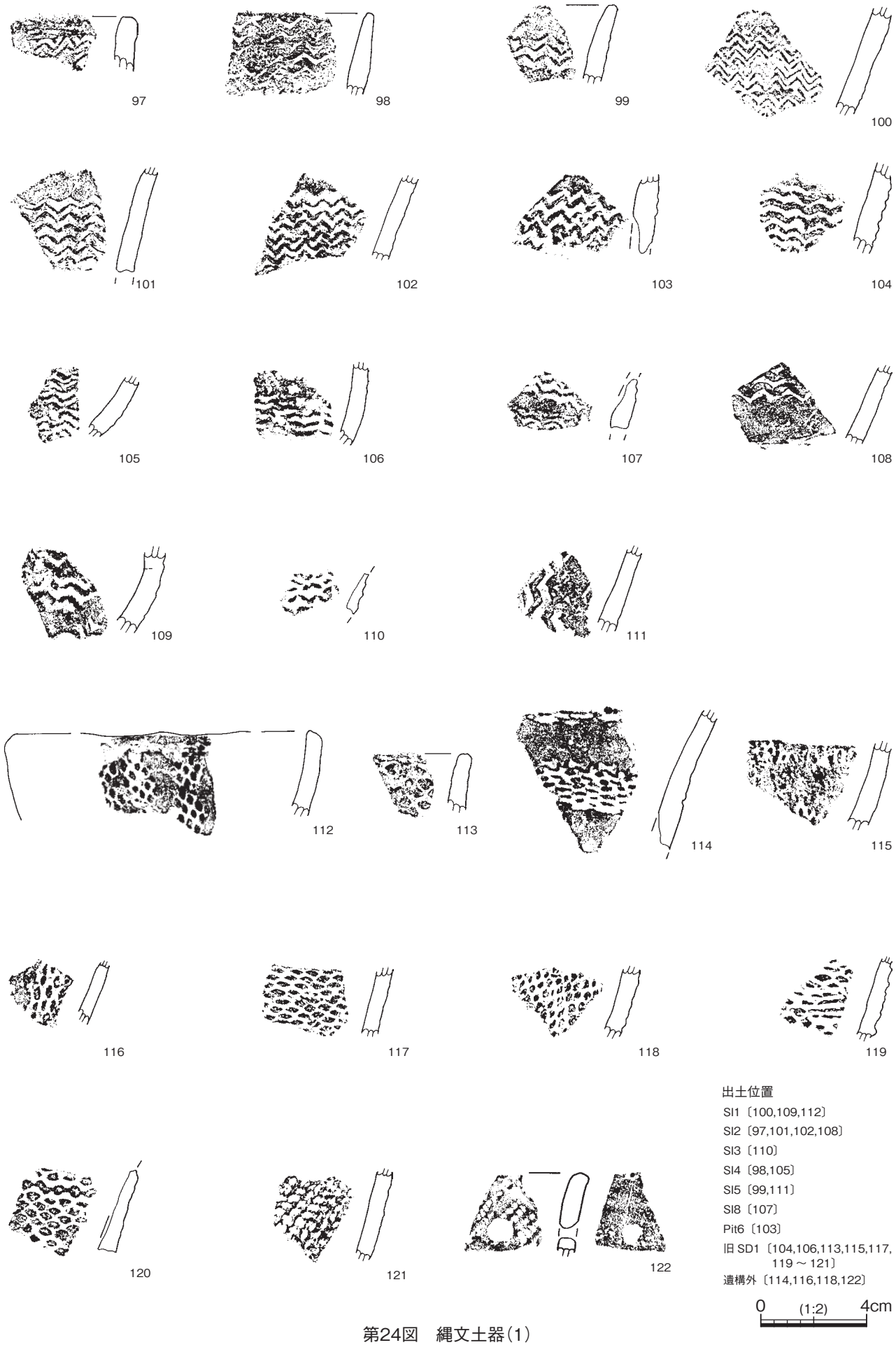
77

0 (1:3) 10cm

第22図　ＳＩ６～８　出土遺物



第23図　Pit、遺構外　出土遺物

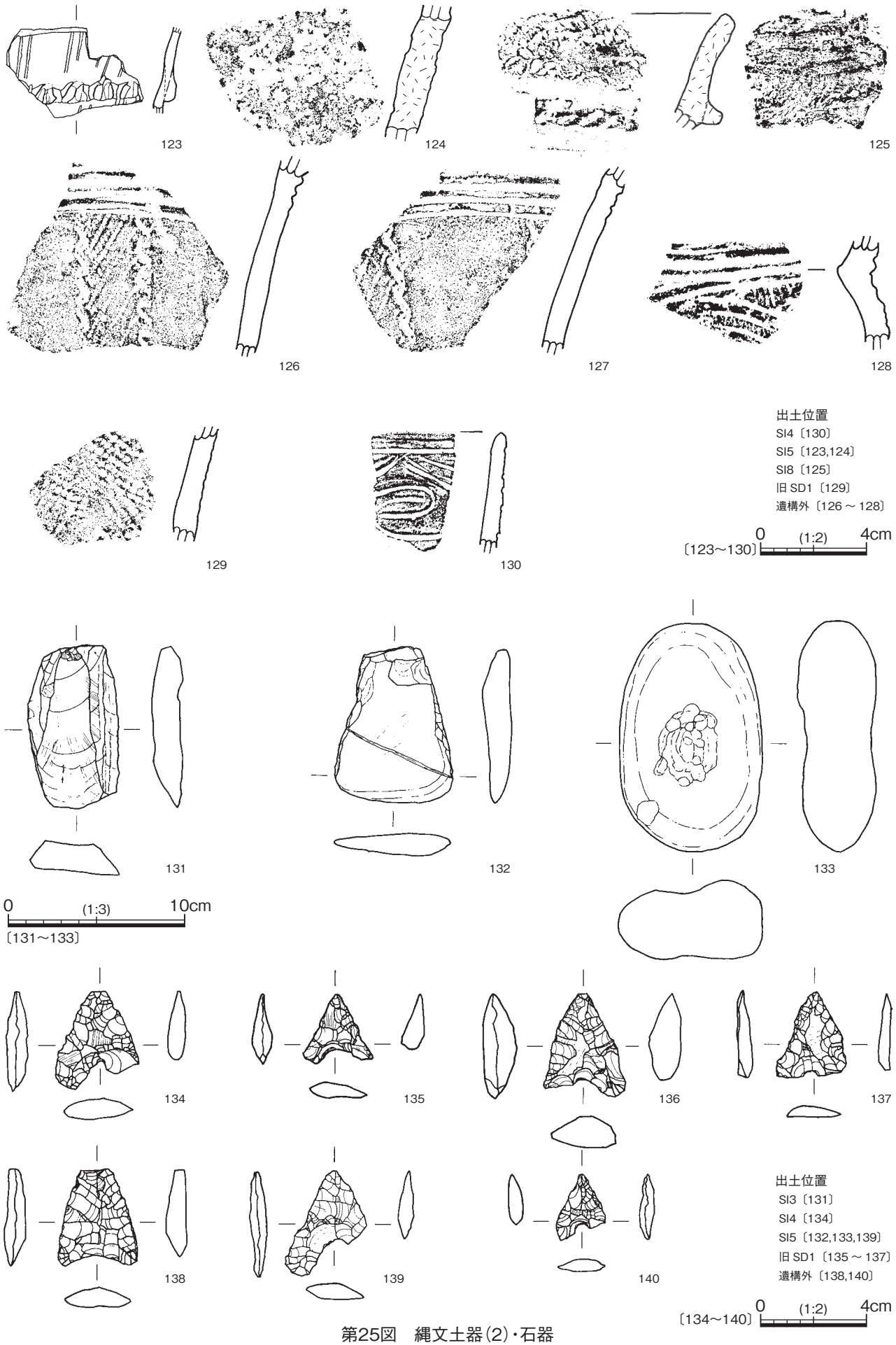


出土位置

SI1〔100,109,112〕
SI2〔97,101,102,108〕
SI3〔110〕
SI4〔98,105〕
SI5〔99,111〕
SI8〔107〕
Pit6〔103〕
旧 SD1〔104,106,113,115,117,119～121〕
遺構外〔114,116,118,122〕

0 (1:2) 4cm

第24図　縄文土器(1)



第25図　縄文土器(2)・石器

第４章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

１．はじめに

笛吹市に所在する馬場遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

ウィグルマッチングを行った試料は、古墳時代前期と推定されている竪穴住居跡 SI-2 から出土した炭化材 P36 である。最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。残存年輪数は 94 年輪で、樹皮に近い方から 1-5 年目（PLD-30750）、46-50 年目（PLD-30751）、86-90 年目（PLD-30752）の３ヶ所から測定試料を採取した。試料写真と年輪計測の結果を図版１に示す。また、単体で測定を行った試料は、弥生時代末頃と推定されている竪穴遺構 SI-7 の炉から出土したイネ炭化種子が２点（PLD-30749）である。

測定試料の情報、調製データは表１、２のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表１　ウィグルマッチング測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD-30750	遺構：SI-2 遺物No.P36 種類：炭化材（エノキ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 残存年輪数：94年輪 状態：dry	採取位置：1-5年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N）
PLD-30751		採取位置：46-50年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N）
PLD-30752		採取位置：86-90年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N）

表２　単体測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30749	遺構：SI-7 位置：炉	種類：炭化種実（イネ種子）2点 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N）

３．結果

表３、４に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、表３にはさらにウィグルマッチング結果を、図１にウィグルマッチング結果を、図２に単体試料の暦年

較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、１年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。したがって、試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数を考慮する必要がある。

表３　放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-30750	-26.97±0.23	1868±18	1870±20	85-142 cal AD (52.2%) 156-167 cal AD (7.0%) 195-209 cal AD (9.0%)	81-216 cal AD (95.4%)
PLD-30751	-29.07±0.26	1941±19	1940±20	28-40 cal AD (14.3%) 49-80 cal AD (53.9%)	17- 90 cal AD (86.1%) 98-124 cal AD (9.3%)
PLD-30752	-28.89±0.24	1941±19	1940±20	28-40 cal AD (14.3%) 49-80 cal AD (53.9%)	17- 90 cal AD (86.1%) 98-124 cal AD (9.3%)
		最外試料年代		105-130 cal AD (58.0%) 150-160 cal AD (10.2%)	95-135 cal AD (74.3%) 142-166 cal AD (21.1%)
		最外年輪年代		107-132 cal AD (58.0%) 152-162 cal AD (10.2%)	97-137 cal AD (74.3%) 144-168 cal AD (21.1%)

表４　単体試料の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-30749	-27.81±0.26	1876±19	1875±20	79-138 cal AD (68.2%)	75-214 cal AD (95.4%)

４．考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち２σ暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して、結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については小林（2009）を参照した。

ウィグルマッチングを行ったSI-2出土の炭化材P36は、95-135 cal AD (74.3%)および142-166 cal AD (21.1%)であった。最外年輪年代は、最外試料の中心から外側にある２年（2.5 年を小数以下切り捨て）を足して、97-137 cal AD(74.3%) および 144-168 cal AD(21.1%) になる。これは弥生時代後期の暦年代に相当し、SI-2 の推定時期である古墳時代前期よりも古い年代であった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受け、木材が伐採された年代よりもやや古い年代を示していると考えられる。

単体測定試料である SI-7 の炉出土のイネ炭化種子（PLD-30749）は、75-214 cal AD (95.4%) であった。これは弥生時代後期の暦年代に相当し、SI-7 の推定時期である弥生時代末頃に対して整合的であった。なお、種実試料の場合、測定結果は種実の結実年代を示している。

参考文献

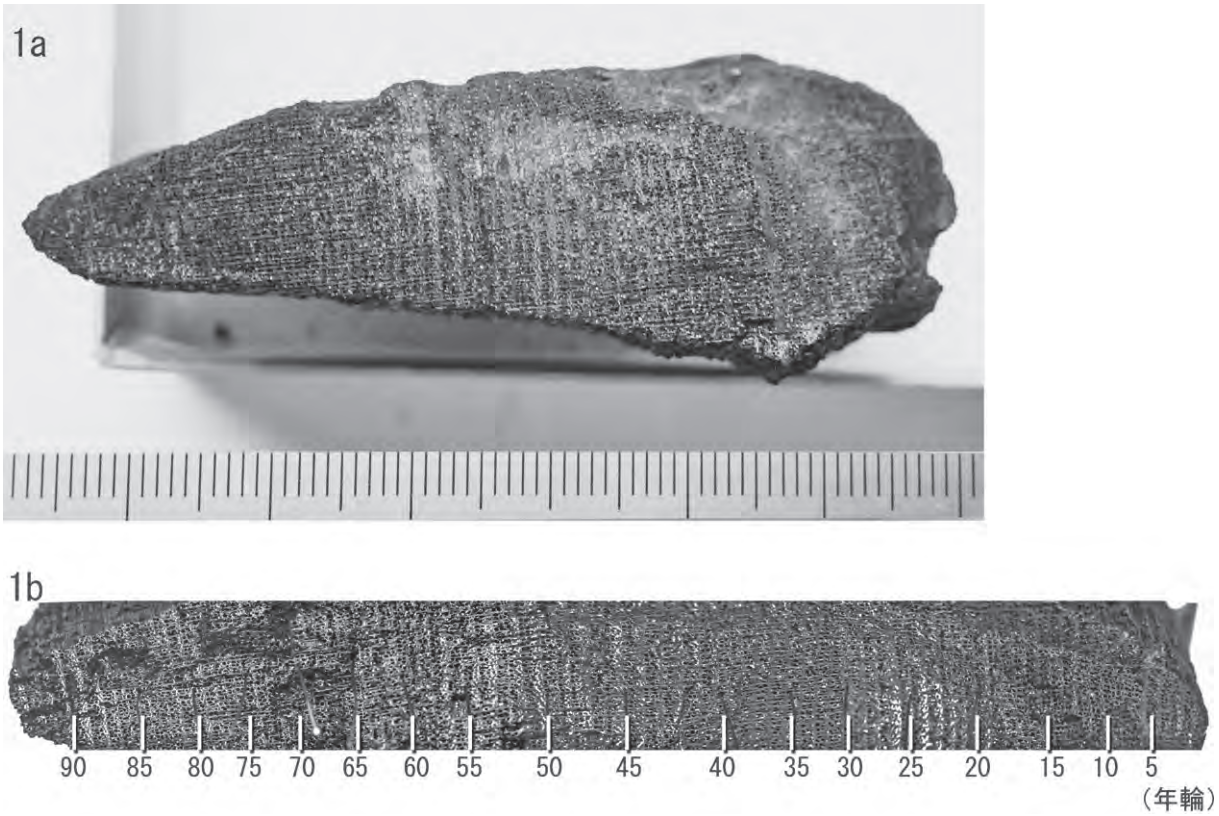
Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43(2A), 381-389.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」:55-82, 雄山閣.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」:3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



図版１　ウィグルマッチングを行った木材と年輪計測結果
1a. 木材の横断面（柾目、残存径 3.0 × 6.7㎝、エノキ属）
1b. 年輪計測結果（94 年輪、最終形成年輪なし）

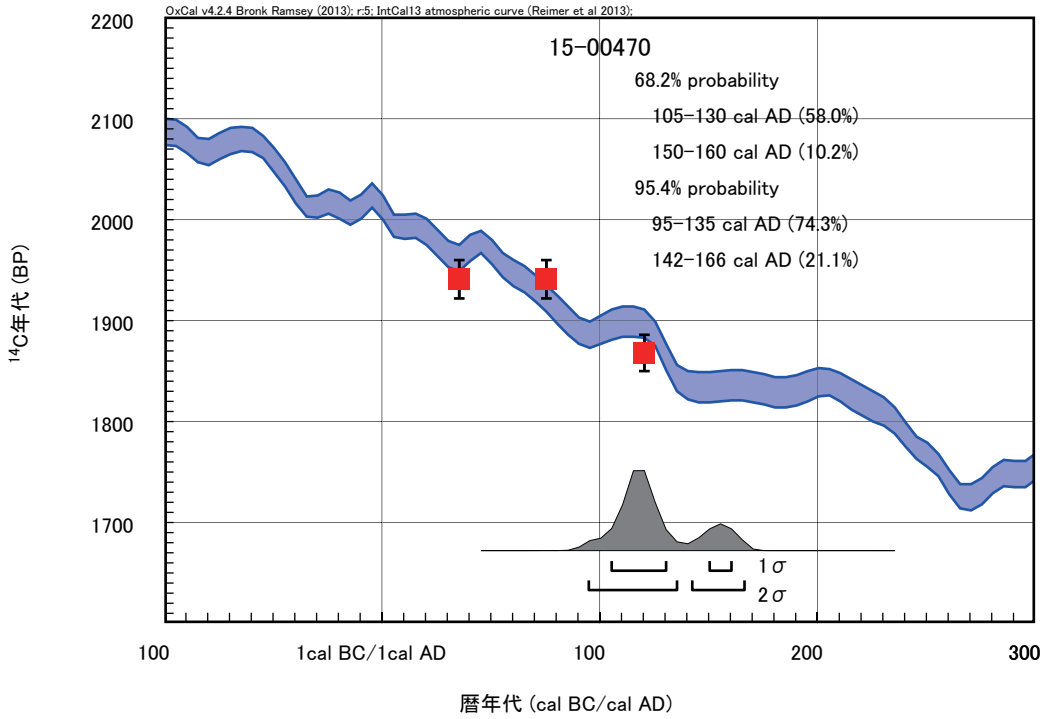


図１　ウィグルマッチング結果

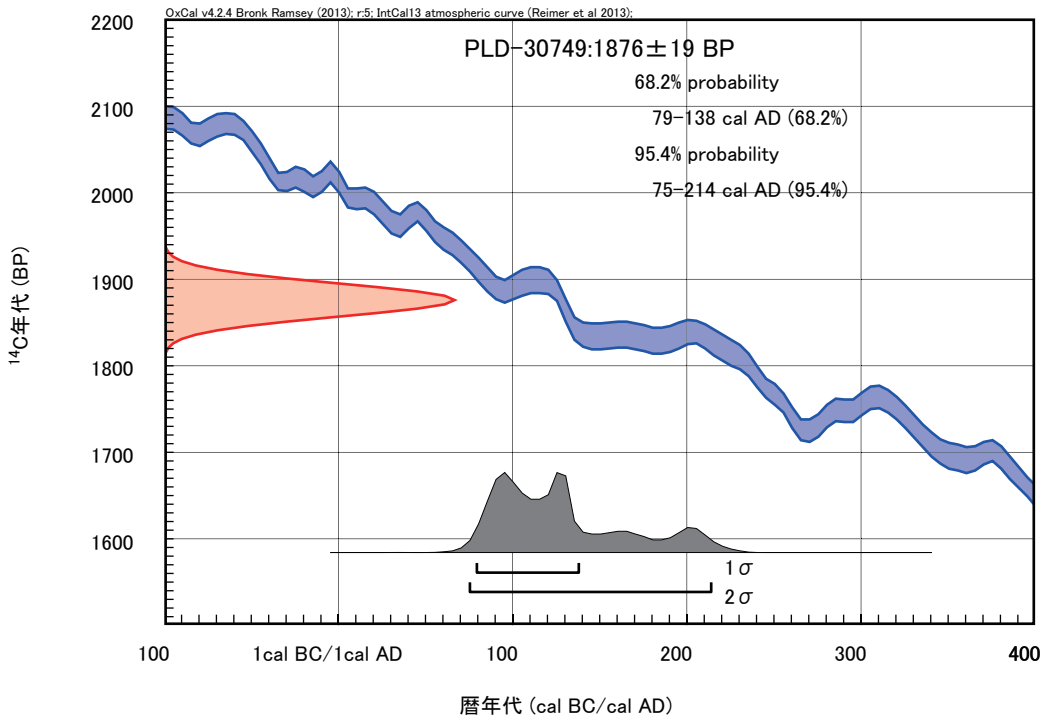


図２　単体測定試料の暦年較正結果

第２節　馬場遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

馬場遺跡は笛吹市境川町に位置し、東側には前付遺跡が隣接している。ここでは、馬場遺跡から出土した炭化材について樹種同定を行った。なお、一部の試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２．試料と方法

試料は、古墳時代前期の住居跡と推定されている竪穴住居跡 SI-1 ～ SI-6 と、弥生時代末頃の住居跡と推定されている竪穴住居跡 SI-7、時期不明の遺構 SI-10 から出土した炭化材である。試料は、現場で取上げられた試料と、炉と焼土の土壌を水洗し、フローテーションとφ 470 μ m のフルイによって抽出された試料がある。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径１cm の真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

３．結果

樹種同定の結果、広葉樹のクマシデ属イヌシデ節（以下、イヌシデ節）、アサダ、クリ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、クリ - コナラ属コナラ節、エノキ属、クワ属、キハダ、ハイノキ属ハイノキ節（以下、ハイノキ節）の 11 分類群と、単子葉類のイネ科草本の、計 12 分類群が確認された。その他に、微細すぎて同定できなかった炭化材を不明とした。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) クマシデ属イヌシデ節　*Carpinus* sect. *Eucarpinus*　カバノキ科　図版１　1a-1c（SI-4　炉 -2）

やや小型から中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で１～３列幅、集合放射組織がみられる。

イヌシデ節は温帯から暖帯の低山地に分布する落葉中高木で、イヌシデとイワシデ、アカシデがある。材は重硬で靱性が大きく、割裂しにくい。

(2) アサダ　*Ostrya japonica* Sarg.　カバノキ科　図版１　2a-2c（SI-5　炉 上層）

径が中型の道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、１～４列幅である。

アサダは温帯の山地に生育する落葉高木である。材は極めて重硬で、切削加工および割裂は困難である。

(3) クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科　図版１　3a-3c（SI-4　P648）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(4) ブナ属　*Fagus*　ブナ科　図版１　4a-4c（SI-1　P902）

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一のものと階段状の２種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、２～数列のもの、広放射組織の３種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は、堅硬および緻密で、靱性があるが保存性は低い。

(5) コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版１　5a-5c（SI-3　炉）

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状とな

る。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど８種がある。イチイガシとシリブカガシ－マテバシイ以外は木材組織による識別が困難なため、イチイガシとシリブカガシ－マテバシイを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靱で、水湿に強い。

(6) コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　図版１・２　6a-6c（SI-1　P893）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の２種類がある。

ヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靱で、加工困難である。

(7) クリ－コナラ属コナラ節　*Castanea crenata* Siebold et Zucc. － *Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版２　7a（SI-7　炉 焼土層）

早材部はないが、晩材部の小道管は薄壁で角張り、火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。試料が小さく、広放射組織の有無が確認できなかったため、これ以上の同定は困難であった。

(8) エノキ属　*Celtis*　ニレ科　図版２　8a-8c（SI-2　P36）

大型の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では径を減じた薄壁の小道管が集団をなして接線から斜めに配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。小道管の内壁にらせん肥厚がみられる。放射組織は３～８列幅の異性で、鞘細胞がある。

エノキ属は温帯から熱帯に分布する落葉性の小高木から高木で、エゾエノキやエノキなど４種がある。材は比較的硬いが、強度や耐朽性は低く、狂いが出やすい。

(9) クワ属　*Morus*　クワ科　図版２　9a-9c（SI-4　炉 -1）

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は１～５列幅で、上下端の１～２細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は温帯から暖帯、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、靱性に富む。

(10) キハダ　*Phellodendron amurense* Pupr.　ミカン科　図版２　10a-10c（SI-4　P649）

大型で丸い道管が早材部に配列し、晩材ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列

表１　遺構別の樹種組成

時期	古墳前期										弥生末頃か	不明	
遺構	SI-1	SI-2		SI-3	SI-4		SI-5		SI-6		SI-7	SI-10	
分類群　位置	－	－	炉	炉	－	炉	Pit4	炉	Pit	土器内堆積土	炉	焼土	計
クマシデ属イヌシデ節						1		1					2
カバノキ属								1					1
クリ					1								1
ブナ属	1												1
コナラ属アカガシ亜属				1									1
コナラ属クヌギ節	16				1		1		2	1		1	22
クリーコナラ節											1		1
エノキ属		2											2
クワ属						1							1
キハダ					1								1
ハイノキ属ハイノキ節			1										1
イネ科				1	4	1		1					7
不明				2							1	1	4
計	17	2	1	4	7	3	1	3	2	1	2	2	45

する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管内にはらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性で、１～４列幅の紡錘形である。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

（11）ハイノキ属ハイノキ節　*Symplocos* sect. *Lodhra*　ハイノキ科　図版２　11a-11c（SI-2　炉）

小型で角張った道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は30段程度の階段状で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は１～４列幅程度で、上下に方形もしくは直立細胞が数個連なる異性である。

ハイノキ節は主に暖帯から熱帯に分布する常緑の低木または高木で、ハイノキやクロキ、シロバイなど17種がある。材は緻密で、やや堅硬である。

（12）イネ科　Gramineae　図版２　12a（SI-3　炉 １層）

柔細胞と維管束で構成される単子葉類である。維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱で、維管束を囲む維管束鞘は薄い。稈の組織のみから属や種を識別するのは難しいが、小径のため草本である。

４．考察

SI-1の試料は、現場で採取された炭化材である。確認された樹種はほぼクヌギ節で、他はブナ属が１点みられたのみであった。形状は、いずれも破片もしくは形状不明で、建築部材の可能性がある。

SI-2では、現場採取の炭化材は２点ともエノキ属で、建築部材の可能性がある。また、炉内の土壌からは燃料材と考えられるハイノキ節が確認された。

SI-3の試料は、いずれも炉内の土壌から得られた炭化材である。アカガシ亜属と、イネ科草本が確認された。いずれも燃料材の可能性がある。

SI-4では、現場採取の炭化材ではクヌギ節とクリ、キハダ、イネ科が確認された。クヌギ節とクリは丸木？、キハダは丸木であり、建築部材の可能性がある。イネ科は束状になっていたため、床材や屋根材などの可能性があり、出土状況とあわせて検討する必要がある。また、炉内の土壌からはクワ属とイヌシデ節、イネ科が確認され、これらは燃料材であると思われる。

SI-5では、炉の床硬化面下から採取されたのがイネ科、炉の床硬化面からはイヌシデ節、炉の上面からはアサダが確認された。これらは燃料材と考えられるが、床硬化面下のイネ科や床硬化面のイヌシデ節は、炉の構築時に混入した可能性もある。また、Pit4遺物内土から得られた炭化材はクヌギ節であった。破片で、用途は不明である。

SI-6では、現場採取されたPit1の炭化材と、ピット内の土壌と土器内堆積土の土壌水洗で得られた炭化材があり、いずれもクヌギ節のみが確認された。用途は不明であるが、ピット内の試料は建築部材などの可能性が考えられる。

SI-7では、炉の焼土層で採取された土壌からクリ－コナラ節が確認されたが、炉の粘土層で採取された土壌から得られた炭化材は微細で、樹種が確認できなかった。

SI-10では、焼土範囲１層の土壌からクヌギ節が確認されたが、焼土範囲２層の土壌から得られた炭化材は微細で、樹種が確認できなかった。

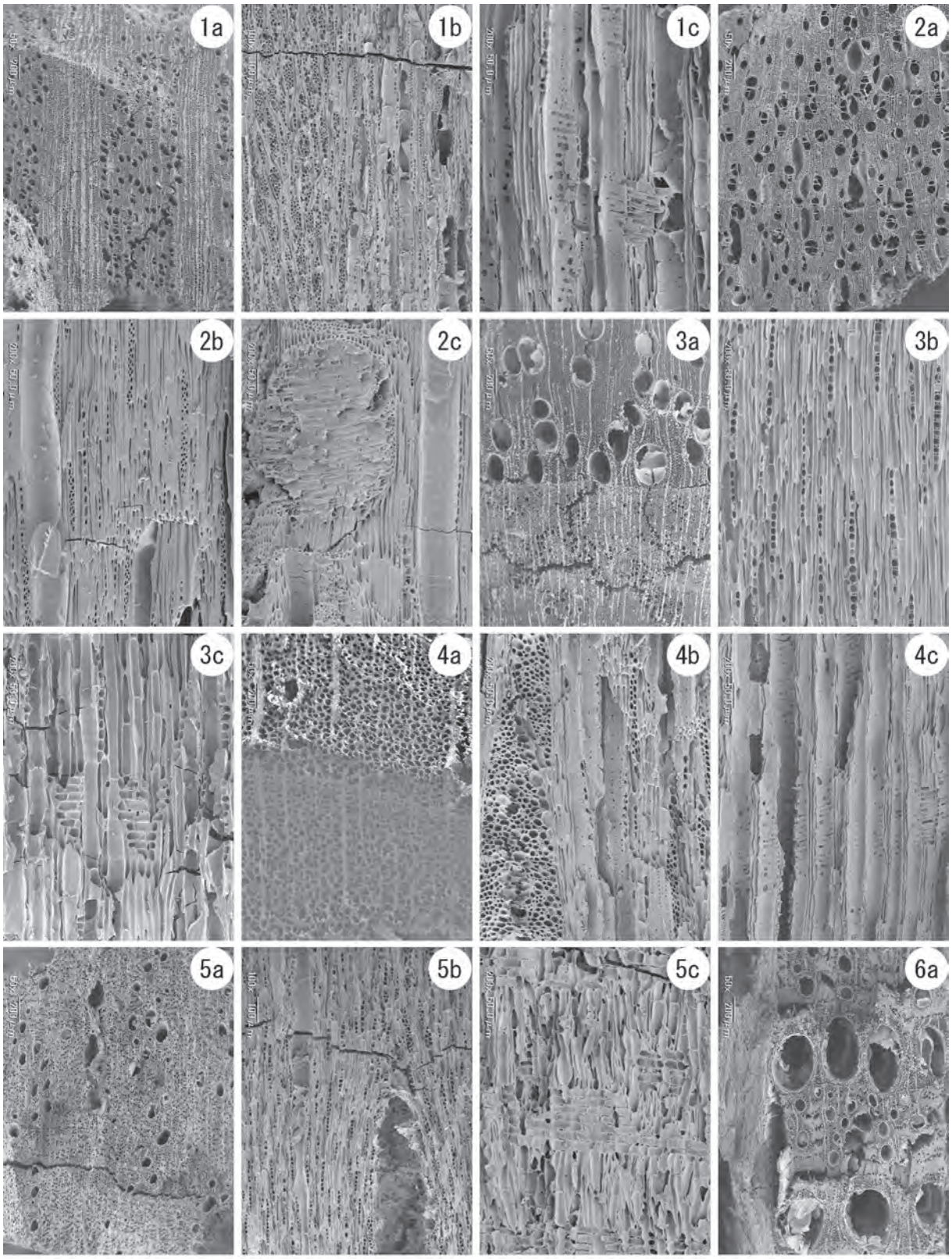
まとめると、現場で採取された建築部材と思われる炭化材はSI-1とSI-6ではクヌギ節が主体であったが、SI-2ではエノキ属、SI-4ではクヌギ節の他にクリ、キハダ、イネ科などがみられた。草本のイネ科を除いた広葉樹はいずれも重硬な材であり、建築部材として適した材が選択的に利用されていた可能性がある。なお、山梨県内における古墳時代の建築材の分析例はそれほど多くはないが、クヌギ節やコナラ節が主体で、他にも針葉樹や広葉樹など多様な樹種が確認されている（伊東・山田編，2012）。一方、炉の土壌から得られた炭化材では比較的多様な広葉樹がみられた。遺跡周辺の木材が燃料材として利用されていたと推測される。

参考・引用文献

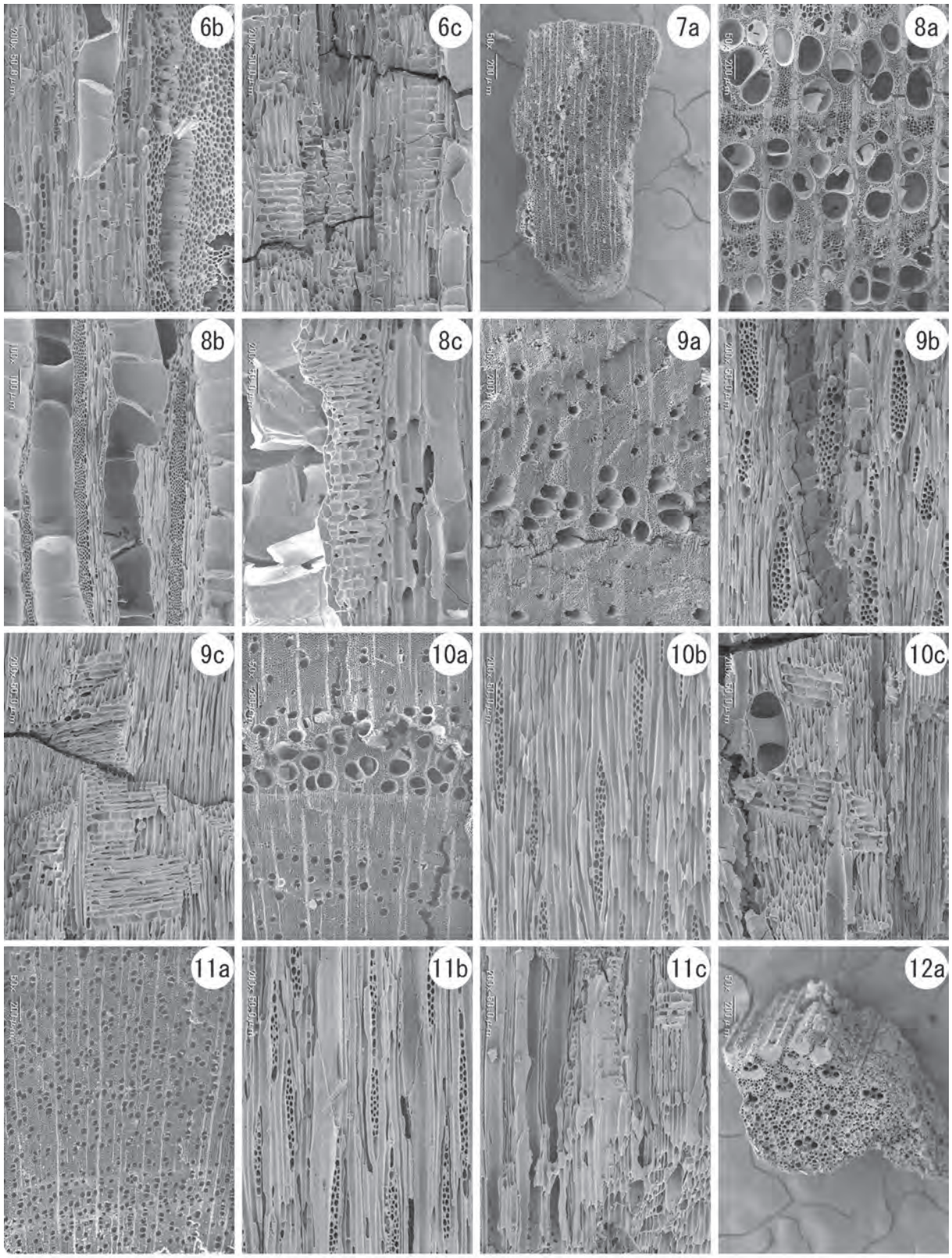
平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社．

付表１　樹種同定結果一覧

遺構名	位置	No.	樹種	形状、状態	サイズ	残存年輪数	抽出方法	遺構時期	年代測定番号
SI-1	-	P893	コナラ属クヌギ節	破片	＜5cm角	＞20	現場採取	古墳前期	
	-	P894	コナラ属クヌギ節	破片	＜6cm角	＞30			
	-	P895	コナラ属クヌギ節	角材？＋破片	2.5×4.5×5cm他	20			
	-	P896	コナラ属クヌギ節	破片	＜3cm角	＜20			
	-	P897	コナラ属クヌギ節	破片	＜2cm角	＜5			
	-	P898	コナラ属クヌギ節	不明	0.3×2.5×3.5cm	10			
	-	P899	コナラ属クヌギ節	不明	0.5×2×3.5cm	不明			
	-	P900	コナラ属クヌギ節	不明	2×5×6cm	30			
	-	P901	コナラ属クヌギ節	破片	＜4cm角	不明			
	-	P902	ブナ属	破片	＜3cm角	＜5			
	-	P903	コナラ属クヌギ節	破片	＜0.5cm角	＜1			
	-	P904	コナラ属クヌギ節	破片	＜3cm角	＜10			
	-	P905	コナラ属クヌギ節	不明	0.5×4×5.5cm	不明			
	-	P906	コナラ属クヌギ節	不明	1×2.5×2cm	25			
	-	P907	コナラ属クヌギ節	破片	＜3cm角	＜15			
	-	P1043	コナラ属クヌギ節	破片	＜4cm角	＜23			
	-	一括	コナラ属クヌギ節	破片	＜3.5cm角	＜22			
SI-2	-	P36	エノキ属	みかん割り状	2.5×7.3×6.5cm	94	現場採取		PLD-30750～30752
	-	P37	エノキ属	破片	＜3cm角	＜15			
	炉	-	ハイノキ属ハイノキ節	破片	＜2cm角	＜3	土壌水洗		
SI-3	炉	-	コナラ属アカガシ亜属	破片	＜0.5cm角	不明	土壌水洗		
	炉　1層	-	イネ科	破片	＜1cm角	-			
	炉　2層	-	-	炭化物なし	-	-			
	炉　3層	-	不明	破片（微細）	＜0.2cm	-			
	炉　4層	-	不明	破片（状態悪い）	＜1cm角	-			
SI-4	-	P647	コナラ属クヌギ節	丸木？	φ4cm	12	現場採取		
	-	P648	クリ	丸木？	φ3.5cm	5			
	-	P649	キハダ	丸木＋破片	φ6cm	5			
	-	P1003	イネ科	稈	φ0.5cm	-			
	-	P1004	イネ科	稈	φ0.5cm	-			
	-	P1005	イネ科	稈	φ0.5cm	-			
	-	P1006	イネ科	稈	φ0.5cm	-			
	炉	1	クワ属	破片	＜1cm角	＜3	土壌水洗		
		2	クマシデ属イヌシデ節	破片	＜1cm角	＜2			
		3	イネ科	稈（破片）	φ0.4cm？	-			
SI-5	炉　床硬化面下	-	イネ科	稈（破片）	＜1cm角	-	土壌水洗		
	炉　上層	-	カバノキ属	破片	＜1.5cm角	不明			
	炉　床硬化面	-	クマシデ属イヌシデ節	破片	＜0.5cm角	＜2			
	pit4遺物内土	-	コナラ属クヌギ節	破片	＜0.5cm角	＜3			
SI-6	Pit1	-	コナラ属クヌギ節	破片	＜2.5cm	＜5	現場採取		
	ピット	-	コナラ属クヌギ節	破片	＜1cm角	＜2	土壌水洗		
	土器内堆積土	-	コナラ属クヌギ節	破片	＜3cm角	＜5			
SI-7	炉	-	-	炭化物なし	-	-	土壌水洗	弥生末頃か	
	炉　焼土層	-	クリーコナラ節	破片	＜0.5cm角	＜1			
	炉　粘土層	-	不明	破片（微細）	＜0.5cm角	不明			
SI-10	焼土範囲1層	-	コナラ属クヌギ節	破片	＜1.5cm角	＜2	土壌水洗	-	
	焼土範囲2層	-	不明	破片（微細）	＜0.2cm角	不明			



図版１　馬場遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（1）
1a-1c.　クマシデ属イヌシデ節（SI-4　炉 -2）、2a-2c.　アサダ（SI-5　炉 上層）、
3a-3c.　クリ（SI-4　P648）、4a-4c.　ブナ属（SI-1　P902）、5a-5c.　コナラ属アカガシ亜属（SI-3　炉）、
6a.　コナラ属クヌギ節（SI-1　P893）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



図版２　馬場遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（2）
6b-6c.　コナラ属クヌギ節（SI-1　P893）、7a.　クリーコナラ節（SI-7　炉 焼土層）、
8a-8c.　エノキ属（SI-2　P36）、9a-9c.　クワ属（SI-4　炉 -1）、10a-10c.　キハダ（SI-4　P649）、
11a-11c.　ハイノキ属ハイノキ節（SI-2　炉）、12a.　イネ科（SI-3　炉 1 層）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

第３節　馬場遺跡の竪穴住居跡から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

１．はじめに

山梨県笛吹市境川町に位置する馬場遺跡は、約 1.4km の細長く延びる小丘上に立地する縄文時代から古墳時代の複合遺跡である。ここでは、弥生時代末頃と古墳時代前期の竪穴住居跡から出土した炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生、栽培状況について検討した。なお、試料の一部を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２．試料と方法

試料は、水洗選別済みの２試料と、現地取り上げの２試料の、計４試料である。水洗試料は５号竪穴住居跡（SI-5）の炉の上層と７号竪穴住居跡（SI-7）の炉、現地取り上げ試料は５号竪穴住居跡（SI-5）から回収された。SI-5 は古墳時代前期、SI-7 は弥生時代末頃の遺構と推定されている。

試料の水洗および炭化物の抽出は、公益財団法人山梨文化財研究所によって行われた。水洗には、420 μm の目の篩が使用された。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。試料は、笛吹市教育委員会で保管される予定である。

３．試料と方法

同定した結果、木本植物では広葉樹のモモ炭化核の１分類群、草本植物ではイネ炭化種子の１分類群の、計２分類群が見いだされた（表１）。この他に、科以上の細分に必要な識別点が残存していない一群を、同定不能炭化種実とした。

表１　馬場遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

	遺構	SI-5			SI-7
	採取位置			炉 上層	炉
	遺物番号	P819	P1032	-	-
	時期		古墳前期		弥生末頃か
分類群	水洗量(mℓ)	-	-	19600	1500
モモ	炭化核	3 (4)	(2)	(3)	
イネ	炭化種子				12 (63)
同定不能	炭化種実				(9)

以下、産出した炭化種実について遺構別に記載する（同定不能炭化種実は除く）。

５号竪穴住居跡：モモの完形が３点、破片が９点得られた。完形の３点は、いずれも動物食痕がみられた。

７号竪穴住居跡：イネの完形が 12 点と破片が 63 点得られた。このうち、２点を用いて放射性炭素年代測定（PLD-30749）が行われた。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) モモ　*Amygdalus persica* L.　炭化核　バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。完形ならば下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。計測可能な３点（幅は１個体のみ計測）の大きさは、高さ 16.9 ～ 18.8（平均 17.6 ± 1.0）mm、幅 16.4mm、厚さ 12.3 ～ 14.3（平均 13.0 ± 1.1）mm（表２）。

表２　モモ完形核の大きさ

高さ	幅	厚さ
18.8	16.4	12.3
17.1	(14.4)	14.3
16.9	(13.6)	12.4

単位：mm、括弧は残存長

(2) イネ　*Oryza sativa* L.　炭化種子（頴果）　イネ科

上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の２本の浅い溝がある。図版に示した２点の大きさは、長さ 4.5mm、幅 2.9mm と、長さ 4.9mm、幅 2.7mm。

４．考察

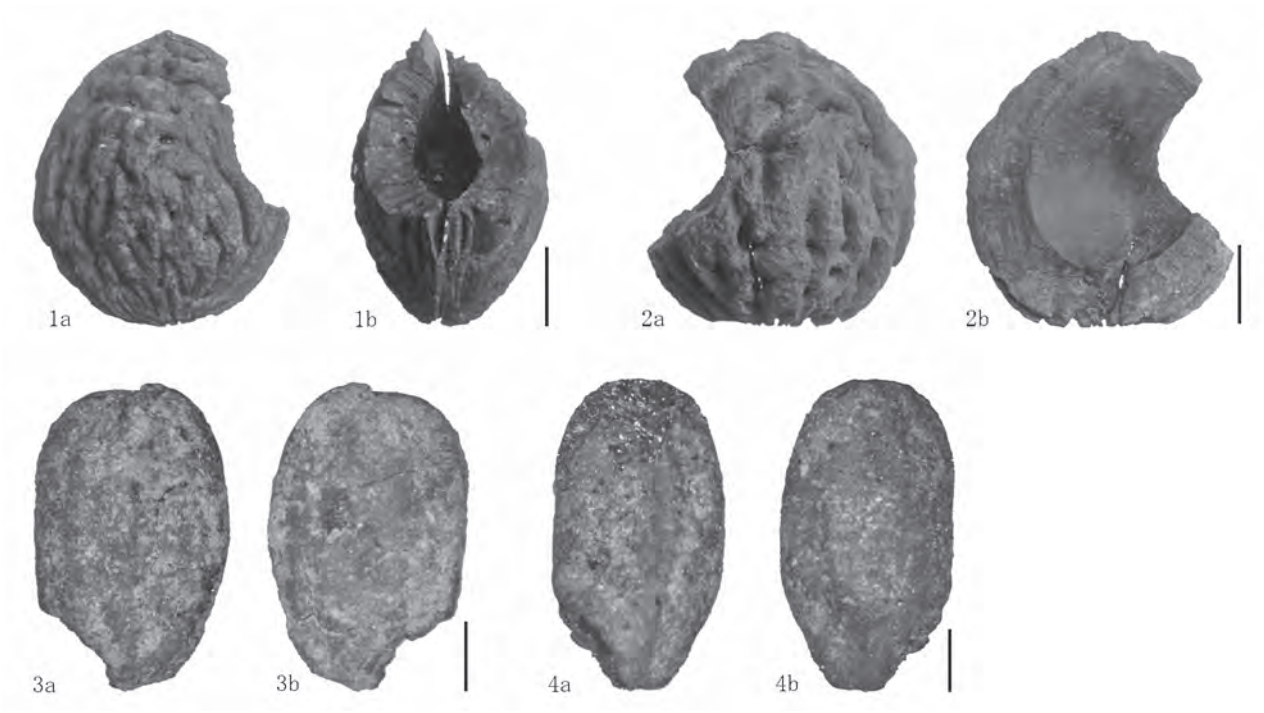
２棟の竪穴住居跡から出土した炭化種実を同定した結果、古墳時代前期の５号竪穴住居跡からは栽培植物のモモ、弥生時代末頃の７号竪穴住居跡からは栽培植物のイネが得られた。イネは食用部位である種子（炭

化米）が炉から得られており、加工中や調理中に炭化して残存した可能性などが考えられる。モモは完形個体にネズミ類による動物食痕が残っており、果実が利用された後、種子（核）がネズミ類によって齧られたと推定される。

得られた種実は少ないが、水田作物であるイネや果樹のモモの利用が確認できた。東側に隣接する前付遺跡からは、古墳時代前期の竪穴住居跡からオニグルミとクリ、モモ、ウリ属が得られており（佐々木・バンダリ, 2015）、今回の結果と整合的であった。これまでに、アワやムギ類の雑穀の利用痕跡はみられないため、今後の試料にアワやムギ類の炭化種実が含まれるかどうかが注目される。

引用文献

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（2015）前付遺跡出土の炭化種実．公益財団法人山梨文化財研究所編「前付遺跡・大祥寺遺跡」：274-278，甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合・笛吹市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所．



スケール 1，2：5mm，3，4：1mm

図版１　馬場遺跡から出土した炭化種実
1．モモ炭化核動物食痕（SI-5、P819）、2．モモ炭化核動物食痕（SI-5、P819）、
3・4．イネ炭化種子（SI-7、炉、PLD-30749）

第５章　テフラ分析

公益財団法人山梨文化財研究所
河西　学

はじめに

馬場遺跡は、山梨県笛吹市寺尾に所在し、緑色変質した火山岩類の多い新第三系から構成される御坂山地の前縁に形成された曽根丘陵台地の平坦面上に位置し、前付遺跡の北西に隣接する。この平坦面は、澤(1981)のⅡ面、また内藤・桂田（1992）の原面に相当する。ここでは、標準土層での層位確認および住居跡床面構成堆積物の層位確認を目的としてテフラ分析を行ったので、以下に報告する。

１．試料

試料は、Ａ地点（調査区東端トレンチ）で 11 点、Ｂ地点（竪穴住居跡ＳＩ４）で２点の総計 13 点を採取し分析した（第１・３図)。Ａ地点は、標準土層を示し、試料は、高さ 5cm 幅 10cm 奥行き５cm の部分から採取し、高さ方向の試料間の距離は５cm である。Ｂ地点の試料は、古墳時代前期の竪穴住居跡ＳＩ４の床面構成堆積物（９層）から採取した。

２．分析方法

試料は、湿ったまま約 20g を秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析篩（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩（#60、#250）を用いて >1/4mm および 1/4 ～ 1/16mm の粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析試料の乾燥重量は、別に同一試料約５～ 10g を秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で 105℃、５時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/4 ～ 1/16mm の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行なった。試料ごとに火山ガラス・その他の粒子の合計が 1000 粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従った。細粒結晶を包有するＦ型火山ガラスはＦ’型として区別した。火山ガラスの屈折率の測定は、位相差顕微鏡による浸液法（新井 1972）による。

３．分析結果

偏光顕微鏡下での火山ガラスの計数結果を第１表に示す。これをもとに湿重基準の含水率、粒径組成、1/4 ～ 1/16mm の全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第１～２図に示す。なお 1/4 ～ 1/16mm 全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの 1/4 ～ 1/16mm 粒径の火山ガラスの割合で表示した [(1)]。火山ガラスの屈折率測定値を第２表に示す。以下に各地点の特徴について述べる。

Ａ地点（調査区東端トレンチ）（第１図）

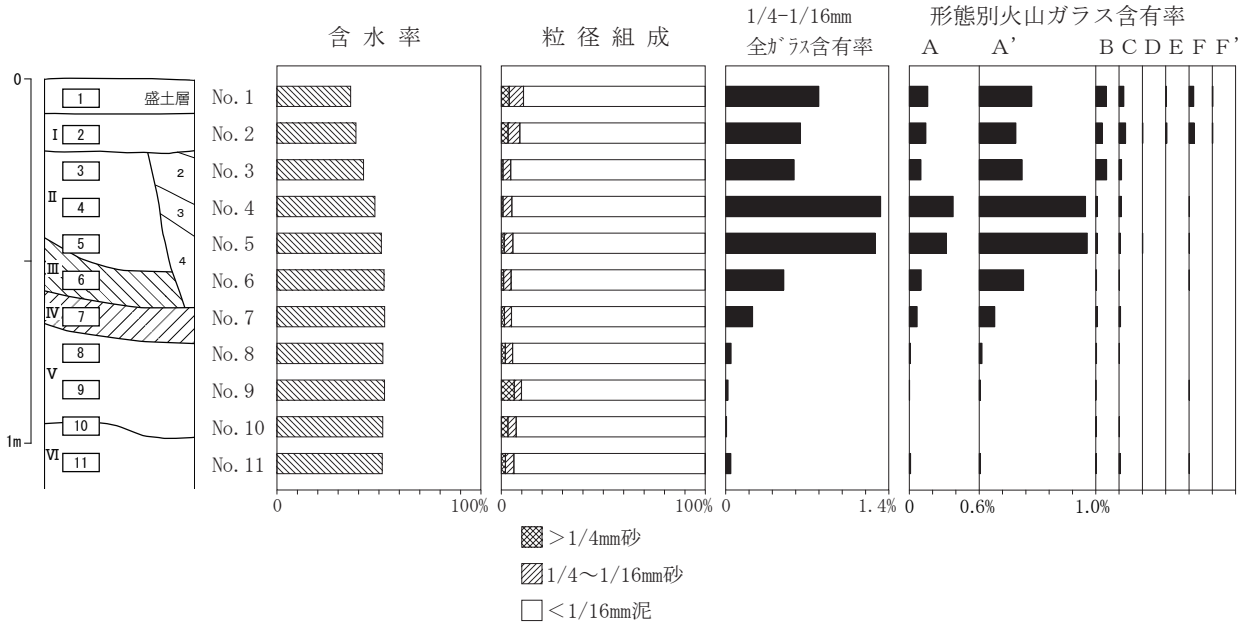
Ａ地点は、標準土層を示す深掘地点であり、最上位に盛土層があり、その下にⅠ～Ⅵ層が区分されている。Ⅱ～Ⅲ層断面には、古墳時代前期の竪穴住居跡による掘り込みが認められる。

含水率は、Ⅱ層下部からⅥ層にかけては 51 ～ 53％の安定した値を示すが、上方に漸減して最上部 No.1 では 36％を示す。粒径組成における 1/4mm 以上の粒子は、全体に１～６％と低率であり、No.9 で最大値を示した後、上方に漸減し、Nos.3 ～４で最小値を示した後、上方に漸増する。1/4 ～ 1/16mm 粒子は、3 ～ 7％の値を示し、上方でやや漸増する傾向が認められる。

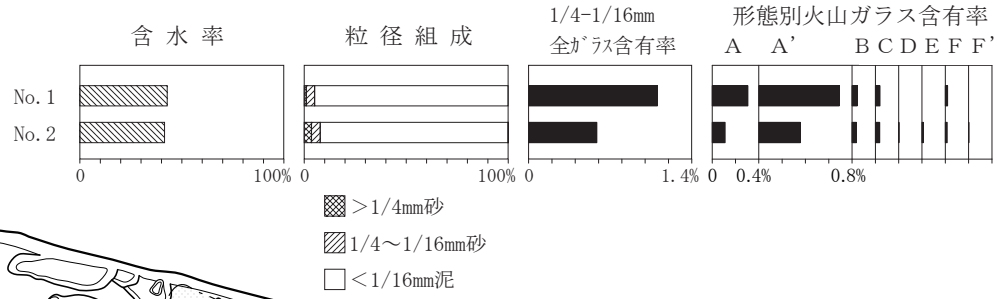
1/4 ～ 1/16mm 全火山ガラス含有率は、Nos.4 ～５で 1.3％の最大値を示す。Nos.4 ～５では、泡壁（バブルウォール）型平板状のＡ型、およびＹ字状のＡ’型火山ガラスが極大を形成している。Ａ・Ａ’型火山ガラスは、No.7 および No.6 と上方に向かって増加し、Nos.4 ～５で極大を示し、No.3 で急減した後、上方に

第１表　火山ガラス計測粒数 (+ は計数以外の検出を示す)

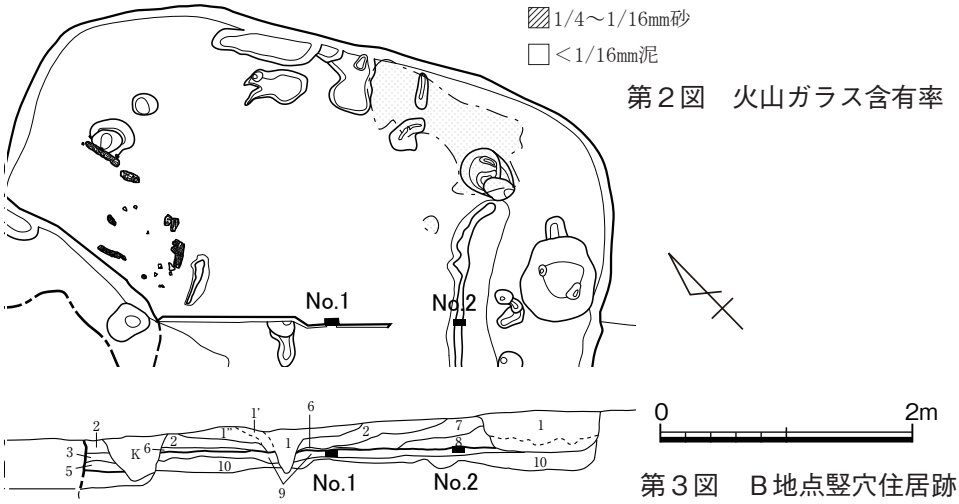
地点		馬場遺跡Ａ地点											馬場Ｂ地点	
試料番号		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 1	No. 2
火山ガラス	A　無色	23	25	27	87	75	28	20	3	1		3	75	25
	A　褐色		+	+										1
	A’ 無色	65	55	98	210	216	104	39	7	3		3	169	83
	A’ 褐色	+				1								
	B　無色	13	10	25	3	3	2	4	2	1	1	1	11	9
	B　褐色													
	C　無色	5	10	6	5	3	1	3	1		1	3	9	9
	C　褐色	1						1					1	
	D　無色		1			1								1
	E　無色	1	2											3
	F　無色	6	8		1	1	1	+		1		1	5	4
	F　褐色													
	F’ 無色	1	1											1
	F’ 褐色													
その他		885	888	844	694	700	864	933	987	994	998	989	730	864
合計		1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000



第１図　火山ガラス含有率（Ａ地点調査区東端トレンチ）



第２図　火山ガラス含有率（Ｂ地点竪穴住居跡ＳＩ４）



第３図　Ｂ地点竪穴住居跡ＳＩ４試料採取地点位置図

第２表　火山ガラス屈折率測定値

地点	試料	形態ガラス	色調	屈折率（モード）	対比されるテフラ
Ａ地点	No.５	泡壁型（Ａ・Ａ’型）	無色	1.499-1.502（1.500）	姶良Ｔｎテフラ　ＡＴ
Ｂ地点	No.１	泡壁型（Ａ・Ａ’型）	無色	1.499-1.502（1.500）	姶良Ｔｎテフラ　ＡＴ
Ｂ地点	No.２	泡壁型（Ａ・Ａ’型）	無色	1.499-1.501（1.500）	姶良Ｔｎテフラ　ＡＴ

向かって漸増する。No.5 での無色Ａ・Ａ’型火山ガラスは、1.499 ～ 1.502（モード 1.500）の屈折率値を示すことから、姶良Ｔｎテフラ（ＡＴ）[2] の火山ガラスに同定される。火山ガラスの含有率曲線から推定されるＡＴの降灰層準は、Ⅱ層下部でⅢ層との境界部に近い No.5 付近と考えられる。その上位の Nos.1 ～ 3 の部分では、厚手で塊状を示すＢ型火山ガラスや中間型のＣ型火山ガラスがわずかながら連続して検出されるが、これらは水蒸気マグマ爆発に伴う急冷破砕型火山ガラスに相当し（町田ほか 2003）、立川ローム上部ガラス質火山灰（ＵＧ）[3] に由来すると考えられる。また Nos.1 ～ 2 では軽石型多孔質のＦ型火山ガラスとわずかに軽石型繊維状のＥ型火山ガラスが検出されるが、層位とガラスの形態から天城火山カワゴ平軽石（Ｋｇ）[4] に由来すると考えられる。

周辺地域のＡＴ火山ガラスの極大と暗色帯の関係は、地点によって一様ではない。暗色帯よりも上位の褐色ローム層中で泡壁型Ａ・Ａ’型火山ガラスの極大を示す例は、馬場遺跡のほか、上の平遺跡、立石遺跡、米倉山Ｂ遺跡などがある（河西 1987b、1990、1999a）。一方、暗色帯の上部で泡壁型Ａ・Ａ’型火山ガラスの極大が認められるのは、上野原遺跡や上の平遺跡第７次調査地点などである（河西 1987a、1999b）。これらの多様性は、地点ごとの堆積環境、土壌化作用、生物による擾乱、試料採取間隔などの要因が作用している可能性が考えられる。ＡＴ火山ガラスは、降灰後土壌化作用などによって粒子が上下方向に移動する。風成塵や降下テフラなどの風成堆積物の供給が安定していた竜ケ峰遺跡・上っ原遺跡などの立地する多摩丘陵においては、ＡＴ火山ガラスの含有曲線はなめらかな極大を描く傾向が認められる（河西 2011）。それらと比較すると馬場遺跡の堆積状況は、立川ローム第２暗色帯に対比されるⅢ・Ⅳ層からＡＴ降灰のⅡ層下部にかけては安定した堆積が継続したことが推定される一方、Ⅱ層上半部 No.4 から No.3 間の火山ガラス含有率の変化は急激で、攪乱や削剥など不安定な状況が存在した可能性が考えられる。

Ｂ地点（第２図）

Ｂ地点は、古墳時代前期の竪穴住居跡ＳＩ４の床面を構成する堆積物である。床面が硬質で貼り床の可能性を考える際、外見上Ａ地点Ⅵ層付近の岩相に類似性がありそうな所見から、床面の材料を他所からの搬入の有無を確認する目的で分析した。試料は、床面の中央部分で９層から採取した No.1 と住居跡東側にある周堤状の高まりの頂部で採取した No.2 である。

含水率は、42 ～ 43％の値を示す。粒径組成における 1/4mm 以上の粒子は、No.1 で 1％、No.2 で 4％の値を示す。1/4 ～ 1/16mm 粒子は、両試料とも 4％の値を示す。1/4 ～ 1/16mm 全火山ガラス含有率は、No.1 で 1.1％、No.2 で 0.6％の値を示す。形態別の火山ガラスは、Ａ･Ａ’型火山ガラスが主体で、Ｂ･Ｃ･Ｅ･Ｆ型火山ガラスを少量ずつ伴う特徴が認められる。Ａ・Ａ’型火山ガラスは、屈折率の測定値から AT に同定される（第２表）Ｂ地点 No.1 と No.2 は、Ａ地点の標準土層と比較すると、ＡＴ層準より下位との類似性は低く、ＡＴ層準より上位のⅡ層からⅠ層あるいは盛土層の特徴に類似し、堆積物中にＡＴ・ＵＧ・Ｋｇに由来する火山ガラスが混在すると考えられる。従って住居跡の床面の構築は、Ⅵ層相当の堆積物を利用した可能性は低いと判断される。台地面が緩やかに北西方向に傾斜しており、Ｂ地点での現地表面から床面までの深さは発掘データから詳細は確認できないが、ほぼ同時期とされるＡ地点の住居跡と同程度の掘り込みがなされたと考えられる。その際、Ⅱ層まで掘り込んで床面を構築時により新しい堆積物との混和がなされた可能性もあるし、Ⅲ層以下まで掘り込んだ後に掘り上げたⅡ層以上の堆積物の混合物を利用して床面を構築した可能性も考えられる。

註

（１）　形態ｘ型の火山ガラスの含有率Ａｘは、Ａｘ（％）＝（Ｃ／Ｂ）×（Ｅｘ／Ｄ）×１００　で算出される。ただし、Ｂ：試料の乾燥重量（ｇ）、Ｃ：1/4 ～ 1/16mm 粒径砂分の重量（ｇ）、Ｄ：計数した 1/4 ～ 1/16mm 粒径粒子の総数、Ｅｘ：計数したｘ型火山ガラスの粒数。

（２）　ＡＴの暦年較正した噴出年代は、3.0 万年前 (cal yr BP) と考えられている（工藤 2014）。

（３）　ＵＧの噴出年代は、早川由紀夫氏の 100 万年テフラデータベースによると暦年較正した年代は 1 万 5800 年前とされている（http://www.hayakawayukio.jp/database/index.php?kind=1m&mode=）。

（４）　Ｋｇの噴出年代は、暦年較正した年代として 3126 ～ 3145 年前 (cal BP) が用いられている（町田ほか、2003）。

文献

新井房夫 (1972)「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究」『第四紀研究』11、254-269。

遠藤邦彦・鈴木正章 (1980)「立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学』13、19-30。

河西学 (1987a)「上野原遺跡の火山灰層」『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告、第 19 集、95-98。

河西学 (1987b)「上の平遺跡のテフラ」『上の平遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告、第 29 集、121-124。

河西学 (1990)「立石遺跡での先土器遺物を包含する地層」『研究紀要』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター、6、47-58。

河西学 (1999a)「米倉山Ｂ遺跡における断層について」『米倉山Ｂ遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第 163 集、105-107。

河西学 (1999b)「上の平遺跡の断層とその層位」『うえのだいら－上の平遺跡第 7 次発掘調査報告書－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第 173 集、25。

河西学 (2011)「竜ケ峰遺跡の風成テフラ層の鉱物分析」『東京都多摩市竜ケ峰遺跡―（仮称）帝京大学八王子キャンパス第 1 新棟新築工事に伴う発掘調査報告書―』多摩市埋蔵文化財調査報告第 65 集、35-39。

澤祥 (1981)「甲府盆地西縁・南縁の活断層」『地理学評論』54、473-492。

内藤範治・桂田保 (1992)「甲府盆地南縁曽根丘陵の第四系」『第四紀、』25、67-78。

工藤雄一郎 (2014)「後期旧石器時代の広域編年対比にむけて―14C 年代測定の高精度化と較正年代による年代観の変化―」『旧石器研究』10、11-22。

町田洋・新井房夫 (2003)『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺』東京大学出版会。

第６章　総　括

第１節　検出した遺構の年代と分布

今回の調査では、竪穴住居跡８軒、方形竪穴１軒、ピット６基を検出した。遺構の年代が比定可能なものを整理すると、弥生時代末～古墳時代初頭がSI2・7、古墳時代前期がSI1・3～6・8、Pit2である。遺構の重複関係ではSI5よりSI8が新しく、また重複関係は明確ではないが、出土遺物の時期差からSI3よりSI4が新しく位置づけられる。

遺構の年代については、出土した土器の編年以外に、SI2出土の炭化材と、SI7炉に堆積していた焼土・炭化層から土壌洗浄によって抽出した種子について年代測定を行い（第４章第２節）、ともに弥生時代後期という測定結果を得ているが、実際の出土遺物の様相からは、古墳時代初頭あたりに比定するものと考えられる。年代分析報告においても、SI2の炭化材については年代が下がる可能性が示されており（第４章第１節）、また炭化種子が出土したSI7炉についても、複数回の修築の痕跡が確認されているため、使用年代と遺構を廃棄した年代（遺物が埋没した時期）の差があったと推察できる。

今回の調査区では確認できた遺構数が少なく、時期的にも近似していることから、遺構の分布傾向には差異がみられなかった。土地の利用状況については、検出した遺構はすべて尾根の頂部に近い平坦な面に構築しており、傾斜面では耕作の痕跡以外、遺構を確認することはできなかった。傾斜面の利用状況については、耕作に伴う切土や土壌改良などの撹乱によって削平されてしまった可能性はある。ただし、古墳時代前期の遺構が平坦面に集中して検出される状況は、隣接する前付遺跡においても共通する分布傾向である。

以下、土地利用の変遷については、同小丘上に立地する前付遺跡・大祥寺遺跡の発掘調査成果とあわせ、以下のとおり示しておく。

○時代別遺構検出状況　（太字が馬場遺跡）

旧石器時代　：**遺構なし　石刃状剥片〔131〕**
縄文時代草創期　：遺構なし　尖頭器（大祥寺〔100〕、前付〔第176・177図73～76〕）
縄文時代早期　：**遺構なし　押型文土器・下吉井式土器・撚糸文土器**
縄文時代前期　：**遺構なし　木島Ⅷ式土器**
縄文時代前期後半　：大祥寺 土坑１基〔SK26〕
縄文時代中期中葉　：**遺構なし　五領ヶ台式土器**、前付（井戸尻式期）竪穴住居３軒〔SI6A，14，19〕
縄文時代中期後半　：前付（曽利式期）竪穴住居５軒〔SI6B，16，26，29，31〕
弥生時代末～古墳時代初頭：ＳＩ２・７
古墳時代前期　：**ＳＩ１・３～６・８、Pit2、Pit4**
前付 竪穴住居20軒〔SI7～13，15，17，18，20，21～25，27，28，30，32〕
８世紀中葉　：前付 掘立柱建物跡２棟〔SB1・2〕、竪穴建物跡１軒〔SI1～3・5〕
11世紀前半代　：前付 竪穴建物跡１軒〔SI4〕
15～16世紀初頭　：大祥寺 建物跡２棟〔SB1・2（第１回線）〕、テラス面〔SD5〕
18世紀前半　：大祥寺 建物跡２棟〔SB1・2（第２回線）〕、テラス面〔SD1〕
近世以降　：**耕作痕**、大祥寺 経石埋納遺構〔SK1〕

第２節　遺物の出土傾向について

馬場遺跡では、長年畑地として利用されてきたこともあり、調査前より弥生時代末から古墳時代前期の土器片が地表面に散在している状況を確認していた。今回の調査区においても、遺構確認面まで約30～40cmと浅く、遺物が耕作の撹乱によって広く散在していた可能性があった。土器類の遺構別重量をみると、出土

遺物の総重量 37,881g に対して遺構外出土遺物は 4,849g と約 1/8 程度であった（表５）。耕作の影響で遺物が原位置を留めていなかったことや、遺構ごと削平されたことで出土量が減少していた可能性は否定できないが、計量の結果は基本的に竪穴住居跡単位でまとまって出土したことを示している。

各遺構ごとの出土遺物の組成と編年時期については、本章第４節で触れることにする。また、縄文時代早期・前期・中期・晩期の土器片、須恵器甕片の出土を確認したが、いずれも遺構に伴わず、後世の遺構や撹乱中からの出土であった。

第３節　遺構の特徴について

馬場遺跡で検出した竪穴住居跡の特徴については、遺存状況が悪く、他遺跡との規模的な比較は困難であった。しかし遺構の構造については、粘土を炉や床面の構築材として多用しており、地域的な特徴にあげられる。貼床は床面積のほぼ大半を占めており、さらに約５㎝～ 10㎝程度ではあるがベッド状遺構も構築されている。前付遺跡で検出した古墳時代前期の住居跡でもベッド状遺構をもつ事例はあるが、厚みがあり、明確に硬化している貼床が構築されているものは確認できていない。

また、馬場遺跡で検出した竪穴住居跡のうち５軒に炉跡があり、さらにそのうちの４軒は土手付き炉または粘土貼り土手付き炉とよばれる構造であった。土手付き炉は、炉に枕石として石材を用いず、それに代えて地山を掘り残したり、粘土を貼り高めている構造をいう。また、炉や貼床は粘土を用いて複数回の修築を行っている状況が確認でき、粘土敷炉ともいえる。炉の構造としては、掘り直しではなく、焼土の上に床面とともに粘土を貼り、炉床を平坦に整えている状況が確認できた。弥生時代末から古墳時代前期の炉の構造については、保坂康夫氏の論考と、その後稲垣自由氏による住居構造についての論考で集成されている。曽根丘陵地域では立石遺跡、宮の上遺跡、上の平遺跡、米倉山Ｂ遺跡などの事例が報告されている。

今回の調査では、貼床に使用された粘土について土壌分析を実施した。最も遺存状況が良かった SI4 の貼床をサンプルに、テフラ分析を実施した。（第５章参照）。これは貼床に用いられた粘土が、基本層序のうち、どの層に由来するかを目的のひとつにして実施したものである。調査時の所見では、SI4 は基本層序Ⅲ層（第２図参照）以下まで掘り込み、粘質土を敷き固めて構築している状況が確認できた。外見上では同Ⅳ層に近いと観察していたが、分析成果ではその可能性が低いとしている。また分析と調査状況から、Ⅲ層以下まで掘り下げ、Ⅱ層以上の堆積物の混合物を利用しているものと推定しておきたい。

第４節　出土遺物の組成について

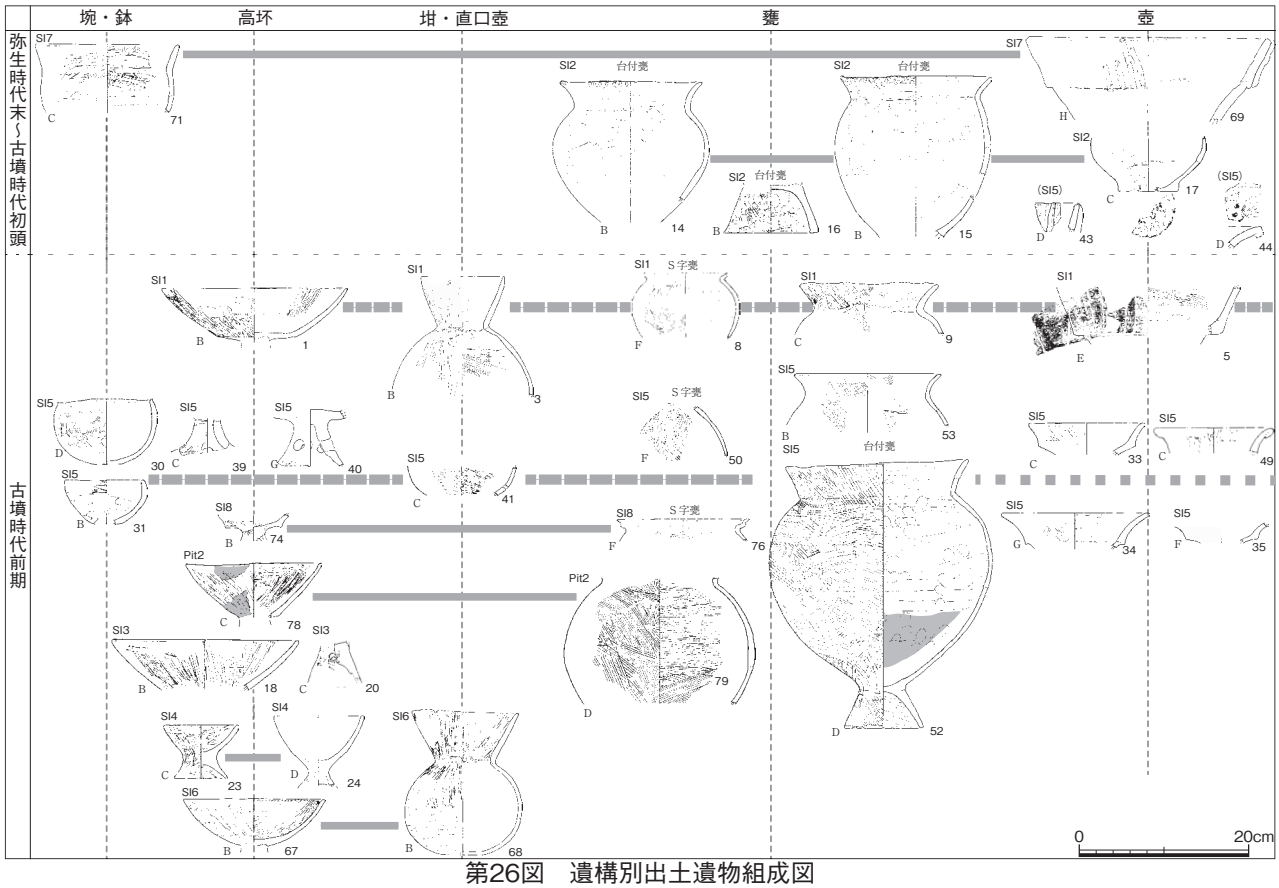
本調査で出土した遺物は、年代的には弥生時代末から古墳時代前期、概ね４世紀代半ば頃までに位置づけられる。破片資料が多いことから、各資料についての詳細な土器編年との比較・比定は今後の課題とし、ここでは出土資料の組成を示すため、第 26 図に遺構別の遺物組成図を掲載した。同図では時期区分としては弥生時代末から古墳時代前期初頭段階と古墳時代前期段階に分け、横軸に遺構ごとの組成を示している。また遺物の左下には遺物観察表の胎土分類（粒度：A~H、表２参照）をあわせて記載した。SI2・7 の時期については前述のとおりであり、古墳時代初頭でこれ以降の住居跡とは時期的に区切ることができる。古墳時代前期とした遺物については、土器編年では、甲斐編年古墳Ⅲ期（小林 2015）段階に位置づけられるものが多数を占め、最も新しい段階に比定されるのが SI4 から出土した高坏で、古墳Ⅳ期に下る可能性がある。

また表５を器種別にみると、壺類よりも甕類の出土量が多い傾向がみられる。煮沸に使用する器形が多出しているのは、炉を複数回修築している状況にも合致しているといえよう。なお、SI1 については壺類の重量が甕類より多くなっている。個体の重量が少ないＳ字甕を伴っていた可能性もあるが、元々遺存状況が悪いことが主な原因と推定している。その他、Ｓ字甕の出土量が少ないことや、弥生時代末に位置づけられる口縁内面に布目がつけられた壺も僅かに出土しており、今後は前付遺跡出土資料や、周辺の立石遺跡・上の平遺跡を含めた土器組成および編年について、さらに検討していくことが必要である。

表５　出土遺物重量表（土器類）

遺構名	器種	甕類				壺類				坏・鉢類				その他(判別不可・須恵器)				縄文土器			
	遺構別合計	No付	一括	実測	合計	No付	一括	実測	合計	No付	一括	実測	合計	No付	一括	実測	合計	No付	一括	実測	合計
SI1	2,849	357	79	285	721	70	40	1,580	1,690	80	2	190	272	0	46	81	127	0	0	39	39
SI2	1,761	33	38	1,406	1,477	178	0	63	241	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	41	41
SI3	2,299	644	900	40	1,584	54	48	56	158	111	0	159	270	170	90	0	260	22	4	1	27
SI4	2,696	830	360	290	1,480	468	8	70	546	130	20	268	418	140	78	0	218	0	0	34	34
SI5	17,643	4,534	7,212	2,197	13,943	853	288	488	1,629	246	210	549	1,005	0	894	11	905	53	45	63	161
SI6	975	120	22	0	142	48	0	528	576	0	0	237	237	20	0	0	20	0	0	0	0
SI7	1,237	74	200	0	274	121	49	753	923	0	22	0	22	0	18	0	18	0	0	0	0
SI8	656	153	198	26	377	122	44	7	173	0	12	40	52	0	18	0	18	0	0	36	36
SI9	8	8	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(SI10)	52	25	10	0	35	12	0	0	12	0	5	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0
旧SD1	1,516	400	857	69	1,326	12	40	0	52	0	5	22	27	0	22	0	22	5	0	84	89
SD2	418	80	238	0	318	0	0	68	68	0	26	6	32	0	0	0	0	0	0	0	0
Pit2	672	74	11	240	325	34	0	13	47	60	0	240	300	0	0	0	0	0	0	0	0
Pi4	250	0	0	0	0	0	0	242	242	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8
出土遺物重量	33,032			計	22,010			計	6,357			計	2,640			計	1,590			計	435
遺構外出土遺物	4,849																				
土器類総重量	37,881																				

（単位：g）



第26図　遺構別出土遺物組成図

第５節　まとめ

馬場遺跡発掘調査では、弥生時代末から古墳時代前期までの集落の痕跡を確認し、さらに旧石器や縄文時代早期･前期の遺物を発見することができた。今回の調査は、隣接する前付遺跡･大祥寺遺跡の調査に携わって整理報告を実施した経緯から、その成果と常に比較検討しながら進めることができた。同じ台地上に分布する遺跡を調査したことにより、これまでの調査成果について、いくつかの相違点と課題を見出すことができた。最後にこれについてまとめ、今後の調査研究に繋げることにしたい。

まず、地理的環境による影響についてである。調査した３遺跡とも、同じ台地上に立地しているが、地点ごとに土地の利用状況や遺構の様相が異なっていた。どのくらい地形や土地環境の変化があったのかは不明だが、遺跡は東西方向に約 1.4kmの舌状地形の上に位置しており、各調査区で最大 10m ほどの標高差がある。最も標高の低い馬場遺跡であるが、小丘の両脇が水源であれば距離は最も遠く、傾斜が急な地形となっている。縄文時代中期末の集落遺構の分布が顕著であると推察するが、水場への距離、経路や道の存在などが、集落形成の要因であったことは想像に難くない。また、馬場遺跡で確認した古墳時代前期の住居跡にみられ

た粘質土を多用した床や炉の構造の差についても、土器の様相についてはそれほど差異は見出せず、人的に構築する技術より、むしろ遺構を構築した土壌や材料となる粘土が採取できる環境の差が要因であったと推察している。一方、前付遺跡 SI29 で発見した土器製作に関連する粘土塊と砂貯蔵土器に関しては、この台地上は砂が堆積する環境ではないという地形的な共通性を視点として、この砂が別地点より運び込まれたものと断定し、さらに粘土・砂粒の分析から採集地が直線距離で約 2.5km離れた笛吹川流域である可能性が得られた。この結果、同地点における集住の範囲と、土器製作という目的によって行動した範囲が捉えられた。

馬場遺跡で検出した弥生時代末から古墳時代前期の集落遺構に関しては、前付遺跡で検出した20軒と同様に、中道古墳群の形成に関連した集落である可能性が指摘できよう。この集落に関しては、前付遺跡で注目されたかご状の容器に入った炭化ご飯塊をはじめ、今回の調査でも炭化米の検出や土器に残る籾圧痕などを確認している。米食や祭祀行為との関連性については引き続き課題であるが、まずは地形的に限定されたこの場所から人々の生活の様相を捉え、周辺遺跡と比較検討することで同地域の歴史を明らかにしていきたい。

引用・参考文献

〔地誌・論考等〕
山梨教育会　1979『東八代郡誌』
境川村　1990『境川村誌』資料編　考古・古文書
中山誠二　1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題　―時間軸の設定―」『研究紀要』９　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
澁谷昌彦　2004「下吉井式・木島式土器・花積下層式土器」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』12
保坂康夫　2003「「礫敷設炉」の分布からみた弥生から古墳へのエスニシティ転換の２重構造」『山梨県考古学協会誌』第 14 号
稲垣自由　2010「弥生後期から古墳前期における住居構造の変化」『山梨県考古学協会誌』第 19 号
小林健二　2010「古墳時代における甲斐の地域社会―土器編年と墳墓の変遷―」『山梨県考古学協会誌』第 19 号
小林健二　2015「甲斐の古墳時代と土器―編年と移動を考える―」『山梨県考古学協会誌』第 23 号
稲垣自由　2015「甲府盆地における土器の地域性」『列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』
西相模考古研究会・西川修一・古屋紀之　編
〔調査報告書〕
境川村教育委員会　1993『天神遺跡』境川村埋蔵文化財調査報告書第７輯
境川村教育委員会　1998『遺跡分布図』山梨県東八代郡境川村
境川村教育委員会　1999『金山遺跡第４次・立石北遺跡第２次・京原遺跡第３次・一の沢遺跡第９次』境川村埋蔵文化財調査報告書第 15 輯
境川村教育委員会　1999『一の沢遺跡（10 次)』農村地域活性化農道整備事業に伴う発掘調査報告書　境川村埋蔵文化財調査報告書第 16 輯
境川村教育委員会　2002『西原遺跡・柳原遺跡（２次)』県営一般農道整備事業に伴う発掘調査報告書　境川村埋蔵文化財調査報告書第 17 輯
境川村教育委員会　2004『天神遺跡（２次)・立石北遺跡（３次)・北原遺跡』境川村埋蔵文化財調査報告書第 20 輯
中道町教育委員会　1993『立石遺跡』中道町埋蔵文化財発掘調査報告書第 16 集
笛吹市教育委員会　2008『中原・白戸遺跡』県営畑地帯総合整備事業寺尾地区発掘調査報告書　笛吹市文化財調査報告書第７集
笛吹市教育委員会　2012『北原遺跡（２次)』県営畑地帯総合整備事業寺尾地区支線農道第７号工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
笛吹市文化財調査報告書第 24 集
笛吹市教育委員会・山梨文化財研究所　2015『前付遺跡大祥寺遺跡』甲府・峡東地域ごみ処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
笛吹市文化財調査報告書第 31 集
山梨県教育委員会　1984『中道往還』山梨県歴史の道調査報告書第三集
山梨県教育委員会　1987『上の平遺跡　第４次・第５次発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 59 集
山梨県教育委員会　1989『鍋弦塚・米倉山遺跡　第４次・第５次発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 59 集
山梨県教育委員会　1991『上の平遺跡（第１・２・３次調査)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 59 集
山梨県教育委員会　1994『上の平遺跡第６次調査　東山北遺跡第４次調査　銚子塚古墳南東部試掘』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 94 集
山梨県教育委員会　1996『立石・宮の上遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 110 集
山梨県教育委員会　1996『米倉山Ｂ遺跡』: 米倉山ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 163 集
山梨県教育委員会　1999『うえのだいら　上の平遺跡第７次発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 173 集
山梨県教育委員会　2000『諏訪尻遺跡　境川分譲地造成事業に伴う発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 180 集
山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会　2014『古代東国と畿内王権―甲斐中道古墳群の検討から―』甲斐銚子塚古墳
史跡指定 85 周年・大丸山古墳史跡指定記念　資料集
甲州市教育委員会　2015『熊野八反田遺跡』甲州市文化財調査報告書第 18 集

おわりに

今回の馬場遺跡の調査では、前付・大祥寺遺跡の調査成果とあわせて、周辺地域の歴史のみならず、学術研究上貴重な成果を得ることができた。この成果は、調査の実施に際してご理解・ご協力を賜った甲府・峡東地域ゴミ処理施設事務組合・笛吹市教育委員会及び各関係機関、そして地元である寺尾地区の皆様や、連日の猛暑に耐え抜いていただいた発掘調査スタッフと、詳細な資料整理を行った整理スタッフのご尽力の賜物である。今後、この成果を地域教育・歴史研究において広く活用していただければ幸いである。

末筆となりましたが、本調査に関わったすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

1．調査区遠景（東から、甲府盆地方面を望む）

2．調査区遠景（南から、上寺尾・中寺尾集落方面を望む）

図版２

１．調査区全景（モザイク写真）

1．調査区全景（東から）

2．調査前状況（東から）

3．調査区近景（完掘状況、北東から）

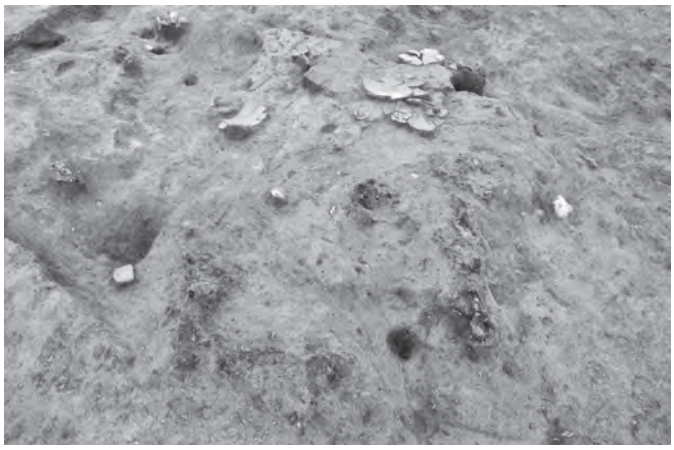
4．調査区北東端（耕作痕）

5．調査区近景（西から）

図版 4

1．SI1 確認状況（西から）

2．SI1 検出状況（西から）

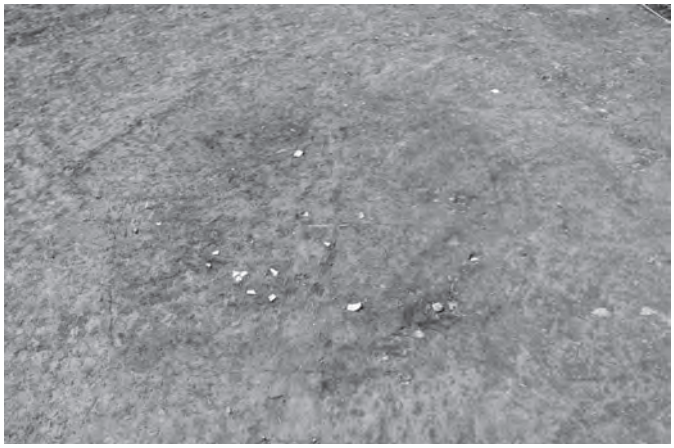


3．SI1 遺物・炭化物出土状況

4．SI1 遺物出土状況

5．SI1 出土遺物〔13〕

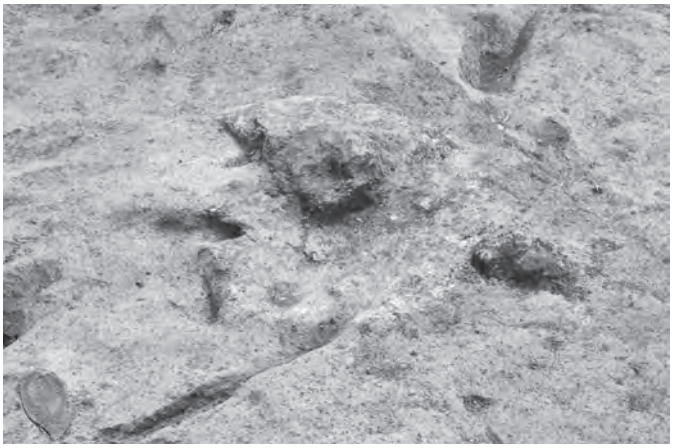
6．SI1 掘り方（西から）



7．SI2 確認状況（西から）

8．SI2 遺物出土状況（南から）

1．SI2 検出状況（西から）



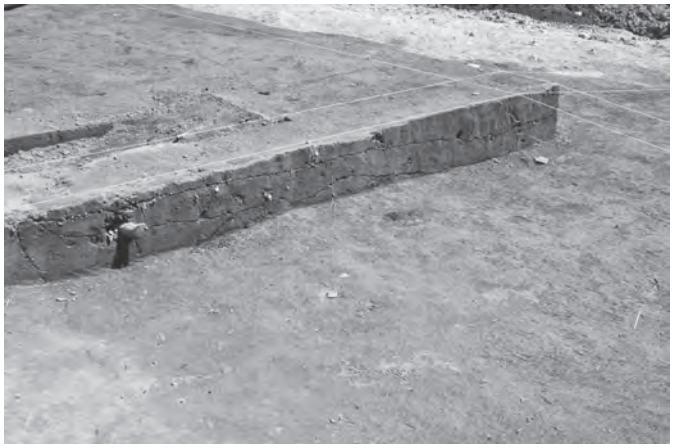
2．SI2 炉（北西から）

3．SI2 炉断面（南から）

4．SI2 炉断面（西から）

5．SI2 掘り方（東から）

6．SI3 確認状況（西から）



7．SI3 断面（北西から）

8．SI3・4 床面検出状況（西から）

図版６

１．SI3・４完掘状況（西から）

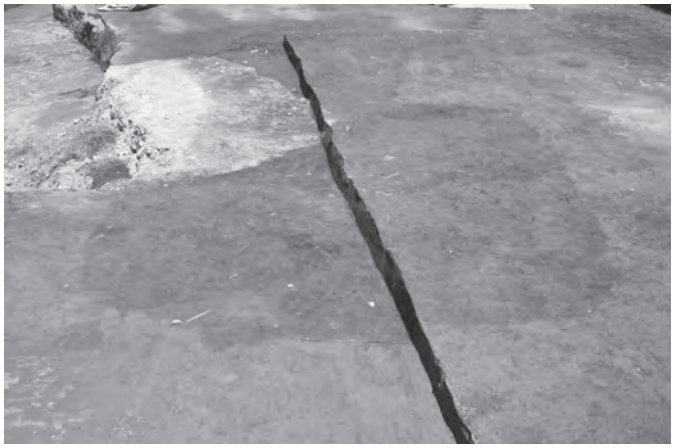
２．SI3・４掘り方（西から）

３．SI3 炉断面（南から）

４．SI3 炉完掘状況（北から）

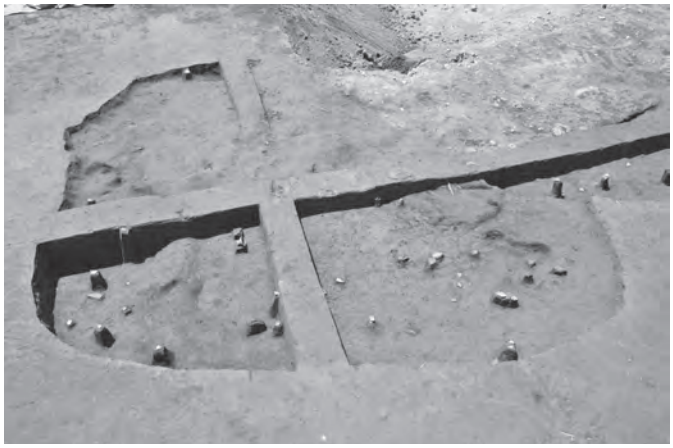
５．遺物出土状況〔131〕

６．出土遺物（旧石器）〔131〕

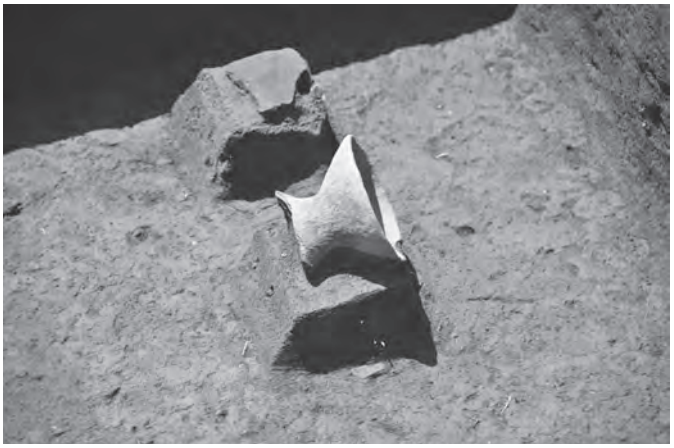


７．SI3 確認状況（東から）

８．SI3・４遺物出土状況（東から）

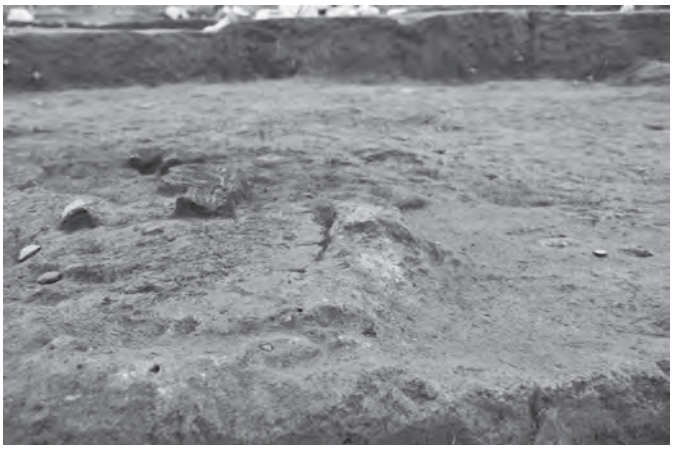


1．SI4 遺物出土状況（北から）



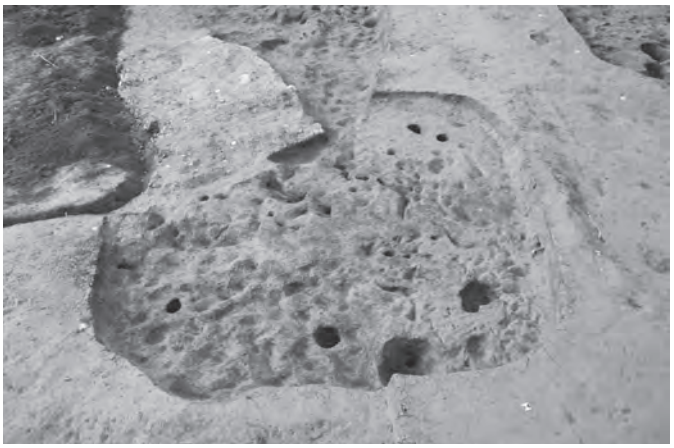
2．SI4 出土遺物〔23〕

3．SI4 柱穴・炉跡確認状況（西から）



4．SI4 炉粘土周堤確認状況（南から）

5．SI4 完掘状況（西から）



6．SI4 掘り方（東から）

7．SI4 炉断面（南から）

8．SI4 炉完掘状況（南から）

図版８

１．SI5・7・8 完掘状況（西から）

２．SI5・7・8 掘り方（西から）

1．SI5 断面（南から）

2．SI5 遺物出土および焼土堆積状況

3．SI5 内堆積焼土断ち割り状況

4．SI5 内堆積焼土断ち割り状況

5．SI5 完掘状況（南から）

6．SI5 炉断面（西から）

7．SI5Pit4 半截状況

8．SI5Pit4 遺物出土状況

図版 10

1．SI6 完掘状況

2．SI6 調査状況

3．SI6Pit1 半截状況

4．SI6Pit1 遺物出土状況

5．SI6 掘り方（東から）

6．SI7 遺物出土状況（南から）

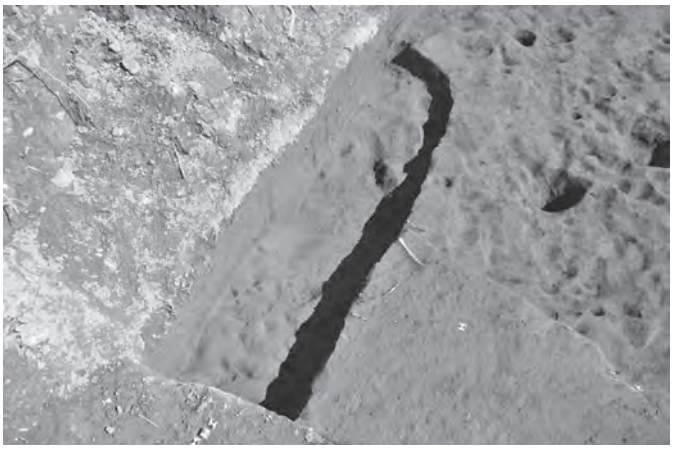
7．SI7 遺物出土状況（西から）

8．SI7 完掘状況（南東から）

1．SI7 炉（南西から）

2．SI7 炉（西から）

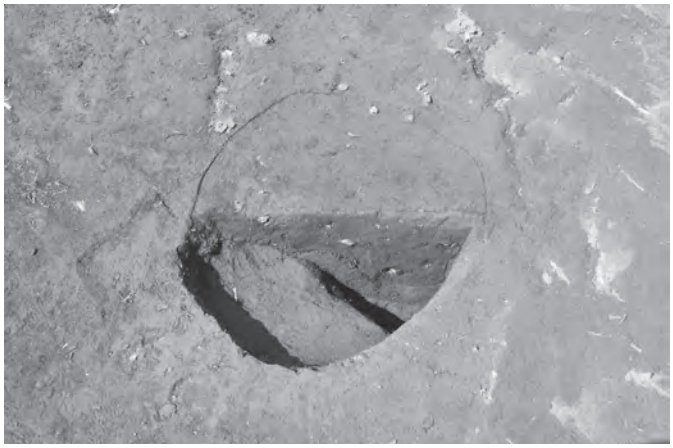
3．SI8 確認状況（西から）



4．SI8 完掘状況（南西から）

5．SI9 検出状況（南西から）

6．SI9 完掘状況（南西から）



7．Pit1 半截状況

8．Pit1 完掘状況

図版 12

1．Pit2 遺物出土状況

2．Pit2 検出状況

3．Pit3 完掘状況

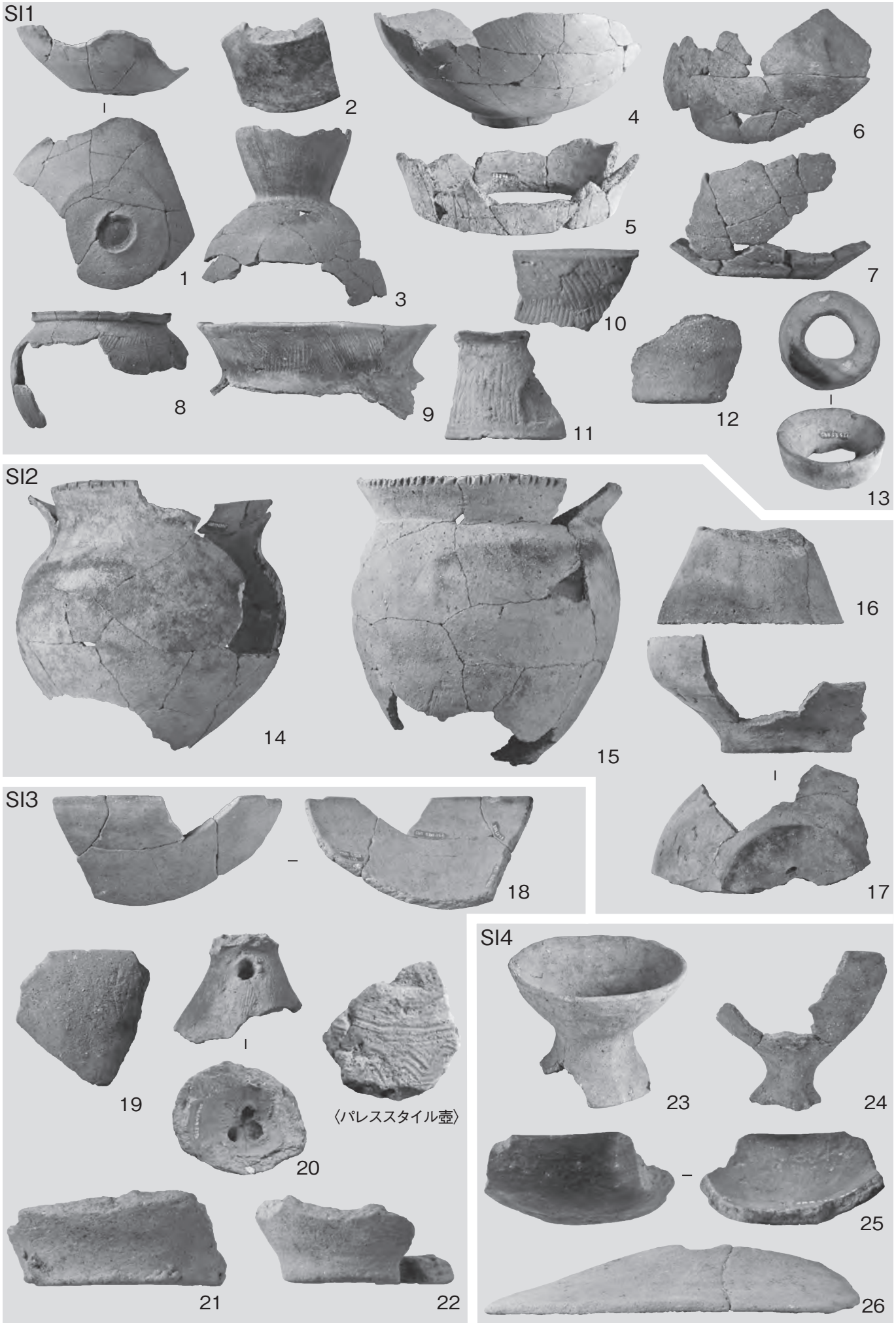
4．Pit4 検出状況

5．調査区南西端（旧 SD1）

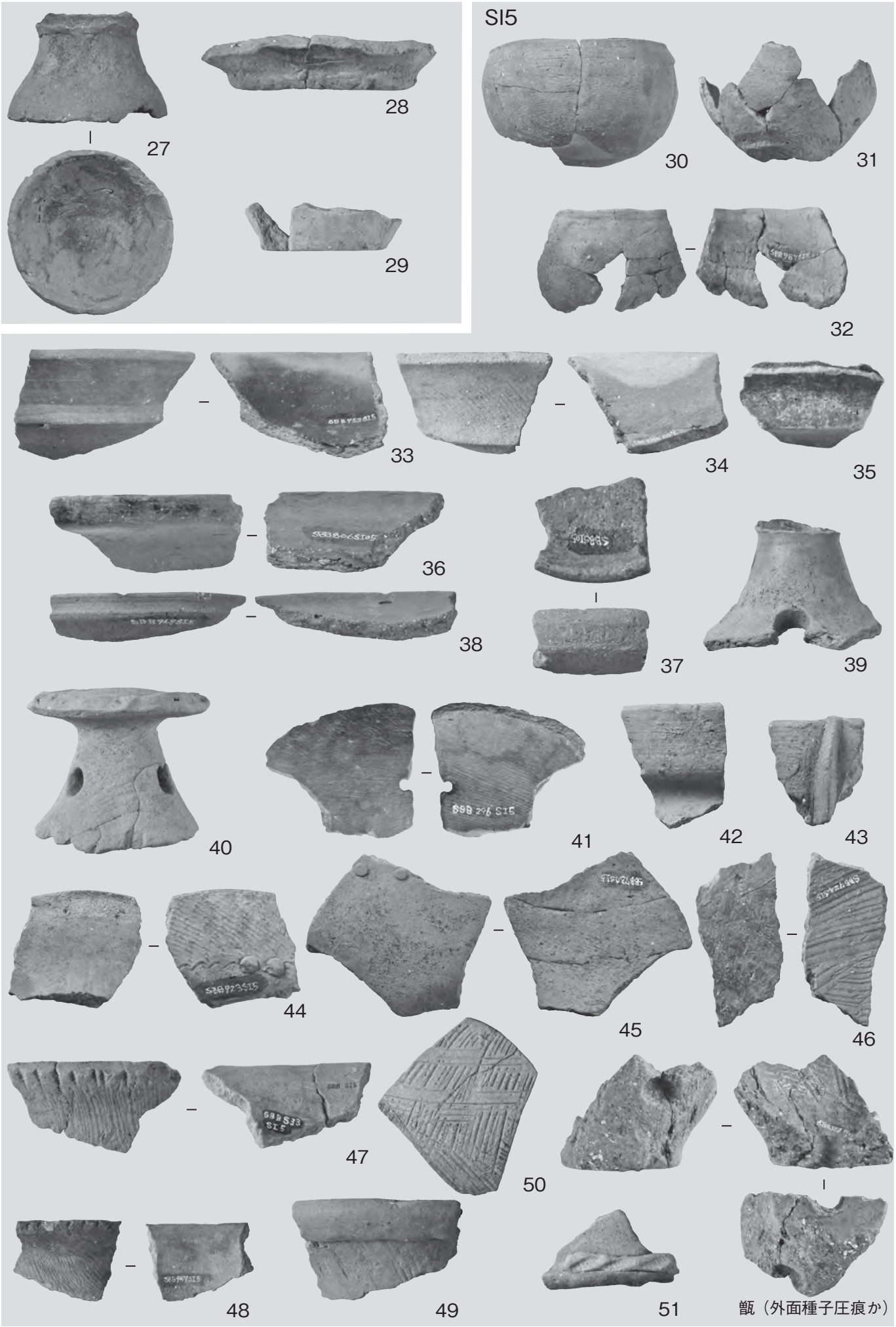
6．調査区南東端（SD2）

7．調査風景

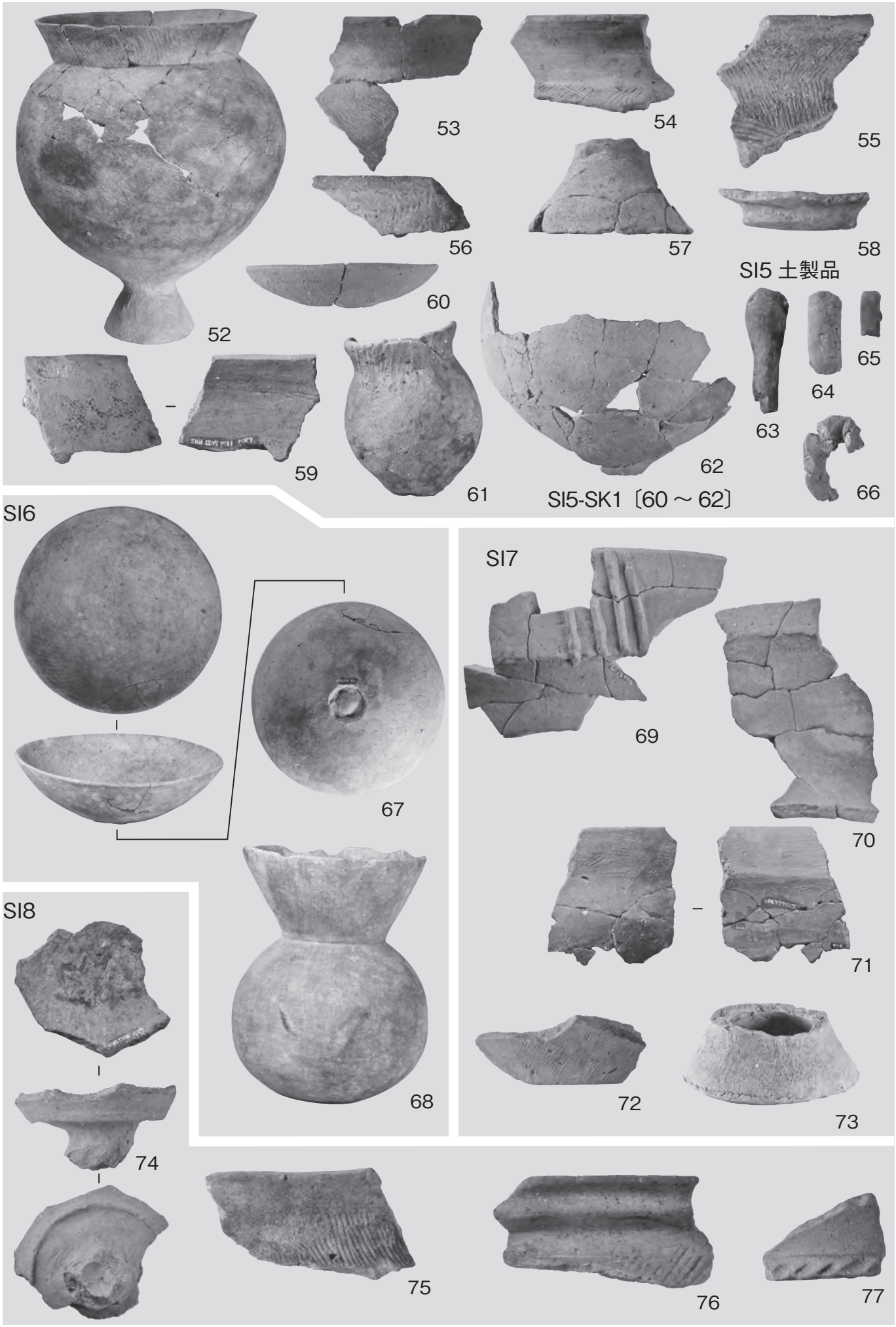
8．調査風景


SI1
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
SI2
14
15
16
17
SI3
18
19
20
〈パレススタイル壺〉
21
22
SI4
23
24
25
26

出土遺物（1）

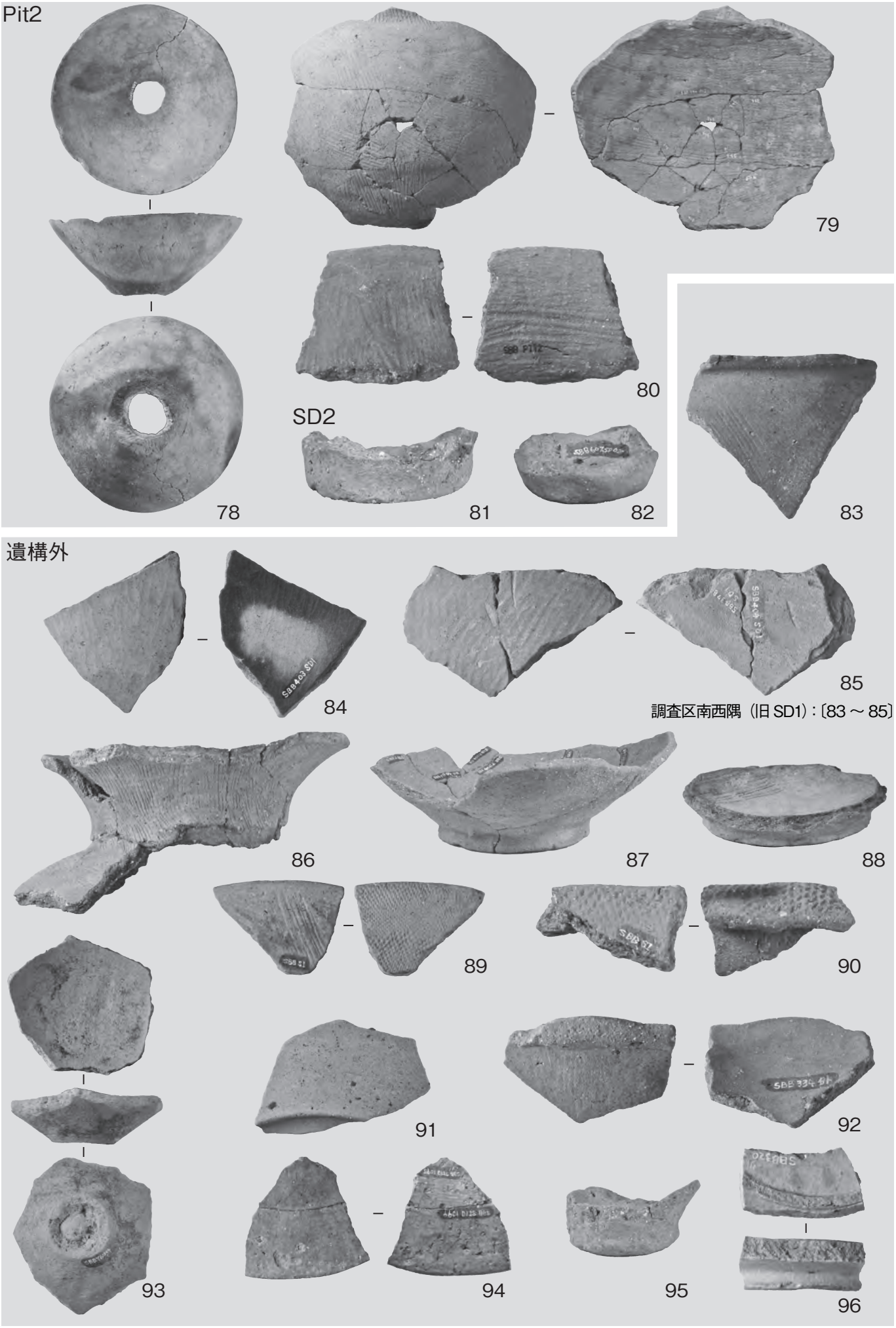

SI5
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
甑（外面種子圧痕か）

出土遺物（2）

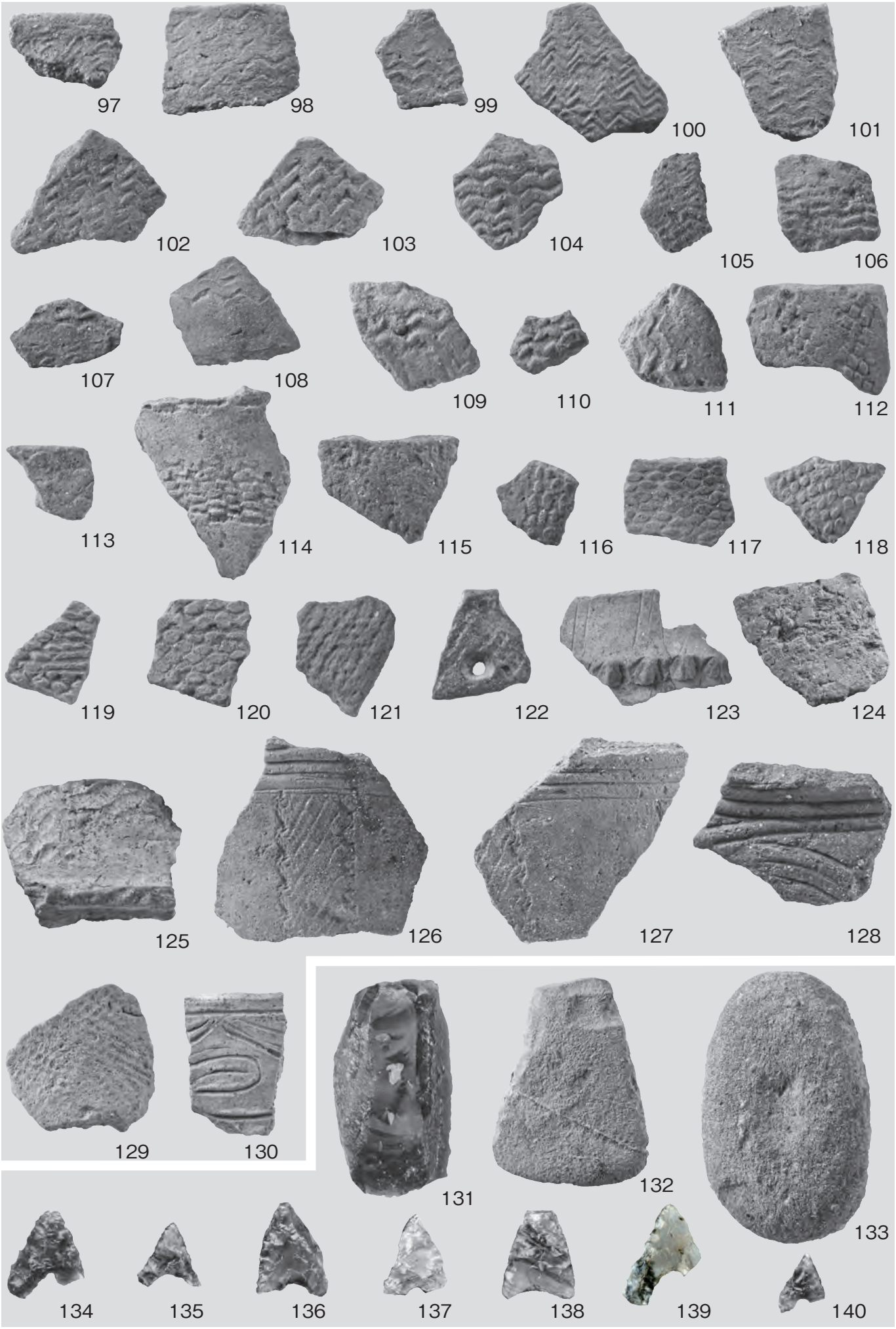

52
53
54
55
56
57
58
SI5 土製品
60
59
61
62
63
64
65
66
SI5-SK1〔60 ～ 62〕
SI6
67
68
SI7
69
70
71
72
73
SI8
74
75
76
77

出土遺物（3）

図版 16


Pit2
79
80
SD2
78
81
82
83
遺構外
84
85
調査区南西隅（旧 SD1）：〔83 ～ 85〕
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96

出土遺物（4）


97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140

出土遺物（5）

報告書抄録

ふりがな	ばばいせき		
書　名	馬場遺跡		
副書名	（仮称）笛吹市境川観光交流センター整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告		
シリーズ番号	第32集		
編著者名	望月秀和・河西　学・伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・佐々木由香・黒沼保子		
発行者	甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合（山梨県笛吹市境川町藤垈2600番地） 笛吹市教育委員会（山梨県笛吹市石和町市部809-1）		
編集機関	公益財団法人山梨文化財研究所　（山梨県笛吹市石和町四日市場1566－2）		
発行年月日	平成28（2016）年3月25日		
ふりがな	ばばいせき		
所収遺跡名	馬場遺跡		
所在地	笛吹市境川町寺尾地内		
市町村コード	19211	遺跡番号コード	境川-131
北緯・東径	北緯35度35分06秒、東経138度35分47秒〔グリッド：C-5（X＝-46020,Y=8760）〕		
調査期間	平成27年７月１日～平成27年９月30日		
調査面積	約1547㎡		
調査原因	（仮称）笛吹市境川観光交流センター建設		
種別	集落地		
主な時代	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代		
主な遺構	竪穴住居跡、ピット		
主な遺物	縄文土器、土師器、須恵器、石器、炭化物		
要　約	長年畑地として利用されていたことに加え、遺構確認面までの深さは約30㎝と浅く、検出した竪穴住居はほぼ床面のみが遺存している状況であった。出土した遺物はほとんどが小片であったが、柱穴跡または土坑内に埋納した完形に近い土器を検出した他、石刃状剥片や縄文時代早期～前期および中期前半頃の縄文土器なども出土しており、同地域の生業を示す資料を得ることができた。		

馬場遺跡

―（仮称）笛吹市境川観光交流センター整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書―

2016年３月20日　印刷

2016年３月25日　発行

編　集　公益財団法人山梨文化財研究所
山梨県笛吹市石和町四日市場1566-2　℡ 055-263-6441

発　行　甲府・峡東地域ごみ処理施設事務組合
笛吹市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

印　刷　（株）帝京サービス

Fuefuki City Archaeological Report Vol.32

Archaeological Research of Baba site

Archaeological Survey Report prior to the development of

the Fuefuki City Sakaigawa Tourism and Exchange Center
（tentative name）

2016

Kofu/Kyoutou Region Garbage-disposal facility Union
Fuefuki City Board of Education
Yamanashi Research Institute of Cultural Properties